

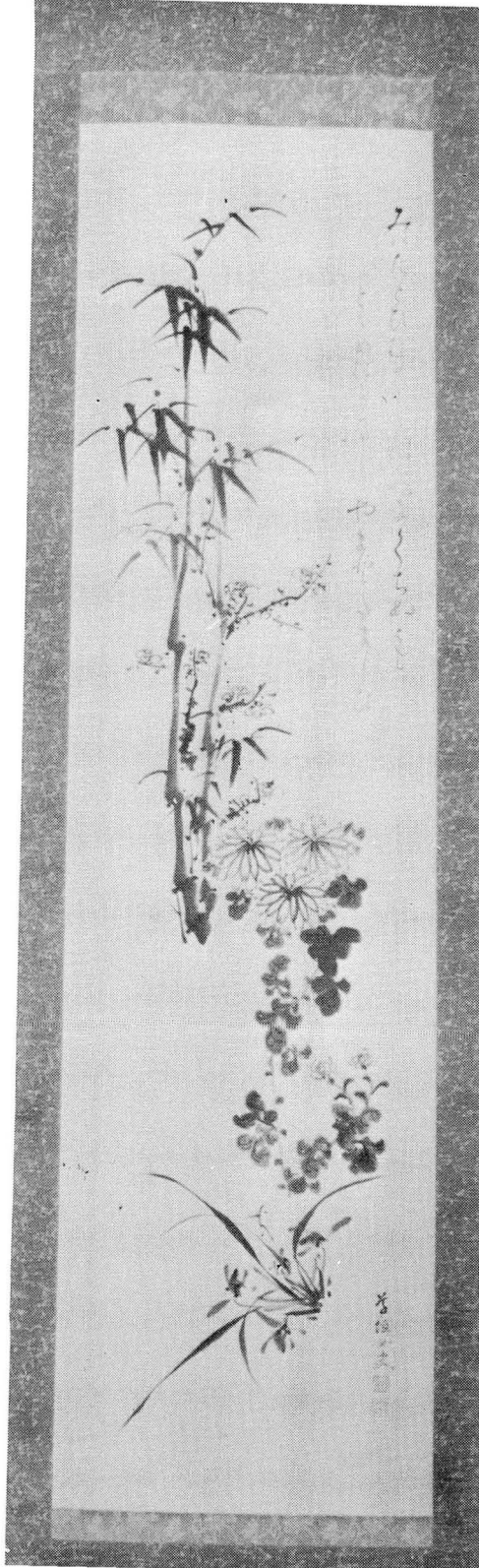
あさ

第 15 号



47-2 春季号

まつき・そうえん女史彩管、四君子。



河合重弥氏藏

(本文23頁参照)



閑院様と歓談される松木先生御夫妻 於松籟閣

目次

“あさ” 第五卷 第十五号

巻頭言 Ⅱ腹能大字提唱Ⅱ

松木天村 6

天
籟

——新しい道——

8

昭和七〇年代の展望

閑院純仁 12

新しい道提唱Ⅱ京都大講演会講演要旨

人間に内在する無限力の場を開発する

松木天村 34

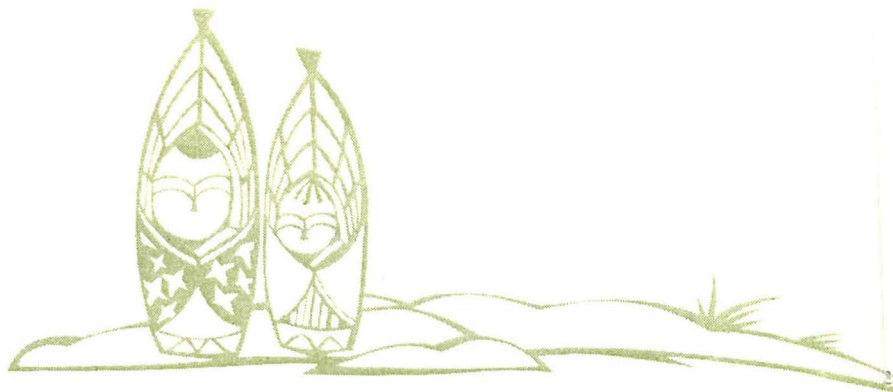
皇国の支柱たらん“新しい道”

齊藤長太郎 49

信濃路随行記

長瀬英二 53

グラフィヤ



新しい道と松木天村(五)

22

ドナルド・カーチス著 「黄金の橋」 紹介

76

日本見たまゝ

ジナ・サーミナラ

80

みち

八木隆明
 広田定一
 島本敬一
 中川皓策
 児玉亀太郎

117

臥薪賞胆(がしんしょうたん)

八木隆明 110

竹の雪

高坂甚之助 74

雄叫び(一)

伊藤誠治 60

文芸

浜地文平

松田鈴香

末竹直一 73

表紙・和歌山道友 若林昌峰氏画「牡丹」
 書 甫田鶏川、加納如雷、カット 小野義明



京都大講演会壇上の苑主先生

すぎこしの

神代の道や

ここにそびゆる

特集 あたらしい道

卷既立


“腹能大学”提唱

“新しい道”提唱者

砂子五村

交通戦争、公害問題、或はゴミ戦争など—
社会情勢の悪化もさることながら、われわれ
が最も憂うべき問題は、学校教育の在り方が
人間形成（立派な日本人をつくる）の路線か
ら逸脱して、知識偏重に陥り点数主義に墮し
ていることである。

然も、教育のアメリカナイズは民族の独自
性（日本人の持味）を喪失せしめている。素
より人類共通のものを求めて、それを推進し、
調和の道をひらくべきことは論をまたないが、
自然国家（他の国に類例のない）日本の文化
や伝統は、人工国家アメリカとは、その原点



において異なっている。原点とは、魂の問題である。

西洋は、智脳の働きに主体性を置く民族であり、われわれ東洋ことに日本は、頭脳知（心）でなく、腹脳知—魂を主体性とする民族である。こうした東西民族性の相異は、恰も柿とリンゴのようなもので、たとえ同じ果物であっても、柿とリンゴの持味は大変な相異がある。もし、柿がリンゴと同じような味になったら、柿の価値はなくなってしまうし、柿は柿、リンゴはリンゴと、お互にその持味を發揮することが調和への道である。

如上の意図をもって、人間の原点たる「魂」を主体性とする、人間形成を目指す「腹能大 学」創設を茲に提唱する。

新刊「人間に内在する無能力の場を開く」（新しい道センター刊）は、この問題を解明、論述する稀有の書である。

—— これだけです 新しい 何もかも 天からの 見すえです 天が見ている 天が見てくれ
ている だから言うんえ おい どうー — — — — — どうー — — — — — これだけです もうお分り
でしょう 喜んでくく どうやくく この道のお方 自分で自分を 成程々々 もう一つ なぐつ
てごらん 素晴しいわな これだけです へいくく もう分ります ほらくくほらく — — — —
ほらくくくくく ほらく — やい どん さあ — — — — — こういいう道で ございます

新しい道 みたまさん どんくくどんくく はずみにはずみ はずましている どうしましよ
う そうしたら 夜の夜中に 大分のお方が みたまさんは 抜けて出ている 夜中にやで ぬけ
て行くんえ そうしてな 何か かにか 天網に ご用があるんやで ですけど 昼間の 皆ん
なあは どういいうことだろう その塩梅を どうとります

ほらくくまあくくま — — — — — こういいう道 ご用じゃはなあ 用があるから こういいう道がある 用
がないんなら こんな道は 必要がない こう言います 用があるんえ 何時もくく ご用です
分りました

新しい道は 天即理 こう申します どうでしょう 天即理 これが本当 この道は 元の理 元
一つの理 あらまあ まあ — — — — — 元からなつた 元々々 元の元や こう申します

新しい道は 天即理 こう申します

どうでしょう 天即理 これが本当 この道は元の理 元一つの理 あらまあ
元からなつた 元々々 元の元 こう申します

昭和四十七年一月八日 天人まつき・そおえん女史語録抄

天人まつき・そうえん女史伝記

新刊

矛盾を起す

この異色の伝記は

平凡な一女性の生い立ちから
生きながら天に上昇する迄の
奇しき運命の物語りである
しかし

彼女の盤根錯節の人生とともに
世にも稀れな
神と人間が結ばれる神秘の世界が
手に取る様に描き出されている

上制函入

A 5 版

七八五頁

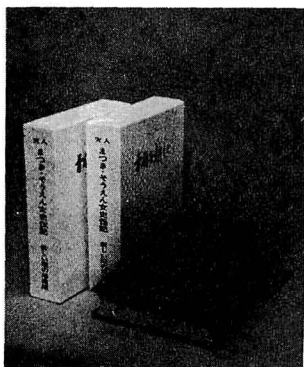
写真版

二六頁

頒価 二、五〇〇円

〒 一、二〇〇円

新しい道センター出版部



大阪府羽曳野市埴生野二九四

昭和半世紀後半の展望

岡院純仁

世にのし出すべきとき

富士山麓山中湖畔の一隅に、二十数年来定住する老碩学の士がある。その国を思い、世を憂える熱情は、数多い文献となつて、重患の浮世に啓蒙の役を果している。

静寂な山荘の窓から、日夜靈峰を仰ぎながら湧き出でる透徹した思索は、まさに、現代に対する警醒の、ことばとして、われわれに示唆するところが多い。

こゝに、その著「未来学原論」（昭和四十三年十月二十四日発行、財団法人文化建設会編）を素として、来るべき時代を考察してみよう。（本稿中括弧を附して託す数字は本書の参照頁を示す）

数年来、人口に膾炙した一九七〇年代もいよいよ本番の期に入ろうとしている。
今年は、果して、どういう年であろうか。

天人女史が、天のしいまわしによつて、「国が危ない」と叫ばれてから、まさに二十年、国は、ます

ます危うく、世は、いよいよ暗い。内には、赤化の危機、外には、核戦争の脅威、また、現代社会生活上のあらゆる不合理、無軌道、等々、人類滅亡の不安は外ごとではない。

この世界の末期症状は、天の経緯による「新しい道」が、世にのし出す以外には、救済の道はない。天人女史は、切々と、天のせき込みを、われわれに伝えられている。われわれは、天の声を畏み、本年並びに本年以後の難局に、きおいを新たにし、しかもこの道に志す者の基本的心構えである下座（謙虚な心）に徹して、真剣に立ち向わなければならぬ。

「新しい道」が、その使命を果すべきときは、迫りつゝある。道友の使命感は、いよいよ、燃えさかる。

アジアの曙

明治百年の語は、もう時期後れのものとなつたが、あらあら百年の日本の過去の歩みを振りかえつてみると、明治維新によつて、封建社会から近代社会に脱皮し、民権の樹立（憲法制定、国会開設）と、国防の完備（建軍及び軍制の確立）と、社会制度の確立（教育、治安、経済制度の確立）とをなしとげたわが国は、日清、日露の両戦役によつて、民族意識を高揚したと同時に、アジア諸民族にも、刺戟と自覚とを与える先駆をなした。

両戦役は、辛勝の経過を踏みつゝも、結果は大勝であつた。それは、明治維新の総仕上げでもあつた。白人の東洋侵略は、この時、基本的には、すでにブレイキをかけられたのである。

アジアは、その後百年、（明治維新以来）即ち今日にいたるまで、欧米には常に一籌を輸してはきたものゝ、アジアの曙は、こととき早くも、根をおろしたといえるであろう。

ついで、第一次大戦は、全盛の歐洲に没落の一步を近づけた。その後、ナチス独逸の勃興を見たが、

これは、飽くまで一時的、変則的の現象にしかすぎなかった。

第二次大戦は、前大戦後、欧洲に取って代って、全盛を極めた米国に、黄昏を告げる契機とはなった。米国は、たしかに戦勝国であった。そしてその全盛は、その後二十余年つゞいたが、結局は、衰運の道にさしか、つたのである。

そこに、物質文明の限界を見る。また日清、日露の役から大東亜戦争にいたるまでの一貫した真の意義を知る。(15・138)

近代は、以上のような目まぐるしい変遷をくり展げたが、今や、数千年の昔、東洋文化が栄えた周期に、回帰すべき時代が廻り来たと感じられる。長い長い白人支配の世界は、終焉が近づいている。

西洋文明の行き詰りが、切実に感ぜられる今日、西洋文化(主として物質文化)東洋文化(主として精神文化)との主役の交替は、当然の帰趨と察せられる。103)

アジアは、今、曙である。

グローバリズム (Globalism) 時代

老碩学の士は、未来学をグローバリズム(3)の語をもって説明している。総合的、全体的の体系という意味であろう。また球体を意味する。完全或は立体的という意も含んでいるであろう。

西洋的の思考は、すべて分析的、部分的に於て、すぐれているけれども、総合的、全体的見地に於て欠ける点が多い。東西それぞれ特徴があり、共に人類の進歩に貢献していることに変わりはないが、今日東洋文明は、西洋文明に比して著しく影をひそめ、反対に、西洋文明は、極度にまで発達している現状に於て、その弊害が顕著に現われてきた結果が、近来の人間社会の行き詰りを招いている。

これからは、どうしてもグローバル（総合的）の方向に進むのでなければ、現代文明の危機を逃れることはできない。即ち、東洋文明の抬頭が待望される所以である。

東洋文明は、中国に、或は印度に、古くから貴重な伝統を有しているが、現在の共産中国の将来は甚だ不安定であると考えざるを得ないし、印度は国家としての力はない。将来の東洋に於て、中心を為すものは、当然日本国であり日本民族であることはいうまでもない。（9）それは、アーノルドトインビーや、ハーマンカーンなど西洋の未来学の権威者も、ひとしく公言しているところであり、近い将来、東洋文化が、西洋文化に代えて、世界をリードするとなれば、日本がその先達たるべきは、必然である。それは、現実的にもそうであるし、天人女史の説かれる如く本質的にもそうである。それが、二十一世紀に於ける世界の趨勢であろう。しかも、二十世紀末に於て、すでにその時期に入るであろう。

而して、日本が、その責務を果すことは、決して、生やさしいことではない。ソ連あり、中国あり、その世界の大国としての権威は高い。米国も、斜陽であるとはいっても、まだまだ大国の列から落伍するものではない。その他欧洲諸国をはじめ、世界中の諸小国と雖も、それぞれの主張は無視することはできない。世界の歩みは、なかなか容易なものではない。国連の無力も、そこに原因する。

総合は、分析よりも、はるかに困難である。日本が、西洋文化に追隨して歩いた過去の道に較べて、将来進むべき総合の道は、東洋日本の本質とはい、ながら、決して、決して安易な道ではない。

グローバルイズムは、未来の創造であるといわれる。（105）未知なるもの、創造である。創造は即ち、成ってくる姿、天の摂理である。そこにこそ理がある。人間が創造するのではない。天（自然、神）が創造するのである。人間は、天の経綸に仕える駒でしかない。

これまでは、人間が、人間の智能を過信して、天（大自然の法則）を蔑にした。それが西洋文明であった。また現代の科学であり、文化である。

人間の思い上りは、今や天の審判を受けつゝある。天譴というべきか。

これからは、天の分霊であるところの、「みたま」個人々々の魂に基いて、真の人間界の創造に邁進すべきとき、智性人間の時代は過ぎて、靈性人間の時代を迎えるときである。

それが所謂グローバルズム時代であろう。また、いうまでもなく、それがこの道（新しい道）のめどう（目的目標）である。

現在の未来学

近來、世の識者は、ひとしく世の立て直り、国の建て替えなくしては、人類は、救われないことに気づいている。（一）

しかし、現代人は、凡ゆる学者を含めて、すべて智性（頭脳）によって養成されてきたものだから、その軌道でしか考える力がない。こゝ、数年来勃興してきた未来学なるものも、やはり、その範囲に止まっている。欧米の学者による所論は、なおさらそうである。即ち、現代科学の延長としての尺度で推定したものが、現在の未来学である。

二十一世紀には、日本が最優位に立つ国であろうというハーマンカンの説にしても従来の社会科学に基いて、日本を経済大国と見立てての話である。また、一九七〇年代に於て、日本は、核武装するであろうという推測も、同様な根拠によるものであろう。

そのような説は、平和憲法下の日本人としては、意外とするであろうが、公正に考えれば、この推測は、正しいといわなければなるまい。

智性文明の延長である限り、いつかは、戦争は起きる。つまり、常に戦争発生の可能性を抱えている。人間同志の闘争を絶対に回避することは不可能である。軍縮や核停などは、一つの遊戯以上の意義はな

い。平和法規また然りである。

即ち、絶対平和は、在り得ないのが智性人間社会である。それ故に、国家間、民族間の斗争は絶えない。そこに、経済大国、軍事大国は必然的に生れる。また資本主義、社会主義、共産主義の実体を見る。

こういう体制の下に於ては同一国家内、民族内に於てすら、相剋葛藤の絶えることはないのを現状が語っている。

しかし、未来学の結論が、平和を否定するようなことは、何人といえども欲しない所だから、その活路を、宗教と道徳とに求めるのだが、それは既に、人類の靈史が、その不可能を訓えている。それを可能であると考えerことは、希望的観測にすぎないと、いうべきであろう。

現在の未来学は、所詮、現代科学を基盤とする唯物史観を、一步も出ていないのである。

天のはたらく時

「未来学原論」の中に、次のように述べられている。「グローバリズムの原理」——「地球文化」——「宗教の根源」という見出しで、

共通の人類的心情の中にめばえた、宗教感情が、歴史的に、各地に育成するとき、そこに異った形態と様式とを持ち、それぞれ顕著な特徴を有する宗教をつくりあげ、各世界宗教圏を確立した。……この文明の危機を救済する新しい神の出現を希求し、東方の宗教の再発見がなされつ、あ

次に、「永遠の平和」と題して、

世界平和への、熱烈な願望は全人類の共通の意志として、深刻な世界矛盾に苦悩しながらも、戦争防止への幾多の努力をつづけている。にもか、わらず、文明の危機は、何等解決されぬのみでなく、かえつて、現実的にはいつそう激甚なる抗争を増大するのみである。

現代世界が、その文明、世界原理に立つかぎり、ついに絶滅的終局に突入することは、歴史的、原理的必然であるといわねばならない。

現実には、幾多、試みられている政治的努力、法律的提唱、或は、国連の活動、軍縮、平和宣言、世界連邦運動、宗教的平和運動、これらは、すべて現象の一时的妥協に終らざるを得ず、それが、いつそう世界の内部的矛盾を深刻化する末期症状を呈している。(63)

更らに、論旨をす、めて、「危機の根源」——「宗教、国家、観念」——「宗教の迷蒙」との標題のもとに、

人間は、宗教に、国家に、観念に、その救済を求めたしかし、宗教はともすれば、今日では現実社会に背を向けて、ひたすら彼岸の世界に逃避するばかりである。国家は人間を地域的に定着させ、權威の前に、一個の生物学的因果的存在と化せしめた。そして、観念は生命の活動を停止させ、一般的抽象性のうちに想像力を枯渇させるのみであった。

人間の歴史を作り成した宗教的なもの、国家的なるもの、観念的なものは、もとよりあくまでも人間を救わんと努力しつつ、も、ついに人間をして、今日の最大の危機に直面させたのである。(80)

以上のように、人間は、その長い歴史の上で、平和を望み、幸福を願ひ、争乱を避けようとして、色々な宗教を編み出して、これに救いを求めようとし、また、政治的、社会的各種の方途に頼ろうと試みたが、その何れもが、人類の理想を実現する、決め手とはならなかった。

見方を変えれば、人間は、天(神)の期待に応え得なかつたといえる。蓋も、天の理想は人間を幸福ならしめることに在るであらうからである。

人類は今、公害の急迫、戦争の脅威、相互の相剋等、あらゆる難関に直面している。人類将来の光明を見出そうとする未来学は、苦悩している。合理的、智性的、科学的基盤に立つ限り、それは永遠に未解の宿命である。

未来学は、神秘の分野に踏み入らない限り、或る限界を越すことはできないであろう。越すに越せない、通るに通れない道は、未来学の前途にも横たわっている。

今や、学問の時代ではない。

天のはたらく時である。昭和四十年代の後半から、また一九七〇年代以後、まさに天のはたらく時である。未だ嘗て経験したことのない人類の転換期である。

その転換は、教百年、数千年を待つことはできない。公害は刻々と人間の生命を犯し、核戦争の危機は一躑即発に迫られている。最も近い時期に於て、解決されなければ、地球上の生物はすべて、生命を終る外なきにいたろう。

いみじくも、未来学原論に於て、筆者老碩学の士は、次の如く喝破している。

「総合人間学の方法」——「現代に於ける天才の役割」——「人間科学の地球的実験」等の項の中で、真の反応と成果が、着々と具体化されるのは、正に、一九七〇年を境とする二十世紀の後半であり、しかも、この過渡期こそが最大の危険をはらんでいる。(105)……一つの文明が、まさに終焉しようとし次に来るべき大建設時代が待望される今日(104)……

かつて、優れた芸術創造とか、偉大なる真理探求は、常にある一人の天才の靈感によって導かれ、その推理と直感とによって、すべてを明にした。今日においても、この原則は、いさゝかの変化もない。(104)……

かつて、レオナルド・ダ・ヴィンチが存在し、ゲーテがあり、カントが出たように、今日、人類文明の最大の転換期に立って、かくれたる天才、まさに二十世紀的ゲーテの存在を信じて疑わないもので

ある。(104)

右は、まさに卓見である。しかし、惜しいかな、今の未来学は、龍を画いて未だ点晴に至っていない。そこに未来学の苦悩があり、未完成の所以がある。

然るに、天人女史の存在は、まさしく、未来学に点晴するものに外ならない。

科学時代の天才は智性の優れたゲータであり、カントであつたらう。しかし、神秘靈性の時代ともなれば、遙かに次元の高い天才が出現すべきことは、理の当然といふべきであらう。

今、人間は、人智人力の如何に微力であるかを、思い知らされている。人智の結集たる科学、技術、所謂機械文明といわれる現代文化が、宇宙大自然の前に、如何に渺たる存在にしかすぎないことを、混沌と公害との中に身を置いて、いやという程自覚させられている。しかもなお、多くの現代人は充分な反省を自覚していない。

人間は、あまりにも増上慢であつた。人間の分(分際、分限、本分)を知らなかつた。

人間は、天(宇宙大自然)に従うのが分である。天に従えば、平和はおのづから開けるであらう。万世のために太平は開かれるのである。

一九七〇年代から、二十一世紀にかけて、人間は、分に帰り、ひたすら天に従うべき時を迎える。

社会開発も、人間尊重も、経済優先も、自然に反逆する方向を取る限り根本的に考え直すべきである。

天は絶体である。天の支配する人間界こそ本当の人間界であらう。天意のまにまに生きる人間(生物)

こそ真の人間であらう。そこには、既に人間思案の上に立つ平和運動も、戦争放棄も、必要としない。

人間は、自我を捨て、業を去り、天に随順すべきときを迎えた。人間は、宇宙大自然に従って生きるべきである。これが人間に与えられた唯一つの平和への道であらう。

天の神秘の、はたらきが、天人女史の神秘なる存在を通じて、直接人間界に君臨される時である。

閑院純仁著

残光

—日本はこれでよかつたのか—



日本民主協会刊

定価 七〇〇円

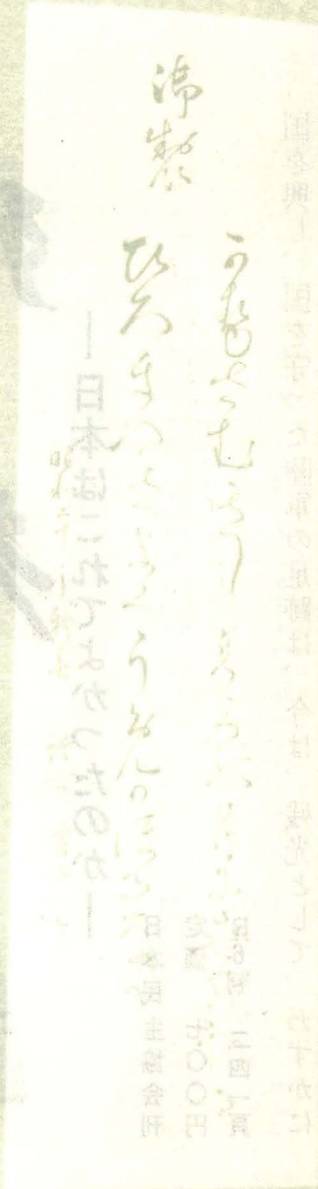
B6判 二四一頁

国を興し、国を守った陸軍の足跡は、今は、残光として、わずかに世の一隅に余命を残している。その残光は、今後新たな道の曙光に更生して、国を守り、国を興し、世を建て替える使命を担うであろう。新しい道こそ、今後の世の指標である。

(本文より)

新—道と松本天村

(五)



大垣時代 二十年～二十一年

京都時代 二十一年～二十五年

大垣時代

昭和十六年、大東亜戦争が始まった頃、天村先生は或る友人の紹介で長瀬産業の社長と縁が出来た。そして社長の要請で、子会社の興亜工業の専務となつて行くことになつた。興亜工業は海軍の軍需工場で岐阜の大垣にあつた。

昭和十九年、阪神間の空にB 29が姿を現わすようになった。躰の弱い女史は防空演習にも出れず、近所の人に氣をつかわれた。女史はもともと氣をつかう性だつた。重いものを持たない体なので演習のパケツリレーが出来ない。ご自分の出来ない分を、出来ることで何かと氣を配られた。体が弱いから出来ない、という事に甘えるような事はなかつた。配給時代である。ご自宅への配給分を近所へまわしたりなさつた。これを後年、女史は、あたらしい道は、身で果せと云われている。然し人によつて、それが出来ない時はせめてせめてものなと果せ」という理として我々に教えて下さっている。

寝たきりの病人ではなく、はたから見た目には普通であるだけに、女史には苦であつた。

近所に氣をつかう女史を見て、先生は近くの天満宮へ桜の苗木を百本寄附なさつたこともある。又そのために、「松

木さんは氣が早い」といわれたが大垣へ早めに疎開することにもなる。

十九年十二月、大垣から三里離れた安八郡の名森村に移られた。名森村は四十二軒しかない寒村である。その別荘を手に入れて二十一年三月まで住まれた。

野菜がおいしく、食糧には困らなかつたが、女史には言葉もわからず、淋しい日々であつた。しかし移つて間もなく、御影は空襲にあり、その後、二度の空襲でもとの家は奇麗に焼けてしまった。

名森の家は三百坪ほどの屋敷に、六十坪余りの家屋であつた。玄関は東向き、南側は庭で、西側は柿畠であつた。

この村の河合重弥さんは、松木家へ出入りの村人の中で、闇商売をしない律義な人だったので女史の一番の氣に入りがあつた。

河合重弥さんは当時の忘れ得ぬ印象として、こんな風に語っている。

「奥さん（女史）は、勝手の仕事をしている時は普通の姿だつたが、毎朝神棚を拝む時はきちんと帯をしめて心から拜んでいらつちやつた。何時行つてもそうだつた。これは普通の人では出来ないことだと思つた。」

彼は女史から贈られた、明治天皇の御製と四君子に吉田松陰の和歌を賛した半切二幅を立派に表装して大事にして

いる。

女史は、人の困る頃不思議とかえって不自由しなかった。徳というものであろう。女史自ら求めたわけではなかったが、この大垣時代、そして終戦後の京都清閑寺の頃にも、この河合重弥さんが食糧を運んでくれたので、物のない時代にも食べる事には事欠かなかった。

昭和二十年八月十五日、松木家は大垣で終戦を迎えた。天村先生は九月六日「終戦に臨み国民の情感を慰む」の一文を草した。その一部を次に紹介しておく。

「『聖戦は清戦に通ず』此度の帝国敗北の戦は、われわれ日本人自らを清めるべき戦いを以て、終戦となったということをわれわれは深く覚らねばならない。この国民的大自覚に到達することによって終戦の真意義に徹するのである。

日清、日露の戦捷にわれわれ国民の抱いた喜びのおもい……これとは異なれども、それ以上われわれは、此度の御聖断をかたじけなく悦ばずにはいられない。この御聖断こそ、洵に宏大無辺千載の歴史を照す御英断と、後世の子孫の仰ぎ奉る日を思うの念は、日と共に深まりゆくを覚える。若き特攻隊の尊き忠節は、空しくなったのではない。多くの英霊も決してあだに神去つたのではない。これら不朽の勲しを昭和日本の礎石として、上に畏くも聖天子を仰ぐわ

れわれ国民は、今真実なる大和民族の本来に立還らんとするのである。そうしてもう一度、世界の舞台に新しい第一歩を踏み出さんとする。しかしながらその道は遠く、且つ多難ではあるが、希望多き再建日本の耀しい門出である。……ほんとうのことを知り、ほんとうのものに触れて、高い信念と固い決意をもってわれわれは此秋、真剣に立ち上らなければならない」

京 都 時 代

大垣の興亜工業をやめられた先生は居を京都に移された。北区初音町に二ヶ月ばかり間借りされて家をさがされた。東山清閑寺に見つかった。

然し暗雲低迷去りやらず、爾来半歳は起き上るべきはおろか、生きる方途に先生は迷い苦しまれた。

昭和廿一年四月廿二日、幣原内閣退陣のラジオニュースを聴きながら、先生は「日本民主政治推進聯盟提唱論」を草された。その論旨は次の如くである。

「昭和廿一年四月十日の総選挙こそ、国民大衆が戦争の辛苦と敗戦の虚脱から起ち上り、真の民主主義国家再建への手がかりだった。ところが政界の動きは、国民の意志を無視し、独善的官僚主義と政権争奪の離合集散を繰返して

いる。よい代議士も、よい政党も、よい政治も国家も、よい生活もその出発点たる選挙の施行を正しく完璧を期さなくてはならない。それには選挙に関する一切を挙げて、われわれ国民の管理によって行おうというのである。」

天村先生のこの悲願も、現実にはあまりに遠く、発展を見ずに終った。

そこで先生は（この頃は冬村の雅号を用いておられた）
教学と道義の闡揚こそ、祖国再建の礎石との確心を得られて、民生教を創始しようと考えられた。横須賀の岳父も大賛成で次の詩を贈ってこられた。

比叡翠微緑更に濃やかなり

冬村道を説いて衆多く鐘あつまる

民生教は清閑寺より出づ

救国済民此宗に待つ

昭和丙戌中夏

安東天涯

民生教の目的として掲げてあるのを見ると次のようにうたっている。

「本教団は神、仏、基、儒教等の開祖の精神に則り、人文自然諸科学の融合を図り、統一的総合教学の創造発達を

期し、是を人生指導原理とし、人類の恒久的安寧、平和幸福を行為に依って推進実現するに在り」

そして、事業として、一、指導者の養成、二、道義闡揚運動、三、善行者の積極的表彰並に真実なる生活者に対する生活安定援護等を挙げておられる。

昭和廿一年七月の事である。

天村先生はある日京都の街中を歩いておられた。丁度その日は祝祭日だったが一本の日の丸も見あたらなかつた。

戦災を受けていない京都がこの有様とは何事かと、先生はある憤りを感じられた。そこでこの時、日の丸運動を考えられたが、まだ時機尚早と見送り、キリスト教者の顕彰を企画された。

平和の園主、古屋登世子を通じ進駐軍司令部の許可を得られた先生は、民生教の実践団体として民主文化協会を起し、京都府、京都市、国際宗教同志会の協賛を得て、日本文化貢献基督教先駆者顕彰会を昭和二十三年四月二十四日円山音楽堂において盛大に挙行された。

天村先生は顕彰会委員長として、顕彰の辞を述べられた。そのなかで新島襄の卓越せる人格と其の功業を讃え、予言

者としての内村鑑三の言行を語り、次いで次の如く叫ばれたのである。

「内村先生の子言警告は四十五年後の今日正しく適中した。軍隊の代表する日本は亡んだ。斯くして義の国日本創建の秋は与えられた。今やわれ等は剣を鋏に代え、此の荒廢の国土にメシヤ、キリストの福音を信受して世界平和のために蹶起せよ」

戦時中同志社総長であった牧野虎次氏はこの顕彰会の有力な後援者であり、当日牧野氏の「日本文化と基督教」と題する講演は聴者をして感嘆せしむるものがあった。

「義の国日本創建のため、愛と平和の使徒を顕彰す」——このスローガンの下に挙行したのである。

基督教先駆者顕彰会を契機として先生はかねての念願の日の丸運動を企画された。当時日の丸に戦争の印象が焼きつけられていたのでこれを拭い去らなければならない。そこで旗竿を緑のんだらにし、金の玉を白鳩に変えた「平和国旗」を創案された。これを戸毎に掲げ、日本国民が今後世界人として新なる自覚の下に、世界平和促進に献身の努力を致す覚悟を固める運動を提唱した。

まず京都百万市民の平和運動を展開しようと、牧野虎次氏を委員長に、京都府知事、市長、商工会議所会頭の協賛

を得、多数の名士を委員に委嘱し、先生自ら責任実行委員となり、平和国旗運動京都委員会を発足させた。

昭和廿五年三月十八日、京都新聞社後援の下に大々的市民運動を行った。戦後の日の丸運動として全国に魁けたわけである。

松木一家も清閑寺へ移る時は多少の貯えもあったし、先生の退職金も少し入った。然し先生は私財を持ち出している運動なので、二年目位から経済的に困ってきた。戦災に遭わなかったので道具類は可成り有った。それを売ってまで先生は運動をつづけられた。

その頃の事を天人女史は次のように手記されてある。

「佳子（お嬢さん）は大垣の女学校を卒業して、京都女子専門学校英語科に入学した。この時は二十一年だったから月謝も安かった。ところが直に月謝が三倍位に値上げとなり驚いた。それで私は家計を助けるため、お茶とお花の弟子をとることにした。私は病身だから、年とってきつと困る。その時愚痴っぽい年寄にならないように、近所の人にお茶でも教えて楽しむつもりで精一杯努力してきた。月謝をもらうのが本意ではなかった筈なのに、遂にそうしなくてはならなくなってしまった。それが自分も本当は恥しかった。

よんどころなく、昔の幼稚園時代のお宅に相談してみた。みな大賛成で二十人位すぐ出来た。それから花を活けにくい宿屋、料理屋等で、私の収入は結構佳子（お嬢さん）を学校へやって、家庭を支えるに役立った。只清閑寺は、ずっと町から離れている小高いところで淋しい道だった。夜の十一時、十二時になると人一人通らない。私は大きな声で歌をうたって帰ったものだった。これも修行だったと思う。

「私はお花を活けても天地人で、娘さんたちにいつも人の道を聞かしながら、つい話しに花が咲いたものだった。それで小阪（布施）では私の稽古場を大変喜んでくれた。お花の先生はいくらでもあるけれども、松木先生はよいことを話して聞かせて下さる」と非常に評判がよかった。これは藤尾先生のうけ売りをしているにすぎない。宇治の黄檗にも、花の師匠として迎えられたのもその頃である」

女史は先生の社会運動について別に異論はなく、結構なことと思っていた。私慾の露ほどもない人だが家を思わないうのには困った。何かというとき「親子三人よろこんで飢え死にする」と云う。女史にはそれが苦であった。人を指導する者が、自分の生活もようせんようでは何か矛盾している心なかで思っておられた。

民生教は教義であって、別に信者とか説教とかはないので至極都合がよいと思われるが、宗教法人にすると聞かれて女史はまごつかれた。信者のない宗教なんて不思議であり、夫が民生教管長というのが少しおかしいと思われる。

それもそれであるが、日の丸国旗運動の為に全財産を傾けて惜しまぬ夫の行動に女史は不安を感じられた。この運動をはじめた時、南という協力者がいた。紳士であったが、女史は何となくおかしいと思われた。その事を女史が云われると先生から「君はすぐ人を疑う」と怒られた。

然し結果は、女史が案じられたとうり、その男に集金した旗の代金を持ち逃げされてしまった。その後の集金は思うように入らず、債務に責められ、果ては詐欺漢の悪名を先生は背負う羽目に立ち到った。



町内、防空施設費・ポンプ購入費などの寄附をされた。

不思議なことに思いがけないまとも焼石に水で、全財産を投げ出して、まだ旗屋に三、四十万円の借金が残ってしまった。先生は身の置きどころもなくなり、ついに一人、京洛の地をはなれることになったのである。

高橋伸典氏との解返

先生は、旗の残りを捌こうと上京されたがうまくいかない。全く行き詰ってしまわれた。

友人、知人は「松木さんは自分の思うことをやっているのだから当たり前だが、あの奥さんは気の毒だ」という。

先生は「自分がいなければ、妻と娘は皆んなでもり立ててくれるだろう」と思われて、死を選ぼうと覚悟を決められた。

明治神宮の森の中で食を絶とうと、先生はある日の朝代々木に足を運ばれた。そして、もし見つかつて追い出されても困ると思ひ、社務所へ行き、「森の中で坐り精神統一したい」と了解を求めた。すると田中権宮司が出て来て「そんな無理せんでもよい、親神様がお受けなされていられる」と云うのである。

先生は社務所を出て神殿に額ずき、ふと気がつくや御造営の献金箱がある。どうせ死を覚悟したんだからと、持金を全部箱に落して立ち去りがたく苑内を歩き廻っていたら菖蒲園のところに出た。奥に入ると清正の井戸がある。清冽な水が滾々と湧いている。先生は魅せられたように水をいただかれた。水がこんなにおいしいものかと初めて知っ

た。水が恋しくて仕方がない。行きつ戻りつ三遍も飲み、今更のように水の美しさに感動を受けた。くるくる歩いてるうち初台の方に出た。ふと何げなしに見ると大和道の高橋伸典氏の家の前である。伸典氏とは、以前横浜の天理教会で遇って名刺を貰ったことがある。

先生は、伸典氏に会った。

高橋伸典氏は福島県の出身で、若い時遊蕩がすぎ肺病になった。彼の馴染の芸者が天理教の信者だったので、その縁で天理教校に入った。その時三木という霊能のある天理教の会長に会った。三木は「お前だ、お前だ、毎晩お前の夢を見た、探していたんだ」といって、水をかぶり、神懸りになって彼を仕込んだ。それから十三年間伸典氏に仕込まれたのである。

伸典氏は天村先生に「貴方は平和国旗を揚げたというが、本当の旗をあげよう」と元気づけた。そして国家的の事業は、まあ人の心からやり替えるべきだといふのである。このことが先生の胸を打ったのである。一度は死のうと決意した先生であるが、こんな理解者があれば彼の抱持ちをやりとうと、伸典氏のところに住み込むことになった。

先生は暗黒の人生のなかに一条の光明を見出して、その年の暮一応帰洛した。伸典氏にすっかり惚れこんだ先生は、女史に伸典氏を神さまのような人だとほめ称えた。女史も、

夫の性質からして、よかったと思つて大和道に行くことに賛成した。

先生は月に四、五日帰えるのみで、それからずうつと東京で伸典氏の仕事を手伝うことになつた。

昭和二十五年、夏のジェーン台風は清閑寺の寓居を襲つた。

京都東山の將軍塚には、いま東山ドライブウェイが出来て賑つている。そのドライブウェイの一方の登り口が清閑寺である。大谷廳を横切つて五条バイパスが出来、昔日の面影は一変している。

家は崖べりなので、玄関から入つたところが二階である。一階の勝手口の外は三尺位の余地を残すのみで、そこから直角に近い三米位の石崖になつていて左手に下におりる石段があつた。

台風の時、先生は上京中で不在であつた。二階の八畳の天井が一間位落ち、壁も破れた。女史はお嬢さんと一緒に土を取り除き、天井や壁は近所の人に頼んで修理してもらつた。一時凌ぎの手当をして平気で暮した。

その年の十一月、家主から突然明け渡しを要求された。さんざん交渉したが埒があかない。家主が無断で家を売つてしまつたのである。新しい家主は嫌がらせに、壁にタラ

イほどの穴をあける仕まつである。台所の棚は落ちるし大騒ぎであつた。警察はこちらの理を認めしたが、どうしようもないという。女史は娘にけがでもさせられたらとりかえしがつかないと思ひ、そこを出ようと決心された。そして先生に報告された。先生も驚いて帰宅されたものの、今更打つ手もなく、僅かばかりの引越料で立ち退くことになつた。

先生の平和国旗運動の失敗ですつからかんになつてしまつたので一遍落ちなければならなかつた。京都にも、大阪にも近いところを探した。

ある縁で西大寺の農家、森田の草屋を借りることになつた。高橋伸典氏が先生夫妻を東京へ呼ぶことになつていたので、半年位いの約束で借りた。

大阪の知人が「うちの二階へ来て下さい」といわれたが、女史は、じりじり落ちるのはいやだ、落ちるならとことんまで落ちた方がよいと思つて、西大寺に決められた。

その家は畳の間六畳と四畳半の板の間だけで、押入もなく、縁側も雨戸もなく雨が降ると障子にかかり、雨のきつい時は紙がはげてしまう。本当の草屋であつた。

女史は「自分の意志で運んだつもりだが、自然にこうされたのである。それが「ヘソ」からの追いこみ、「ヘソ」に追われて、遂に下の生活になつた」と述べられた。(つづく)

和氣志朗著

腹能大学

—人間に内在する無限力の場を開く—

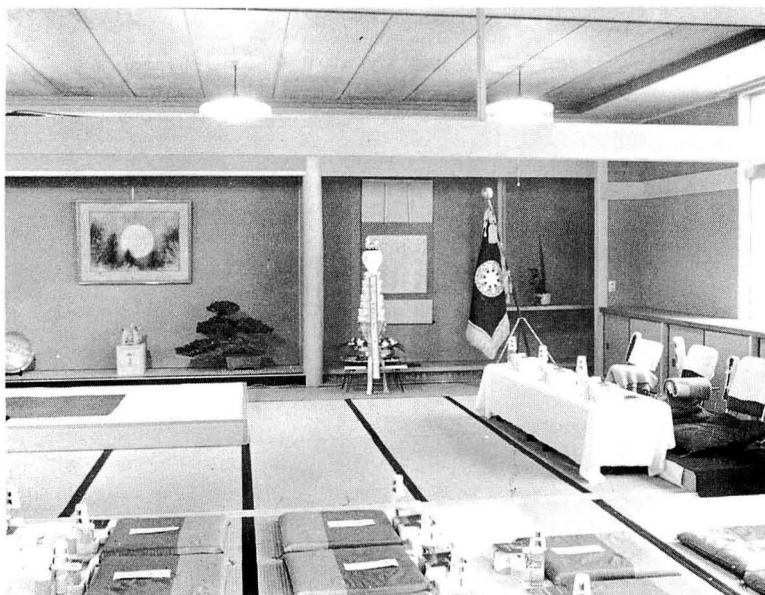


新しい道センター刊
B 6 判 二〇八頁
定 価 四八〇円

われわれ東洋、ことに日本は、頭脳知（心）でなく、腹脳知—魂を主体性とする民族である。

人間の原点たる「魂」を主体性とする、人間形成を目指す「腹能大学」の創設を提唱し、「人間に内在する無限力の場を開く」ための稀有の書である。

道の場新館落成



- 上 新館床の間
- 中 道の場西面全景
- 下 12月19日 落成祝宴の準備
なった新館

駐 車 場 約 840坪
新 館 増 築 約 620坪



会演講大唱

費奉納募金のため――

16日(日) 13→17時

際会館大会議場

司会 佐藤三蔵

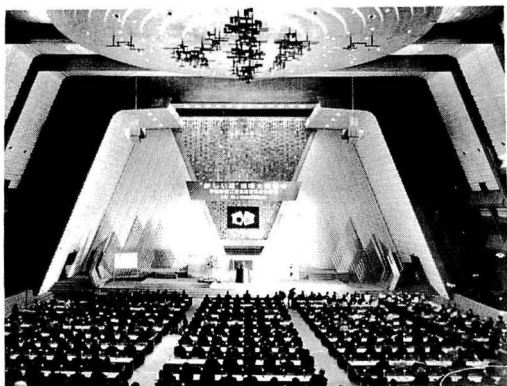
雅楽 平安雅楽会



上 洛北宝ヶ池に偉容を誇る
京都国際会館

中 新しい人間の形成を説
いて千余の聴衆に迫る
天村先生

下 平安雅楽会の奏する
“蘭陵王”



“新しい道,, 提

——伊勢神宮ご遷宮造営

と き 昭和47年1月

と ころ 国立京都国

講 師 松木天村

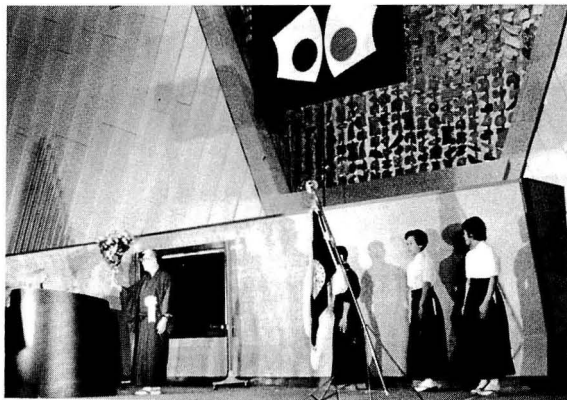
迫水久常



上 千余の聴衆に埋められた大会議場

中 手始めの音頭をとられる
 閑院純仁 氏(左)
 松木天村先生(中央)
 迫水久常 氏(右)

下 花束は武道一家の
 奥山麟之助氏によって
 贈呈された



京都大講演会要旨

時 昭和四十七年一月十六日（日）

所 京都国際会議場大ホール

人間に内在する
無限力の場を開発する

杉本五升

利害を越えて

私は、明治二十五年八月三十日生まれでございます。まさに明治、大正、昭和と生き抜いて参りました。よく私にお聞きになる方がございますが、どういう健康法をしていらっしやるか、と。

わたしは、お答え出来にくいんでありますが、健康法なんて考えたことはございません。好きなものを食べて、好きな事をして、安眠させて頂くと——これを長い間繰返して来たのだと、こういう事しか御返事出来ないのではありませんが、しかしです、何故私が今日の様な健康を維持しているかと、自分なりに、考えてみたのでありますが、それは若い時分から今日に至るまで自分の利害を考えた事がないという事なのであります。よくそんな事で生活出来たもんだなど、こうおっしゃる方もありますよすが、今の世の中の、民主主義というものは、日本的な民主主義でなくて、アメリカから押売りされた民主主義でありまして、本当の民主主義でないと思えます。日本には、古来から、いわゆる日本的民主主義、日本的共産主義があつたんであります。主義といわなくてもいいんであります。主義以上のものがあつたんであります。思想以上のものがあつたんであります。

そういう信條の生活を、私はして参りました事が、今日の健康であるんであります。例えば、タライに水を一杯汲んでおきます。十人ばかり周囲でその水を自分の方へ自分の方へと奪い合っております。これが現代の姿であります。奪い合いますから、水は半ば外へ撒けてしまい、自分の体にもかかってくる。こういう事が、今日の姿でないかと思えます。その十人の中に只一人でもいい、この水は自分の領分の水かも分らんけれども、先ずあなた方お入用ならお取りなさいと、むこうへ押してあげるんであります。そうしますと、その水はですね、この指の間から、こぼれて参りますね。そういう私は、おこぼれを頂いて生活してきたんであります。これが理でございますね。そういう日本的な民主主義、共産主

義という理というものを、全く、今日の時代は喪失してしまつておると、こういう事なであります。これが私の最も健康法の第一だと思ひます。

米の理

日本は、もと／＼みずほの国と申しました。お米の国であります。この訳は、日本民族は、一日に三回、特に朝、御飯をいただくという事が、本当なであります。その御飯はですね、本来は玄米が結構なであります。今日はそういうわけには参りません。例え七分ずきでも結構なあります。白米でも結構なあります。軽くお茶わんに一せん丈は、是非、日本産の米を食べるといふ事が必要なあります。これは栄養学的に、色々説明が出来ますが、そういうものを越えた高い次元のものが米の中にあるあります。おねばであります。あのおねばが素晴らしいあります。そのおねばが、日本民族の魂の座となるあります。

それで、私は、どんな場合でも朝の御飯は欠かしません。昼はあっちこち行つておりますから食べる事も、食べない事もございますが、朝は必ず頂く、これが私の食生活の根本であります。パンなんか食べていたり、牛乳なんか飲んでいたら、本当の日本人は出来ません。魂の座が出来ないであります。立派な魂は、育成されません。

それと、もう一つ重大な事は、牛肉を食べないといふ事が必要です。何故牛肉を食べてはいけないかと申しますと、古来から東洋人はそうであります。日本では、神牛と申しまして、牛を食べる民族ではなかったんであります。しかし、その牛を食べますと、(他の民族は別であります)日本民族は、血液がにごるんであります。そしてそれにかわる脂肪分を取るには、豚がいいんであります。だから私は、牛肉は一切食べません。と言つて、切角、人さんから奨められたものを、私は嫌いだといつて食べ

ない事はごいませんが、自ら求めて、決して牛肉は食べません。その代わり豚を食べます。豚は逆に我々日本民族の血液を清めてくれます。これを続けております。よく味わってみますと豚の方が旨いですね。あっさりいたしまして、豚の方が旨いんであります。豚は、人間の食用になるべく生まれて来た動物であります。ですから豚は人間がいだだと成仏するんであります。これが私の健康法であります。

苦 勞 を 喜 ぶ

先に申したように、今まで自分自身の事を考えた事がないという事なんでありますが、そこで、世の中の事、社会の事を考えておりますと、世の中の欠陥がみえて参ります。すると、どうしても私の気性と致しまして、その欠陥の中に、身を投じていきたいという、若い時分からそういう熱意を持っていたのであります。でありますが故に、色々過去において、家庭生活というものは、常に貧しい生活、いわゆる赤貧を喜んできたという事なんであります。その中に喜びがあつたんであります。若い時代にはそういう苦しみの中に常に喜びを感じておつたと、こういう事なんでありますね。だから、今考えますと自分の今日あるという事は、若い時代から盤根錯節の人生を送ってきたと、その中において自分というものが出来たと思えます。ところが今日の時代はですね、誰も彼も苦勞をさけて通ろうというんであります。それじゃあね、本当の人間は出来ませんです。

自分の身の内に秘められた力

本論に入ります。今回の演題は、**人間に内在する無限力の場を開発する**という、誠に難しい聞き慣れない言葉なんであります。で、これを御納得のいくように説明しなければなりません、その時間が

ございません。それをするのには、少くも三、四時間かかります。説明は抜きに致しまして結論から申しますと、実は、この無限力の場というものは自分の身の内にある魂の事であります。それを、極く平易に分り易く申し上げたいと思います。

なんと申しまでも、近代の人々は、論理的、合理的、理論的でないと納得致しません。そこで、人間に内在する無限力の場」という書物を刊行いたしました。これは今月十日発行であります。これを、くわしくお知りになりたい方は会場の入り口に置いてありますからお買求めを願いたいのであります。

実は日本の指導者に、あるいは識貴にこれを差上げたいのであります。けども、それは理でないんです。いい話を聞き、いい本を読ましてもらって、ただでは申しわけございません。それだけ代価がいります。日本の道というものは、厳しい道であります。必ずいい話を聞いて手を叩いて喜んだら、それだけのいわゆる理というもの、いわゆる何かお返ししなきゃあならんというのが建前であります。現代人はですね、今の時代はもらいっぱなしであります。いい話を聞いたと、よかったと、それ丈ですね。それでは身に付きません。いい話を聞いたのなら、それ丈の事を天にお返しすると、神に返すという気持ちになかったら身について参りませんです。

昨年の九月二十六日に、同じ様な講演会を武道館でいたしました。一万数千人の方が入りました。それだけの方においで願う為には私共の東京における道友と申しまして、三百人足らずしかございませんが、その方々がですね、千円の券を持って何ヶ月間か頭を下げて、そしてお買求め願うと、こういう風に下座を致しました。そして、名古屋講演会、又大阪講演会の分を合せて二万枚の券を買っていただき、その売上金二千万円という金額をそのまゝ、伊勢神宮に奉納致しました。それに要する経費は約五百四、五十万円かかりました。それは、新しい道センターにおきまして全部負担致しました。こういうような、今の世の中は、どんなチャリティショーのような慈善運動に致しましても、全部経費を差引きます。しかも主催、協力した人々の飲み食いした費用まで差引いて、そして純益を奉納するというのが建前です。

ね。これは大きな誤りであります。こういうような誤りを世間では普通のように考えております。それに対して私は非常な公憤を感じて、そうじゃないんだと自分達が汗水流して且つ費用は自前で、集まったお金は全部寄付するということが本筋なんであります。中には何割かを会の費用としてピンハネをするというのもあるようです。けれど、それじゃ一体何をしているのかと、美名のもとに私腹を肥やしているとしか言えないのであります。そういうようなあり方では、日本の社会は良くなりません。だからそれを改めたい!!と云うことが私の一つの念願でありました。故にそういう欠陥の中に身を投じたということが今回、京都のこの講演会になったのであります。

手を措いていられない

後程会計報告をすると思いますが、この国際会議場は千八百人の定員であります。ですから二千枚の切符を発行致しました、今日までに全部売り切れました。そして約半数の人がここに今日お出でのように入ります。そして二百万円の目録を伊勢神宮司廳に献納したいと思っております。その経費は百二、三十万円かかりましたが、それは新しい道センターに於いて負担させて頂きます。

これが本当なんですね。こういうことから改まって行かなければ日本は救われません。

今日の社会状況を見まして、政治、経済、教育、その他色々な問題を見て憂える人はたくさんございますし、又、色々論難する人があります。しかしそれだけでは駄目であります。そういうことは手を拱いて見ておるにすぎないのであります。これではどうにもなりません。日本は!! だからお互いお互い出来ることはやろうじゃないかということが私の考え方であります。自分がやってきたんだと、であるが故に健康で長生きをしたんだと、晩年に於いても非常に幸福になったと云うことは、過去に於いてそういう苦勞の道を通ってきたお蔭なんですね。だからこの道は私共夫妻が一つの雛型となりまして世

の中に下座をしていこう、苦勞を喜んでいこうという道なんであります。これが日本的共產主義、民主主義なんであります。

主義、思想以上のもの

今日の学者は民主主義、共產主義と云った思想や主義ではもう社会は助からない、本当の救いがないんだということが分つて参りました。主義以上の高い次元に行かなければならない。あるいは又、思想以上のものでなければならぬということが言われて参つたのであります。それは哲学でも、宗教でも科学でもございませぬ。單なる倫理道德を説くのもございませぬ。お互いお互いが社会的欠陥を見出したら、その中に自分が飛びこんでゆくことなんであります。そうになりました時には主義なんか必要ございませぬ。立派な日本が築かれるのであります。これが本来の日本民族のあり方なんであります。そういうあり方は、人間の知性ではできません。何故できないかを申します。

知性は自己防衛の武器にひとしい

人間の知性、心というものはどういふものかと掘り下げて検討してみますと、知性というものは自己防衛の武器であります。大自然を眺めますと、地球上に生を受けて居ります一切の生物は、自然が自己を守るところの武器を持たしてあります。野に咲く花に近よつてみますと、そこには同じ色をした昆虫が棲息しております、保護色であります。自己を守る武器なんであります。そういうものを自然が与えておるわけです。山野に棲む動物はどうかと申しますと、牙とか爪とかいうようなものを持たしてあります。それぞれの環境に応じた力を持たしてあります。これ自己防衛の武器であります。恐らく人間を

含めまして、あらゆる地球上の生物に対して大自然は自己を守る武器というものを必ず持たしてあるのです。あります。

人間に於いては何かと申しますと、人間の心、知性であります。知性が自己を守る武器なんではありません。人類は栄々と知性を磨き、知性を駆使して文明をきびいて参りました。今日の物質科学文明はすなわち知性文明と言えるのであります。知性は非常に高度に成長しました。経済成長を含めましてそうではありません。これは又今やこのままでは人類が危機に頻するんじゃないかというような一つの時代をもちきたらしてきたのであります。

科学は、一切の物質というものの究極の存在を、原子核を発見致しました。それが今日の科学文明の高度の飛躍の原因であります。物質の究極的存在は原子核、その原子核は一体どうなってるかと考えますと、それが結局戦争の武器、悪魔の武器と化しましたね。それをより遠く、より早く飛ばせる為に弾道弾を作り或いは又ミサイルを作り、むしろ我々の真の文化に役立つというよりも各国とも力の優位を求めて浮身をやつしているということなのであります。

だから27年間人類は悲願である平和を各国論じておりますけれども現実はそのはなつてはおりません、何故ならば、それは人間の“知性”による一つの平和論争であります。結局、利己的なものになるんであります。

せつかく人間の知性によって物質の究極を、原子核を発見致しまして、その原子核が今日悪魔の武器と化しておるといふこの現実が、人間の知性、心に於いては、世界平和は来ないと言ふ事実を証明しておるのであります。しからば一体何によって世界平和をもたらすかということの本当に真険に考えねばならない時が参っております。

原子、いわゆる物の世界とは別に“見えない世界”があります。目に見えない手に取るこのできない世界がございます。これはいわゆる宗教的分野と言つて良いでありましょう。科学的計量にかからな

い分野がございます。その分野の、そういう違った世界の究極的存在を発見するということでなくては人類の未来は期待出来ません。

原点にかえる

近頃巷におきましては、原点ということ、原点に帰るということを申しますが、原点に帰るといふことは何かということでありませぬ。

人間お互いお互いを省みて人間とは何かという原点に帰るべき時がきたんであります。そして又、人間はどうして生まれたという原点を知らなきやならん。宇宙はどうして出来たかという原点を知らなきやならん。そういう意味において原点という言葉に意義があります。

ちよつと変つた話でありますが、数日前に私、テレビを見ておりましたら、美容についての番組がございました。男も女も、今年はお化粧が変つてきたと、それは原点に帰らなきやいかんのだと、日本人が日本人らしいお化粧をするように、今年の流行は変つてきたと、そのテレビで云つておりました。べにを鼻とか頬とか、顔の一番でつばつた所につけて、そしてそれをこつ／＼手でひろげて赤い色を出すんですね、それを原点に帰ると言っております。時代が変つてきたもんだとビックリしましたが、何となん、今のこの社会状態を見ましてこれじゃどうもならんのだと、何かしら本当の日本人に帰らなきやならんという気がしてきているんですね。だが、私が申しますのは、そういうような原点ではありませぬ。日本民族でも或いは西洋民族に致しまして「原点に帰る」という時代が来たのですね。何故原点に帰らなきやならんかと申しますと、人類の歴史は数十万年という歴史をへみしております。何にもない所から、地球上に於いて他の生物はありましたけれども、人間はその中にポツンとできてきたといふことであります。それは無限からできた、こういう風に言えましようか。これ原点であります。我々人

間の原点、木の股から生まれたんじやございませぬ。両性、夫婦というものができたということが、これが繁殖した、人間の人口がふえたもとであります。その原点がございませぬ。これは想像を絶する世界でありまして、しかし何かしら想像はできると思ひます。何もなかつた無の世界からポソンとできたということでありませぬ。それが遠心的に進歩発展をとげて参りまして二十世紀の今日、現時点に來たのであります。原点の真下にきたんであります。これは人類の厳しい困苦欠乏と申しますか、盤根錯節の長い歴史でございませぬ。有史以前がございませぬ、有史以来がございませぬ。そういう何十万年という歴史を経まして、二十世紀は、進歩、発展の極に達したんでありますね。これは遠心的に進歩発展を遂げたわけでありませぬ。これ以上進歩発展を続けたら一体どうなるかと言ひませぬ、奈落へ落ちなければなりませぬ。

そこでここまできたんだから、原点に帰ろうじやないかということが本當なんであります。今度は求心的に、人間それぞれが自己完成しなければならぬ時機が参つたんであります。

でありますか故に、今日は、いわゆる神と言ひませぬか、普通の宗教教団の言う神じやあございませぬが、造り主と申しませぬか、究極のものと申しませぬか、いわゆる天と申してよいと思ひませぬが、生まれた所の天から最も人類が離れてしまつた時と言ひませぬか、神の救いから全部離れた今日であります。

でありますか故にどんなに宗教が盛んであつても、人類の救ひはございませぬ。離れてゐるんですから仕方ありません。だから我々はお互いに求心的に人間それぞれ自己完成をして、そして原点に帰らねばならぬのであります。

その原点に歸るには、頭じゃダメなんであります。人間の知性というものはさつき申しました様に、自己防衛の武器にすぎませぬ。だから究極的にはどんなにお偉い立派な方でありませぬ、自分がギリ／＼の所になりますと結局自己を防衛するというのが心の本質なんであります。だから戦後二十数年

たちましたけれども、それぞれ、世界の優れた政治家が、国連の舞台に於いて、平和を論じておりますけれども、一向にラチがあかないと、あかないどころか益々危機感を増大するという事は、知性で考へてゐるからであつて、それではダメであります。

人間の価値

では眞の救いは何かと申しますと、さつき申しました所の、内身の中にあるところの、無限力の場、魂を磨く以外にございません。

この魂を磨こうじゃないかと、それを私共では、羽曳野にある“新しい道の場”において連日連夜にわたつて、私の方に縁のある道友の方々は、それに集中しているんであります。

このことは、価値というものの転換であります。

一体価値を何に置くかということでもありますね。人間尊重という言葉が、流行つておりますが、人間の何を尊重するかという事でもあります。

人間の知性を尊重したらどうなりますか。進歩発展を遂げても、奈落の底に落ちなければなりません。人間肉体を尊重しますか。それは、健康ということは大事でありますけれども、第一義ではございません。

人間を生かしておるところの、根本的なものに価値を求めなければなりません。だから人間尊重は結構だけれども、人間の何を尊重するかと、人間の価値観でありますね。凡そものでもございませんです。肉体でもございませんです。肉体を形成しているところの、我々の靈性的な中すいに位するところの、つまり靈性的な中すいの核とでも申しましようか。靈、核、即ち魂に、絶対の価値を、おかなければならない時代がきたんであります。

人間性回復ということを、よく云っておりますが、人間性回復とは何かと、人間性とは何かということを考えておりません。頭でものを考えたこと、あるいは肉体、人間の脳細胞なんていうものは、人間の魂から云えば次元の底いもんであります。

魂を主体性とする民族

物質の世界に於ける原子核というなれば、霊の世界における原子核というものが、これが魂なんであります。

これがあるから生まれてきたんだと、これがあるから生かされて生きているんだと、こう考えますと、本当の本当の自分というものは魂なんであります。それを認め得ずして上っ皮の自分が本当だと思つてゐる。これではいけません。

この事を過去におきましては日本人は肚と申しました。本来、肚の民族であります。腹の民族とは、魂を主体性としていく民族であります。それが段々／＼西洋イズムが浸透して参りまして、ことに、物質科学文明に余りに日本が傾き過ぎて以来止まる所を知らない混乱の連鎖が社会を圧して参りました。今日の教育というものは、何かと申しますと、幼稚園から大学に致るまで、いわゆる知識偏重、脳細胞の働く知脳偏重に陥入りしまして、本当の人間形成という方向からは脱落してしまつております。だからといって、これから今までの学校制度を改革するということは、仲々容易じゃあございませぬし、急な改革が必要と申しているのでもありません。知性を伸ばしていく事も必要なのですから、これはひとまずこういう段階に止めといて、我々は自分を作るといふ教育をしなきゃあならない。魂を練成して、磨いていくといふ教育をしなきゃあなりません。それには哲学的に自然科学的に、宗教的にこの高い次元の存在を明確に、それを解明していかなければ仲々そう成りませぬ。しかも、そういう事が分つたと

いうことは、頭、知恵でわかったことでありますが、知恵で分った事丈では身につきませんです。だからそれを実践する、日常の生活において、その原理に向かって実践する。ニクソンが身の内の天使の声に耳を傾けよというならば、どうしたら傾けられるかという、この行いが肝心なのです。その行いは、自分を無にしていく、欲を捨て切るといふ生活の中において、始めて、魂が開けてくるんであります。日蓮上人は、不惜身命と申しまして、一切自分がなかつたんであります。自分が無であつた、そういう生活の生涯を通した大宗教育家であります。どうです？今日の人々は。日蓮の言葉文学んで本体を喪失しているという事でありませぬ。

そういう訳でありまして、我々は原点に帰ろうじゃあないかと、日本民族は、そういう独自性を持っている、ことに日本民族は、魂の独自性を持っております。その魂の独自性を古人は「大和魂」と名づけたんであります。

大和魂とは軍国主義につながると思ふのは、大間違いであります。

大和魂とは、いやさかという万葉時代のことばと、現在使っているま・と・まるといふ二つのことばを一つに結んだ意義で、即ち、いやさか、ま・と・まるといふま・と・まると（大和）である。

共産主義とか民主主義というような、思想を超えてさかえて、ま・と・まるといふ、そのものズバリである。この主義以上の高い次元——これが大和民族伝統の優れた持味であります。

腹 能 開 発

最後に、この本（腹能大学）の序文を読んで、講演のま・と・まるといいたします。

「ニクソン大統領は、大統領就任の当時アメリカ国民に向つて壇上から警告している。その警告はかなりシヨッキングな内容で、当時アメリカの新聞を賑わしたが、日本の新聞には報道されなかつた。その

要点は次の如くである。

「われわれは、物が豊かであることはわかったが、精神的に荒んでいる。美事な正確さをもって月に勇士たちを送ることはできたが、この地上ではひどい騒乱に陥っている。平和を欲しながら闘争に促われている。統一を欲しながら分裂に乱されている。充足を欲しながらいづれを見ても空しい生活である。

為さねばならぬ課題に臨みながら、これを果してくる他人の手を待っている。この精神の危機に当っては、精神の応答を要する。この応答を発見するためには、われわれはまず第一に、専ら内観を要する。〈To find that answer We need only look within ourselves〉

われわれが生来、そのことに気付こうと気付くまいと、身のうちに持っている「天使」たちの声に耳を傾けてみよう。」

このニクソンの言葉を裏返しにして考えると、現代の物質科学文明《人間知性の高度成長にもとづく》に大きなひずみが生じた。故に、知性《心》よりも高い次元に向わなければならない。然らば知性より優れた高い次元とは何か？これに答えて「天使の声」と云ったのである。

しかし、ニクソン大統領が、果してこの声を聴き得たであろうか。もし聴き得たとすれば、日本および諸外国に甚大なシヨックを与えるドル防衛政策、また、今回《一九七一年十一月七日》のアリュージョン列島における地下核実験などは為し得ないであろう。

惜むらくは、ニクソン哲学は不発におわり、単なる観念論にすぎないものとなった。どんなに立派な理論でも、観念論では今日以降の新しい世紀を開く力とはならない。「天使の声」そのものを聴き、それを行ずるものでなくてはならないのである。

前述の意味で、知性文明はすでに限界を示している。交通戦争、諸種の公害問題或はゴミ戦争―何れを取りあげてみても、人間の知性、いわゆる資本や技術によって根本的解決は不可能である。

まさに、人類は危機に直面している。

このような恐るべき時代をどうして持ち来たらしめたか？ 成つて来るには成つて来る原因の世界がある。いま、人類は成つて来た結果《現象》の世界に於て狼狽し乱舞している。原因の世界を矯正することなくしては、好ましい結果の世界は成つて来ない。原因と結果は大自然と人間の関連によつて生じる。

二十世紀の人類は、物質科学文明の進歩のもとに、自然を破壊し、自然に反逆をつづけて来た。この秋において天の審判が降つたのである。

この点に気づいたニクソン大統領が「天使の声に耳を傾けよ」と、警告したのはまことに賢明である。「天使の声」とは、われわれ人間の腹部の中枢に位した、形而上的存在の靈性へ、そに外ならない。日本ではこれを古来から「肚づくり」また、「大和魂」と云つた。この肚なる大和魂は日本民族の最も優れた伝統的持味のことである。

しかし、現代の日本人は、この「魂」を認めず、頭でかちの肚なし人間になつてしまつてゐる。

もとく靈・魂と云うものは、自分の身のうちに存在していても、自分の意識、感覚に映じるものではない。また、どんなに自然科学が進歩しても、知性によつては絶対に捉えることが出来ない地上最高次元の場である。

この絶対の場を発見し、把握するためには、自然について悟り学び、且つ行じ、もつて魂の錬成（腹能開發）により、はじめて感得され、おのずと身のうちから無限量が湧きいづるのである。』

——テープレコードより抄——

すめらみくに

皇国の支柱たらん

「新しい道」

——京都大講演会に思う——

齊藤長太郎

退耕庵につどう

昨年の六月 京都の東福寺退耕庵で
天村先生の御配慮によつて 第一回の京
都講演会準備委員会を催した時に 私は
京都大会は必ず成功すると予測したので
「あさ」に書かせてもらった。それは
その集会が 天の時を得、地の利を得、
人の和を得たからであつた。そしてその
上、万事設営にあたつていただいた森田
公平医学博士は、三枝君の叔父君でもあ

るが 京都の明治維新顕彰会の会長であ
り、山口県をはじめ 高知薩摩の功業の
臣を 永遠に表彰して居られるからでも
ある。

会場にかりた部屋が戊辰殿。茶席が
石田三成と安国寺惠瓊和尚の関ヶ原合戦
密議の場所。お待合が 品川弥二郎の始
終出入した煨芋の間——つまり明治親政
の夜明けのための工作に寧日もなかつた
ので 焼芋を 懐にいれて討議したとい
う因縁つきの部屋、晋作や、龍馬や、吉
之助や、象二郎や、小五郎の顔が彷彿と

している。驚いたことには 奥まつてい
たので 誰も気がつかなかつた一間床に
米国へ密行せんとする直前の松陰吉田寅
次郎先生の 飄爽たる英姿の「プロンズ
」像が安置してあつた。香煙が静かにた
ちのぼつていた。

この雰囲気を見て 私は思った。天時
人の三要素の他に これをもちあげてく
れる律動がある 温みがある、催促があ
る、と思つたのである。これなら来春の
大会は 困難ではあろうが成功すると思
つた。

白鳥が舞う

第二回の準備委員会をも 天村先生の
お仕まわしで無事終了して、愈々迎えた
のが今回の大講演会である。

松もとれた十六日、洛北の空は 急に
冷えてきた。叡山から吹きおろす風は
雪を含んで冷たい。しかし昨日にうつて
かわつての快晴である。無籍者の白鳥が
天に翔いて宝池に浮んだのも さながら

羽曳野白鳥町からの 神のおつかいかとも思われて ワクワクする。

大会の経過は、東福寺の会合で天から黙示をうけた通り、すべてに 革新的な空気が渦巻いていた。新しい道、まさに進展の好機である。

宋の（近代宋ではなくて）蘭陵王の勝ち戦を かたどった雅舞楽からお祝のプログラムは始った。奉仕する石叢城氏は、今年度 この雅舞楽によって、京都文化賞をうけられたばかり、ちなみに石氏の弟君が 今春 その舞楽をひっさげて モスコへ旅立たれると本日新聞は報じた。説明をしたのは 私の友人清水の地主神社宮司中川平君である。君はまた京都戎神社の権宮司をかねていて京都市民にお正月の戎まいりで人気がある。佐藤博士の名司会を誘い出すかのようにな三枝君のプレリコメンテーション——彼女は、今回の京都募金を、自らなしとげた矢先なので 鼻息はあらひ。

迫水先生は こんな愉快な講演は今までになかったと上々の御気嫌、さもありなん、国会に居られる時間よりも永く終

始席について居られた。

松木天村先生の御講演は従来にない高い調子をそなえた立派な立党宣言であつたと 私は思った。

これは、天村先生が、原点に立ち帰られてその上になつた立論であつたからである。

靈魂の存在

今や、文芸思潮界、宗教界、哲学思想界は、人間の行動の深層を剔り出そうとして躍起になつている。しかしまだそれを 臍能(Navel capacity)とは言いきれない。誤れる智識の虚飾が、そうさせるのであろう。たとえば、科学では 悟りの力を、脳髓の調和のとれた作用であるとして、前頭葉（大脳皮質の後期発生部分——いわゆる前頭のおでこ）と、小脳（生れながらの脳で主として欲望をつかさどる）との中間にある間脳を坐禪によって刺激すると無念無想の境地に至れるのであると説明する。なぜそのような

かは、未だに説明し得ないでいる。生長の家は、知識と欲望との分析は巧みに説明するが、肝心のそれを超えた世界を肯定しつつも、それが「何か胸にこみあげてくるあるもの」、血液ならぬ液体がたまって本然の人間らしくするのだと説く。しかしこれも、どこから そんな能力を湧かしてしてくれるのかは説明されていない。漢方医学でも、人間のすべての内臓機関のバランスをとるものとして「三焦」というものと想定しているが、三焦とは何かというと まだ解明されていない。哲学の世界でも、現代の哲学では、純粹の理性とか 生命の流れとかいうものは過去の哲学となつて、靈肉の境のギリギリのところまで追及してきているが結論はまだ出さない。医学界では、生命の淵源を研究し、生命力の神秘さえもが、研究の対象になつていゝが、魂という問題となると、これを心理学の部門にふりかえて、やつとのこと フロイド氏のいうように 潜在意識論で満足している。しかし、このことは 天村先生の仰言るようには意識はあくまで意識である。

肉体あつての意識である。デカルト的範疇を脱れさせることはできないのだと、その通りである。文芸の世界では、文芸自体が自由奔放に構想していくものであるから、最近は古事記の黄泉よみひら坂論などもでて幽明界のことを書くようになっていゝ。しかし学問ではないのだから、靈魂の存在、本質の追究は、その本業ではないのでおもしろく読ませてはくれるが、生理学者、心理学者、哲学者としては、今一つあきたらないものがある。

こうみでくると、魂があることはよくわかつた。魂の行動もよくわかつた。しかし魂はどこにあつて、どこからでてくるのかということは未だ不明なのである。まさか、魂は宇宙の一隅にあつて、人間の誕生とともに人間に付與され、死去とともに、肉体を去つていくとは考へて居らないだろう。

たとえ、人間の死とともに去つていくとしても、魂は、こんなに非情なものではない。魂魄の字の示すとおり、もつと生ぐさい、人間くさいものなのである。で

は魂魄は、なぜ「身の代」なのか、この問題もまだ解明されていない。アメリカの心理学でも、これはサイケの部門として、超能心理学として、説明し、得べからざる不可思議の世界と考へられているようである。

こういう時にあつて、天村先生は、はつきりいはれた。それは臍なのだ。臍はその残存している臍と脊髄の中間に存在するのだと。臍の周辺に神経の叢があるのだと。かつての松木先生の臍学序論は、奇抜な発想としてアカデミー賞をうけられたのであるが、今回は臍を生物学的に心理学的に社会学的にさへも分析考究されている。この功績は、恐らくこ、数年を経ずして医学界の自然科学としての評価の対象としてとりあげることであろう。新しい道は、原点へ立ち返つたのである。腹能大学という構想も、先生の永年の研究の成果がそういひしめたのであろう。

すでに、大学には上智大学、英知大学、麗沢大学（これは易の卦からとつたもの）などがある。腹能大学（ネーバルキャバ

シチイユニバーシティ）で堂々と通用する世代に変わりつゝ、あるのである。

天村先生の講演は、従つて、何のケレシもなく、何の躊躇もなかつた。極めて自然法則に即した講演内容であつただけに宗教的ないや味は少しも感じられなかつた。現に拝聴していた京都産大の先生は学生に一度話してやろうとも言われた。私が担当している女子学生も、当日参加して、この講演にショックをうけた由を他の学友に話していた。それのみか、彼女等は、国際グラフを配布しておつた。年若き男女にこの道が理解しはじめられてこそこの道は伸びる。この道の命は榮えて行くのだと、嬉しくなつた。

肚の人々

天村先生の壇上の態度も今までにない堂々たるもので、時にはユーモアを交え、おねば榮養素必要論をのべられたり、寛厳よろしく、威風あたりをはらつていた。

聴衆はこういつていた、「新しい道」には迫水先生といい苑主さんといいよく立派な方々がそろったもんだ、大臣以上という噂もとんでいた。

そこで、天村先生にお願い申したいこと一つ、愈々先生は御自分の創造された哲学をもって新しい道の原点に立ちかえつて所信を表明なさいました。そこでお話も従来の内容をおかえになつては如何ですかということである。なるほど今回からは「人間に内蔵する無限の力の開発について」となつて自信にみちた内容で想像させられるのであるから、たとえば例話なども日本の偉人の逸話をおりこまれるならば、それでなくても日本の歴史にあらわれた英雄偉人の伝記には無知である青年が多いから、一段の輝を示していくことと思う。私が今フツと頭に浮かんだものだけをひろつてみると

村上義光、佐久間艇長、鳥居強右衛門、天野屋利兵衛と大石。大石主税と母。大楠公と小楠公、高山彦九郎、坂本龍馬、菅原道真、鉢の木物語、調伊企儼、北条時宗、山田長政、和氣清麻呂、和宮

皇女、西郷隆盛、勝海舟

何れも、度胸と膽力で生きぬいた人物であるからである。

苑主先生はまた、今回の大講演会は、質が高まったと仰言つた。その通りである。京都会場へ集まつていただいたお方は中正な思想をもつたお医者様のグループ、この中には学生剣道連盟の会長やら、京都御所木戸御免のお医者様やら、支那（今の中国）絵画史にかけては世界でも一、二を争うお医者さま、漢方医学にかけてはドイツでも有名なるお医者さまのお顔がそろつたし、弁護士界では京都の元弁護士会長や大阪の破産専門の若手弁護士やら、地方政界では当選六回の府会議員二名、同じく六回の女性市会議員もお顔を出していたのだ。

服飾界では、新装帯の社長や、無形文化財のつづれ染織の宗道、子供のきもの社長等、業界のトップクラスもそろつた。学界ではかねてのロータリーのガバナールである京都大名誉教授で支那経済史学の泰斗、日本教師会のひきいる教育学の教授、もと京都市教委の教職員の現場の局

長さんまでお出下さつた。京滋中高等学校長さんはたくさん顔をみせて居られた。

京都の知事さんが祝電をくれなかつたのは残念であつたが、知事の政治的立場上のことであつたのであろう。——大阪の黒田知事は苑主先生と会つているのに

＊

ほんとに、よく、お集りいただきました。誌上をおかりして心から、お礼を申しあげますとともに、この好機を逸せず京都という特別の地域に魂の紫の大旗をひるがえし、さらに日本の大黒柱「新しい道」の精神の普及と徹底に全力をあげようではありませんか。

京都市への普及をどうするかは、他日別稿でのべるが、地方色というか、各県まち／＼であるので経済状況、民族教育の水準程度、政党色の度合、学問芸術に対する関心の度合、宗教への好悪、をよく／＼分析した上で詮衡して、一旦つなげれば決して脱退しないようなお方をえらんでいきたいものと思う。

信濃路隨行記

長瀬英二

檜林の間を縫って赤いリボンのような
特急列車がすべりこんできた。

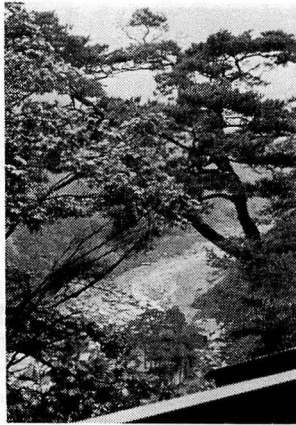
「あげまつウ……上松」澄みきった駅
員の声が空に響く、元氣一杯苑主先生、
尾関氏が階段を降りてこられた。

木曾ロータリーの由井氏の案内で、中
島氏夫妻、私と、私達はさっそく「寢覚
の床」を通って例会場へ歩みを運んだ。

先生はここでゲストスピーカーを務め
られた。

苑主先生おもむろに口を開いて「ここ
は島崎藤村が夜明け前を執筆した当時から
由緒ある土地柄であります。私も深く
共感を覚えておりましたが、只今日本は
日が落ちるとき、夜明け前までにはほど

寢覚の床



遠い世の中である……」から始つて次第
に高次元の話に移っていかれた。
清らかな真清水、鮮明な岩苔、路傍の
繁^は妻^この淡い緑、火と燃ゆる紅葉、雪化粧
したアルプスの山々……



木曾ロータリー

然し轟音と共に走り抜けるトラック、
時世の波もさること乍ら、自然を愛さ
ない現代人の無遠慮さであろう、美鈴刈
る信濃をたちまちにして俗塵の舞う国道
十九号線に随落させてしまったのは!!

木曾谷の指導層の方々も実感をもって聞き知っているようすであった。

講演が終り志水ロータリーアンほか数人の方々に車を連ねて自然休養林を見学、見事に成長した檜の大木の連なる火山灰まじりの石ころ道を谷川の流れを右に左にし、曲折を登っていった。

右左滝の音あり紅葉道

伊勢神宮御遷宮奉納のための神木のあ
る林を散策したのち、中島氏の案内で南
木曾町に町長を訪ねた。

まことに不思議！苑主先生の旧友、然
も希望社運動の同志おふたりの手は硬く
結ばれた。一期一会と云うけれど、こん
な奇遇があるものか。

町長の案内で藤村の生家（郷土館）を
むかしぶりの通行手形を持って見学。

土産品店でおやかた様（天人女史）に
水桶を求められた。

妻籠宿、尾張屋で旅装を解いたのは、
たそがれの頃であった。

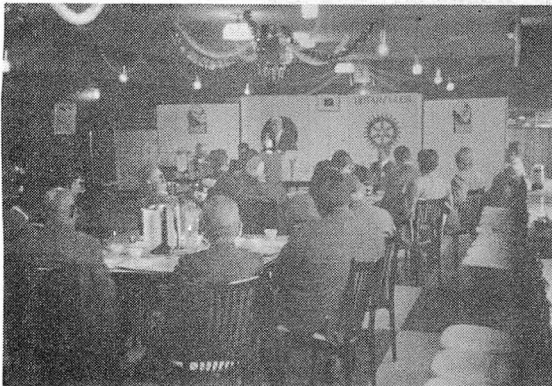
苑主先生を中心に、町長、観光課長を



南木曾町役場に町長を訪問

囲んで夕食、山菜料理に舌つづみを打っ
て、話はつきることなくはずんでいった。

古き中仙道のよさを必至に守ろうとす
る努力が実を結んで町ぐるみの重要文化
財に指定されるまでの町人の努力のあり
さま。このことは全国はじめての事例で
もあるのです、町の維持と発展については、



辰野ロータリー 藤原会館

今後に大きな問題を抱えておるようだ。
苑主先生のおことばでは、物が成るの
は時と人と地の利が必要であるとのこと。
今やこの地は、地の利を得た、好機を
得た、残るは人の和のみ……………。
時移り興も進み誰か歌う木曾節の哀調、
手拍子は大きな渦を巻き、夜の更けるの
を知らなかった。

道の主 真木の香高き 冬の宿

すがすがしい朝を迎えた。

林間から昇る太陽が一段と紅葉を美しくみせている。

辰野ロータリーへは凡そ二時間半、中仙道を塩尻へ向う。

木曾の漆器直売場で朝のコーヒーを飲む。そこに展示してあった文机は私でも欲しいなあとと思った。きめの細かさや意匠の確からしさ。流石伝統ある信州の良さを表わす。

雉が左右に飛び交う途中の道に、野趣を感じつ、塩尻峠を越えて、今日の例会場辰野町路原会館に着いた。

昨日に続き苑主先生は「人間に内在する無限力の場を開発する」と題して山々にこだませよとばかりの熱弁を振られること四十分、諄々と新しい道を説かれた。辰野ロータリーで暖かい見送りを受けて有賀峠に向った。

諏訪が眼下に展開してきた。

諏訪は八大龍王の古社である。苑主先生をゲストスピーカーとしておむかえする話も三枝さんのみちびきにより、諏訪からはじまったことであり、因縁づいて面白い。

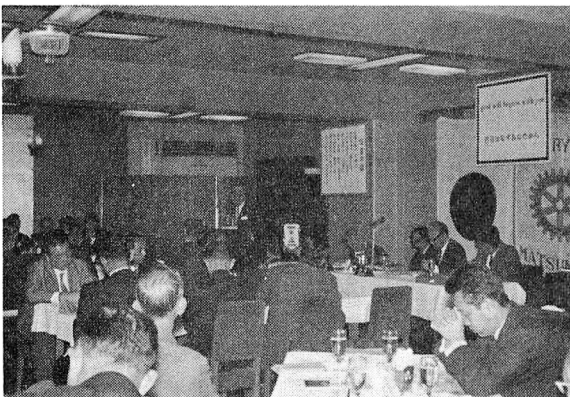
寒雲を 龍神とみて 苑主立つ

信州の秋は早い。澄みきった高い空が、長い冬の訪れを告げていた。

里は緑、車で十分も走れば真紅のもみじ、更に茶色の唐松林となる。そして頂上には雪が積っている。

ヴィナスラインを茅野より蓼科山を経上諏訪へと向った。スキーで有名な霧ヶ峰で初雪に見舞われた。晴れていれば、唐松、雑木林の向うに、諏訪盆地、南北アルプス、はるか遠くに富士の嶺が見えるのに残念、然し一面の枯草の原に点在する岩が見事に調和して美しい。

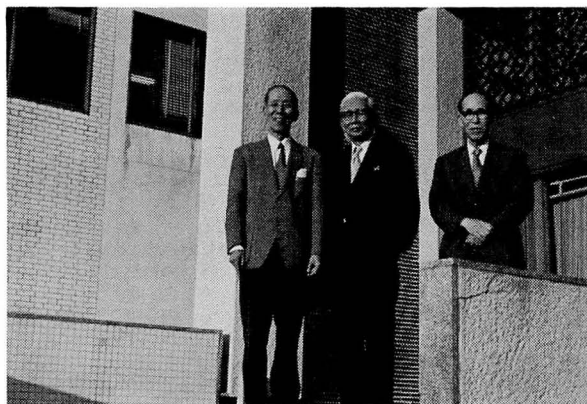
錦燃えて わが天村を 迎えけり



松本ロータリー

車から下りて、ちらつく雪の中、しっかりと大地を踏みしめて遠望される苑主先生の横顔、果して何を思いつづけられておられるのであろうか。

祖国の安危か、道友の人間形成か
ドライブインで甘酒をすすする。茄子の
つけものが旨い。苑主先生はじめて召上



左から 鈴木慎一氏 苑主先生 平林氏

平林ロータリアンの案内で、バイオリンによる幼児才能教育の鈴木慎一先生の学校を訪問したとき鈴木慎一先生はこう云っておられる。

「あっ！ 日本中の子供が日本語を話している。むずかしい大阪弁を、大人もまねできない東北弁を、この驚くべき才能を発見して以来、才能教育に全生涯を打ち込む決心をしました」と

すると苑主先生はすかさず

「その通りです、あなたのおっしゃる発見すべき才能はみたまですよ、人間の百四十億もある脳細胞を司る魂を磨いてこそ、立派な日本人、大和魂のはたらく素晴らしい人づくりが出来るのですよ」

おふたりの天才的な教育者の問答は、おふたりの性格がよくあらわれていて、おもしろいではないか？

四代も医を家業としておられる平林重兵衛院長も七十四才にしてはじめて「へその機能」を教えられました、と目を輝かせておられた。

対談は政治、経済、文化と多方面にわたりまたたく間に予定の時刻を過ぎた。特に口角泡を飛ばして教育問題を論ぜられていた時には、ほとぼる青年の若さと情熱をみた。

私達の統領苑主先生の迫力ある力強い語調が弟子にとつてうれしかった。快く胸におちた。

鈴木先生の好意により、マンツーマンの教育実習の現場を見学させてもらった。五才の坊やが、若い先生のタカタカタツタのメロディに合せて、一生懸命に弦を動かしている。じつと聞いている母親。順番を待つ幼児、そして親たち。

苑主先生の優しく孫を見つめるような瞳が印象的だった。

お互いに頑張りましょうと強く握手をされたあと著書「愛に生きる」をそれぞれいたゞいた。表紙裏には「愛深ければ為すこと多し」実感あるサインをしていた。いた。

達筆である。

英才教育に精魂を傾けられたことは大きな業績であるが、私は広く国民と云う

った串ざしの「いか」が大変お気に召した様子であった。海から最も遠く、海拔一七〇〇メートルの原野で……。

飛ぶ花に 遠山はなし 笹の声

カーとめて ちちこむ腰や 空高く

大きな底辺に於て、その気魄の充実出来る訓練を押し進めて行きたいと思った。



鈴木才能教育会館 バイオリンのレッスン風景

長野県人はいまでも自分の故郷のことを信州と呼ぶ。そして他国の人も又そう云う。

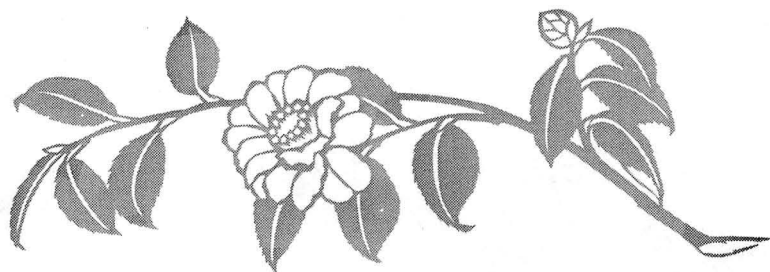
京都と並んで早くから教育県としてその名を全国に知らしめた。更に天下の景を極めんとして台に登るの故事の如く、親は先づ子孫を山に登らせ更に木に登らせて天下の広きを教える。

田畑を耕す農夫も、いきなり世界の大勢を語りだす。

ゆっくり、着実に情勢を見きわめて自分なりの結論を出す。

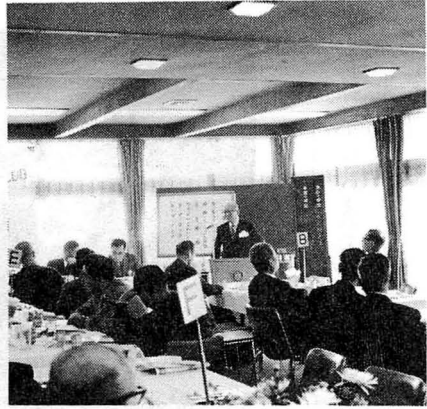
今回の講演旅行で、ひとりでも多くの共鳴者が出ることを、苑主先生と共に願いつ、信濃路を東京へ向った……。

46・10・30 東京にて





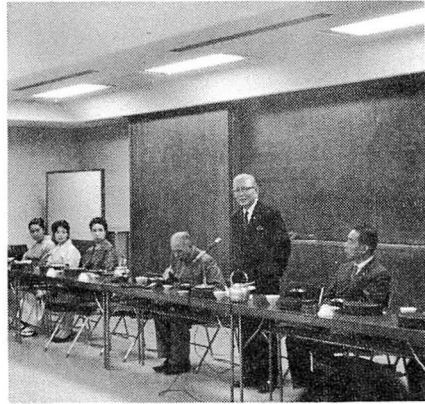
羽島ロータリー 10-23



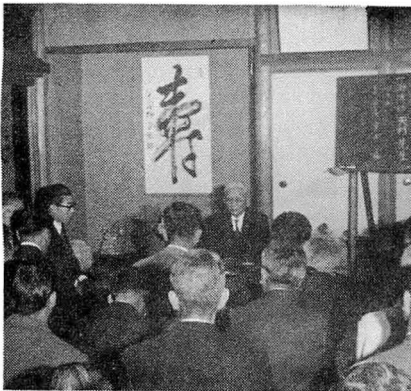
榎原ロータリー 10-22



堂島ライオンズ (阪神百貨店) 11-9



関西協協会 (商工会議所) 10-25



神戸地区練合 (桑島氏宅) 11-14



石清水八幡宮宮司と対談 11-14



新宿東ライオンズ (市ヶ谷会館) 12-1



東京王寺ロータリー (上野精養軒) 11-17



田無ロータリー (埼玉銀行田無支店) 12-2

……政治、経済、教育——
 お互いお互い出来る事から
 やろうじゃないか、
 と、これが
 私の考え方であります。……



北浜船場ライオンズ 1-12



三鷹ロータリー (市民会館) 12-3

雄叫び

(一)

— 国を愛する青年として主張する —

伊 藤 誠 治

教育制度の欠陥と愛国心

◎伊勢路

かがり火をたいておこうぞいまからは

伊勢路にむかう明日の祈り

(天人女史)

昨年夏、八月もなかばを過ぎた日射しの強いある日、閑院様と苑主先生のお二人が、伊勢神宮、内宮に正式参拝をされる事になった。

それは二年後、すなわち昭和四十八年

に行なわれる伊勢神宮式年御遷宮について御造営費奉納募金の為「新しい道提唱大講演会」を九月に控えての御挨拶と、滞りなく目的が達成出来ます様にとの祈念をかねての事である。機会を得て筆者も御伴をする事になった。

伊勢の緑りなす山々は深くあくまでも青い。快晴の空は時々白い夏雲が日陰をつくってくれる。神宮内に敷き詰められた砂利を踏む音よりも大きく油蟬の鳴く声は夏の暑さを増す様だった。

五十鈴川の辺りに行くと上流から水の

流れを押して来た川風が水面を掠めて、暑さを癒やしてくれた。

一千九百年前、垂仁天皇の御代の頃皇大神宮をここ、伊勢に定めて以来、いまだにこゝだけは公害におかされることなく、清らかな水の流れは今も澄みきって冷たい。

春冷や わが掌を

濺ぐ五十鈴川 (久米正雄)

神宮の案内により内宮御正殿に向う、閑院様苑主先生の記帳がすまると、神宮の手引もおごそかに正殿前内玉垣南御

門に額く。

ここは一般の参拝者が入る事の出来ない聖域である。敷き詰めてある白石は角がなく少し大きめで、めつたに人が踏み入る事がないせいか青い石や白い石が一つ／＼洗い清めてあるかの如く奇麗であった。

正殿前の南御門に歩を進めていくと、ここは不思議に蟬の鳴き声もきこえず、又なんとなく涼しく感じ、身が引き締まる思いがした。不思議な事である。

不思議といえば、ここまで来る道々、大講演会が成功してくれる様にと祈念するつもりであったのが、いざ内玉垣の神域に入るとその様な事は一切忘れ、ただ静寂な神域に、打つ拍手の音だけがあたりに木霊していつまでも耳に響いていた様な気がする。

参拝をすませて後、内玉垣より外へ出て石段をおりながら、南御門の方を振り返ると、御門に掛けてある垂絹が一陣の風に翻った。それはあたかも筆者の愚かさを教えるが如くであった。而してここは、無になって対し、喜びを報告し、た

らざるをお詫びする所である、という古き時代の日本人の魂がこめられている。そして同時に日本の国の行く末に思いを致す所である。

何人のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼれる

(西行法師)

正殿参拝をすませてから神楽殿に立ち寄った。神宮大宮司徳川宗敬氏が待つておられた。

閑院様、苑主先生、徳川大宮司、御三方の懇談に陪席してお話を拝聴した。

なかでも徳川大宮司のお話に依ると最近若い青年、特に学生が伊勢を、あるいは皇大神宮を知らないと言ふ事である。それは遠足又は修学旅行等の団体での参拝の機会がなくなつたからだそうである。まったくおどろいた事だ。

その最も大きな原因は二つある。

第一は現在の教育制度に問題があり、戦後の教育は日教組の影響が強く問題が多すぎる点、

第二は経済的な理由である。国民全体のくらしが豊になつたせいか最近の学生

の旅行はます／＼デラックス化され、特急や新幹線あるいは飛行機等をつかい遠方広域を見てまわり伊勢に途中下車することがほとんどなくなつてしまつたそうである。

第二の問題はいか様にも解決が出来るが、問題は第一の教育制度の問題である。ちなみに参考として現行憲法の問題になる点を例記してみよう。

※教育基本法第九条宗教教育二項・国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教の為の宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

この項を楯にして日教組は、伊勢神宮を日本帝国主義の根源と結びつけ、又軍国主義発祥の地として今日の学生に教育をしている。これは皇大神宮が宗教法人であることも問題だが、そのことは、

※日本国憲法第三章・国民の権利及び義務

第二〇条信教の自由

一項、信教の自由は何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も国から特権を受け又は政治上の権力を行使してはならない。

二項、何人も宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

三項、国及びその機関は宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。右により従来の宗教保護の禁止と、信教の自由を楯にして、国と皇大神宮とを切り離し、皇大神宮の形がそうであり形式が類似しているからとして、問題の本質をきわめずに宗教法人にしてしまった事、せざるを得なかつた事に大きな問題がある。

前条を旧憲法、明治憲法と対比して見る。

※ 大日本帝国憲法第二十八条

日本臣民ハ安寧、秩序を妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス。

もしある学校の校長が神宮に行く事を生徒あるいは日教組教師に求め、又は強要すれば教育基本法第九条二項を出し、

第十条教育行政

一項、教育は不当な支配に服すること

なく、国民全体に対し直接に責任を負つて行われるべきものである。

しかるに校長と日教組の摩擦を避け様とすれば公立の中学、高校の学生は、必然的に足が伊勢にはむかなくなつてしまふのは当り前である。たまたに神宮で見掛ける修学旅行の団体は私立学校で、その学校の校長の独自の教育方針による所で、少数の学校をのぞけば大多数が伊勢神宮と云つても知らないし、仮に名は知つていても、どの様な所であるか、何があるのかと云う事になると何も知らない。

日本の歴史文化とは切り離す事の出来ない筈のものが、戦後のゆがめられた歴史教育に依つて無理に切り離されてしまった。そのへんに日本を知らぬ日本人が誕生する原因があり、又、日本国の文化を、あるいは公共物を平気で破壊する学生を生みだした根本的な所以であらう。

戦後教育には国史・修身、教育勅語の三つの教育元素がなくなつてしまった為、国体の精華が行方不明になつてしまつたのであらう。

我が日本国は皇統連綿たる萬世一系の縦の筋を貫ぬき、それを中心にして日本の民族文化は榮えて来たのである。占領下に作られた現行憲法改正はともかくとして、早く学生教育指導要綱を改正しなければ日本人の心の中心迄腐つてしまふ。

ここは心の故郷か

ひさの思ひに詣づれば

世のさかしらの恥かしく

うたた童にかへるかな

(吉川英治)

国を見失つた日本人

世界の歴史の移り変りはめまぐるしいものがある。今日の世界、いや日本にとつても今から三十年前の人々は、たつた三十年後の今日の姿を誰も想像しなかつたであらう。

然し歴史の移り変りは結果が事実として証明している。長い間それは人類の創世以来何回となく、いや何十回何百回となく地球上の地図を塗りかえて来た。然

しそのさなかであつても常に変ることなく平和を願ひ平和になる様努力をしてきた。全人類が歴史のページをめくることに必ず次のページこそは平和である事を期待し願つた。

然し、形だけの平和や自分の欲望だけを満たす平和は眞の平和ではない。歴史は常に繰り返され、誰の力でもただすことの出来ないとしてつもない大きな力で動かされている。動かされている中にいてこそ眞の平和を築き上げる事が出来るし、それが人類をより向上させる試練であると思ふし、その試練をさけてしまつたら類廃してしまふし、人類は滅亡してしまふ。だからして歴史の事実は事実として素直に直視し歴史そのものを明日への糧にすべきである。

振り返ると今から三十数年前、日独伊三国同盟が結ばれ理由はともかく世界を相手に戦争をした。そして二十八年前に日独伊三国は共に破れた。それは足腰のたため位にたたかれた。おそらく世界中は、この三国とも百年間は立ち直る事は出来ぬだらうと思つた。然し二十八年後

の今はどうか。日独伊の円、マルク、リウは世界の通貨を変えてしまつた。

戦争で負けて経済で勝つてしまつたのだ。特に日本においては国民所得は、二年前迄世界で二十位であつたのが、昨年になつては十六位まで登り、国民総生産にいたつては世界第二位である。これは驚異的な発展である。丁度小学校の生徒が秋の運動会でやる綱引と同じで綱の両端を多人数で秋空にこだまするかけ声も大きくオーエス／＼と引き合ふ、それは世界中に響き、結果勝つた方が尻りもちをつき尻をどろだらけに汚してしまひ、負けた方は立つたま、で両手を高くあげてワイワイとはやしたてている姿そのものである。

然し眞の平和は物質では充足出来ない。現在の国内外の事情に目をむけると、みだされぬ問題が山積されている。それが年々未解決のま、年を越す。人々は政治が悪いといひ、又政治家が悪いといひ。果してそうであらうか。もし悪いものであるならばそれを正せば直る筈である。然しそれはままにならない。

それではどこに問題があるのであらうか……ここで十年位前の話だが、ある党派に所属している国会議員の欧州視察旅行の帰朝報告を思い出してみる。特に西ドイツへ行つた条りである。

議員氏「私はドイツへ行つてびっくりしました。それはベルリンでの事です。が、東西の壁は予想以上に厚く同一民族が互いに銃を向けあい、全く悲惨と云うほかはない。それにひきかえ日本は幸運である。事の良否はともかく、占領政策が統一されていたおかげで国を半分にする様な事がなかつた事によつて今日があるのだと知つて感謝したい氣持になつた。ベルリンはもとより他の都市へ行つてもそんなのだが、街を歩くといたる所で目に入るのは第二次世界大戦の傷痕が戦後十五年経つた今日でもいまだに生々しく残つているのであります。家の壁には機関銃の跡、ビルの壁は砲弾の跡が修復の出来る所は修復をし、出来なければそのまゝに放置してあるのです。然し日本はどうか？ 世界に類なくめざましい発展を

とげ、今はどこへ行っても戦争の傷痕は見つける事は出来ない。それどころか近代技術に依って真新しいビルがどん／＼建って行く。喰べ物にしても世界中のどの国の食物でも美味しい物がいつでもたらふく喰べられる。着る物も決して世界の流行に遅れをとらない。同じ敗戦国であってもこの様に違うの。いやそれどころか勝った国より豊富な面がある。このめざましい復興は世界の七不思議に数えられるであろう。』と報告していた。周りできいていた沢山の人々や国会議員さんたちはシタリ／＼とうなづいていた。

皆さんはこれをどう思いますか？。同じ敗戦国として同じ条件でスタートして西ドイツはキリスト教総同盟の、アデナウアーを大統領にし、精神面の復興を急ぎ、日本は自由党の吉田茂を首相にして物質面の復興を急いだ。そして双方の国民がそれにならった。結果は双方の国が大発展をとげた。然し発展のしかたは根本的にちがう。ではたりるものはなんでもたらないものは何なのか？……………。

本来日本の国民は、天皇陛下の御心のま、に、と有り、陛下の御心は国民の総意につながる、それが日本民族の道統である。

それはあたかも円であり、円は中心からどの点をとつてもすべて等しい距離にある線で囲まれたものである。

日本国民はすべて平等であると同じに、円には中心がないと円にはならない。その中心が天皇である。それが解らなければ日本国の発展はとげられぬであろう。

明治初年、明治天皇は「億兆誠文の宸翰」の中で「億兆一人もそのところをえざるは是凡朕の罪なれば……云々」と申されている。

これは円に対する中心の責任である。

円は中心があつてこそ円になるのであつて、中心がなくなつたら糸の切れた風筒然、どこへ飛んで行つてしまふか分らない。航海中の船が突然舵を失つたら、その船の乗組員は恐怖と不安のどんぞこに陥いるであろうし、自分だけでも生きようとする努力がみにくい争いになり獸以下の行動をする事にもなるであろう。

果して敗戦後二十八年間、我日本国民は日本民族の義務として民族の中心点を深し求めてきたであろうか。あるいは、しっかりとみつけていたであろうか？筆者は決して右翼的な物の見かたや感覚で云うのではない。ましてや「新しい道の場」とは決して右翼や国粹主義者の集まる場所でもない。日本民族の道統を守り魂への回帰を願ひ、鍊り、磨く場である

さて、ことわりはこの位にして……………国内情勢に目をむけると一昨年（昭和四十五年）はいわゆる七〇年代とさわがれ、そして七十一年はドル・ショックや米中関係の国際問題はともかくとして国内問題に目を向けてみよう。

学生の暴挙と日本国民

ある日テレビの街頭ルポでこんなのがあつた。町を歩く中年の御婦人をキャッチして

「もしあなたのお子さんが成田の闘争に

参加していたらどうなされますか？」

「そうですね、矢張り困りますね。だけど家の子はそんな事はしないからその様な心配は全然しても見なかったので解りません!!」

「ではお母さんは成田の問題をどう思いますか」

「あまりよく解りませんね」

「ありがとうございます」

そしてレポーターはマイクを持って次の相手を捜す。そのほとんどが関心がなかったり無責任な答を出している。

然し母親の思いが今の日本国民の平均的感覚であろう。何事によらず平均的教養家庭では、うちの子に限って人様にめいわくをかけるような事はしないしする訳がないと……。

然しそれが平均的と云うのはあまりにもうがった見かただと思われるむきには、もう一つの例を挙げてみよう。これはある高校生の問題である。

修学旅行で京都へ行き国宝級のお寺を見学した時、国で指定した重要文化財としての建造物の壁板に釘の様なもので学

校名と自分の名前を掘り書きして帰った。それをみつけた寺の者が紙ヤスリでキズを削り落しても、あまりに深く掘られていたので消す事が出来ぬ位である。寺の方では二度とこの様な事があつては困るので警察へ届けた。学校名と名前が書かれてあるのですぐ分り、所轄の警察で本人と父親と学校の担任の先生が呼ばれ事情調査を取った。

その中で父親の云うには「うちの子に限りその様な事をする訳がない」と云っており、警察から証拠があがつておるのだと聞かされると

「それはなにかのまちがいで、もしかすると誰かうちの子にいやがらせをしたのだ。うちの子に限ってそんな事をする訳がない」

といはり、それが筆跡の一致まで云われると態度をガラリと変え

「その様に大切な物であるならサクを作るか綱を張って見張をつけておけばよいではないか。むしろ管理がズサンすぎる」と逆に喰ってかかった。

この話は各新聞にものつたのでこの記

事を読まれた方は御存知だと思ふ。つい半年位前の事だ。

この様に社会に対して無責任で事の道理や秩序の分らぬ親に育てられた青年、あるいは学生が昨年一年間で十人近い警察官や国民を殺しているのだ。そして爆弾騒ぎはいつどこでそれが爆発するのかわからない不安は国民を恐怖に陥ししている。しかしそれらすべてを非難する事が出来ようか？

それは結果をもつてするならば非難する事も出来よう。然しそれらには原因がある。物事には条理がある如く、原因なくして結果はないのである。前書の如き無責任な家庭で育つた青少年が学校においては試験の点数や単位にのみおわれ、学校そのものが入学試験や入社試験に気を取られ、教壇に立つ先生には日教組の国家破壊的教育を受け、日本人としての中心を失つて大学へ入り、教授と学生との対話のないマスプロ化されたところで物質的にはなに不自由なく満たされ、精神的なよりどころのない不満を学校にぶつけ、又、社会、国家にぶつけて爆発し

たのだ。かつてマスコミ関係も学生の峰起を国家の目覚めとして賞めたたえ又ある意味で期待もした。マスコミ自身も国家を非難した。

果して学生本来の努めであるべき学事は、学生らしくの姿を忘れさせ、まつたく甘やかしてしまった。

しかるに今日のマスコミはどうか。最近の学生の行動は目にあまる所があるとし、新聞やテレビや週刊誌は学生の暴挙と云い狂気、残忍、と云い、卑劣、凶悪とののしる。果してそうであらうか？…筆者もかつて十年前学生時代には大いに夢をふくらませ正義感にもえて学生運動もし又一部のリーダーにもなった思い出がある。

然し当時の学生活動と今日のとはかなり感情や行動に開きがある様だし表現の仕方がちがいがすぎる。それは学校や国家、社会を建設すると云う事と破壊すると云う位のちがいである。機関車は一組のレールの上にはしか走る事が出来ない。然し一組のレールの先に幾組かのレールが接属されていたらその先はどのレールに乗

って進んでよいか若い少年達には、解らないのだ。いい加減に選ぶともなく目の前にあるレールに乗って青年期を迎える。本線から離れて、かなりの距離を走ってしまったらもう取り返しがつかない。本線に軌道を修復するのは大変であるし、国民全体がその自覚を持たなければならぬ。国鉄の新幹線開発で大きな山にトンネルを作ろうとする作業は山の両方から始められる。然しいいかげんに目見当で作業されるのではない。

充分な計算と充分な準備が必要でありそれに最も大切な事はその作業にとりかかる者が充分な経験を積んでいなければその工事は成功しない。もしいいかげんな作業をしてしまい、トンネルの穴をいくつも明けなおしたら予算がいくらあっても間に合わない。

そのたびに国鉄が赤字になり運賃の値上げをされたら国民はたまったものではない。その為にもしっかりと充分な資料と充分な技術が必要なのだ。しかるに今日の社会風潮は、国民の態度はいかに？現在の学校教育の主流は学生にとつて

は学校の先生と教科書である。小さな生徒と云う頭脳から心と云う山にトンネルを掘りレールを引き立派な日本国民としての社会人を作り出すには、それだけの充分な教科書と充分な経験をつんだ愛国精神をもった先生が必要である。

ところが教師は日教組の国家破壊の徒であり、教科書に至っては、国がより良い資料としての教科書、すなわち一個人の利益を守る為のものでなく、社会の為、日本国民として民族の自覚を知り国家に利益をもたらす、それがすなわち個人の利益につながり、それが民族の道統であり日本国民の大自然の中に育った秩序であることを教えるの教科書ではなく、現在の教科書は国が定める検定を「憲法教育法」をたてにとり「国民の意識から平和主義、民主主義の精神を摘みとらうとする検定である」として、国を相手どつて公訴し（世に云う「教科書裁判」又は「家永裁判」であるが）この様なことは一つの例にしかすぎないが、然しこの様な状態で作られる教科書を基にして生徒は勉強することを決して望んではいない。

彼等青少年は自分の意志の預り知らぬ所で大人達が勝手に議論してきめ、知らぬまゝ、に頭だけに詰めこみ、心や精神の方をほったらかしにされている。彼等学生が知ったのは、平和主義とか民主主義であり、個人を守る為の主義（イデオロギー）である。

然しその主義というものは相対性のものであり、必ず相、対立し絶対のものではない。対立、抗争の中に国家の発展はない。

元来日本民族には主義というものはなく常にあるのは祖先より伝わる日本民族の道統である。この道統を知らぬ学生を暴徒と呼び非難することが出来ようか？もしそれを無視するならば、それはまったく無責任きわまりない事であらうし、又あえてそれをするならば世の大人達は現実を良く見直して、教育の問題や、国家の問題について目覚め、日本国、国家の危急存亡のときを自覚しなければならぬ。

愛 国 心

伊勢神宮の参拝も無事すませた時、ついで先程迄暑い位に晴れわたっていた夏空が一天にわかにかきくもり、みる／＼うち上空が真つ黒になり雨がポツ／＼と降り出して来た。それは間なしに大粒の雨となり、そして滝が流れる如く降る雨は、あたかも溜った世の中の汚れを早く解決、掃除せよと洗い流さんが如く、一気に降って又すぐやんだ。

夏の夕暮に伊勢路を後にした。

八月二十七日を迎えて宛主先生は満八十才である。益々御元気で九月の大講演会をむかえられた。大阪、東京、名古屋、と三ヶ所で延べ一万人の聴講者を集めた。

金貳千万円にのぼる浄財が集った。伊勢神宮式年遷宮御造営費として、さっそく奉納した。

今年一月十六日に京都国際会議場で最後の奉賛講演会がある。

そも／＼神宮の式年遷宮とは、と云った所で筆者も専門家でないので、くわしいことは分らないが、只一つ云える事は、天武天皇十四年、今日から丁度一千二百八十七年前に、「皇大神宮に式年遷宮の制を定める。」とある。

二十年毎の遷宮は常に日本民族の古伝統をそのまゝの姿で残し、二十年に一度国民を挙げて原点にかえる。そこに民族の反省と、新しくスタートする発展の切掛けをつくる、それこそ民族の祈りなのではないか。

千三百年の間、繰り返し／＼行われてきたこの歴史は矢張り世界に類をみない日本人独得の持ち味である。理屈抜きに素晴らしい。歴史も伝統も民族と祖国への愛情に依って支えられて来たもので、いかなるものであってもそれを破壊したり、その流れを止める権利はないのだ。

民族の道統の流れは今も絶えることなく、少しづつ流れているのだ。それが証拠に九月二十六日東京の九段にある日本武道館は八千人に及ぶ聴衆が固唾をのんで聴いていた。

特に参議院議員の迫水久常先生のおはなし

〔道の国、日本の復元〕終戦前夜の御前會議の模様を語る。のなかで、陛下の戦争に対する責任感と臣民への思いやりと終戦後の心配、国民に掛けられるお心持の本当のお姿をきいて聴衆一同涙溢れるばかりであった。

ここに児島襄著の『天皇』の一節をあげる。これは陛下の人柄が良く伺がわれよう。

大正十二年十二月廿七日裕仁親王撰政の宮当時の事で難波大助の件、いわゆる俗に云う『虎の門事件』である。

『誠に残念なことが起った。元来自分は日本においては陛下と臣下との関係は義においては君臣であるけれども、情においては親子であると考えている。自分は、この心を以って心と常に思を君臣の親愛ということに致してきたのであるのに今日の出来事を見、殊にこの非行を敢てしたものが陛下の赤子の一人であることを知って、殊に遺憾に耐えない。自分のこの考えは何卒徹底するようにしてもらいたい』と珍田東宮大夫に云われた。……

……これは陛下と国民との相関関係で国民に対する思いやりである。

東京講演会の翌二十七日は天皇、皇后、両陛下の御訪欧御出発の日である。昨夜の雨は例のないスピード台風雨で朝になるとカラリと晴れわたり空はあくまでも青く澄みきって秋の柔らかな日差しをなげかけていた。両陛下の御出発に先立ったスピード台風は、天界も下界をも掃除する露払の様であった。

両陛下の御訪欧には色々な事があつた。然しそれは読者も新聞やラジオ、テレビで見てもよく御存知だと思つたので、あえてここには省略するが、ニュースにのつた二、三の例を書いてみたいと思つた。

第一はロンドンでの事です。イギリスは紳士の国ときいていたがそのイギリスを代表する一流新聞が国民の声として陛下に対し「許す事は出来ても忘れる事は出来ない」と書いている。まったく呆れて物が云えない。だから前後の事情も弁解も書く気がしないが、一つだけイギリス人に問いたい。何百年もの間世界各地に持った植民地に対する政策はどうした

のか、果して現地の土着民族の人間性を尊重してきたか、現在もある植民地ではその民族が喜んで君等を迎えているのか……筆者はそれを問いたい。

第二に『週間明星』にのつた特派員の体験——天皇さまの知られざる素顔」と題して、日の丸を焼かれて日本の報道陣はカーツとした」と云う見出しである。内容を見ると、

『御旅行中、反日感情が最も露骨だったのは、オランダである。両陛下の御出発前、島式部官長はそれを懸念して「あるいは卵の一つ二つは飛んでくるかも……』と申し上げたが、実際にはそれ以上の事が起った。

御宿泊になられたホテル・オークラの前で、一部の過激な市民が日の丸の国旗に唾をかけて踏みじり火を放つたのだ。あまりのことに日本の報道陣はカーツとなり「この野郎、何てことを！」と、アワヤ大乱闘の險悪なムード。陛下の御心がいかに傷ついたか、察するにあまりあるが、陛下は表情も歩調もお変りにならず、この黒いハブニングに耐えておいで

になられた。只一つ、持っていた日の丸の旗を親からもぎ取られ様とした幼女が「イヤ、イヤ」と泣き乍ら反抗していた姿が印象的だったが、むろん日の丸をなんとなく捨てたくなかったのだろう。

オランダでは報道陣の一人一人が、いやおうなしに愛国心に燃えあがった。命がけて両陛下をおまもりし国旗を無残な姿にしてたまるかと、氣負い立ったのだ。」以上の事が書かれてあった。読者はこの記事をお読みになって、どうお思いですか。愛国心というものは理屈に依って定義づけるものではなく、民族の道統を護ろうとした時に生まれるものだと思う。だからその一例としてこの記事を特筆したのである。

曾って十年前位前筆者は学生時代にヨーロッパを廻った事がある。それは世界平和と青年祭に日本の青年として参加する為であった。

コペンハーゲンでの青年祭が終わっての帰りに西ドイツへ寄った。その時の話を思い出したので書き添える。

ドイツセルドルフというフランスに最

も近い、古い都市に行つた時の事である。

当時はまだキリスト教総同盟の、アテナウワーが政権をとっていた頃である。筆者が会つたのはドイツ社民党の若い学生黨員である。交歓パーティーの時の会話に、その青年いわく「君はヒットラーを知っているか？私は東條を知っているぞ！彼等は我々の誇るべき素晴らしい先輩だ。何故なら彼等は世界征服という、とてつもない大きい夢を描がき、それを試みよう」と実際に努力をした事である。オイ日本の青年よ、我等の愛すべき先輩に習つて我々も、もう一度手をにぎつてその夢を実現させようではないか！！」

いきなりそう云われた私はビックリして、返答に困っていると、かの青年白く「彼等先輩達はその素晴らしい夢をみたにもかかわらず、実現の方法論がまちがっていたのだ。我々はその先輩達と同じ間違いをくりかえしてはならない。我がドイツには世界に誇る重工業がある。君の日本には又同じく世界に誇れる軽工業があるではないか。世界の経済はこの双方の工業が主流になって動いている。

だから双方がガツチリと手をにぎれば世界を征服したも同じではないか。先輩達は十九世紀以前の思想で世界を征服しようとしたから、軍事、武力に頼つたが、我が今日の青年は廿世紀に在るのだからもつと頭を使わなければいけない。だから我々はもう一度学校へ帰り勉強をしなければ必要がある。そして今度こそは我々の力で世界の経済を征服しようではないか！！」

と、云つて私に握手を求めてきた。おもわず私は彼の手を力強く握り、ヨシやろうと云っていたが、果して世界の経済は動き指導権も移り、彼のドイツ青年の云っていた通りになつてしまつた。

然し十年前を振り返つて思うに、もし立場が逆になり、ドイツ青年が日本に来ていたら、この様な考えや言葉が日本の青年の口から、ドイツの青年に聞こえていたであらうか？

それは疑問と云うより、むしろ不可能であつたらう。何故ならそれは戦後の教育の根本的なスタートが違ふからだ。

日本の事情は先に書いたので、ドイツ

の町でひろった事を書いてみます。

それは世界的に有名な港町、ハンブルグでの事である。タクシーで港の運河ぞいに走って行くと公園の道に面した所に大きな銅像が建っている。その姿があまりにも奇体なので興味を持ち車からおりてしばらく見ていた。

それは十数名の兵隊の行進の図である。顔はいずれも若いのだが全く疲れた格好をしていて。いまにもくずれそうな、でもたおれてはいないので自分にいきかせている様な、背中に背負った背囊を重そうに肩に喰いこませている。ある者はそのハイノウを、いや銃迄もぶらさげる者や引きづっている者又、傷つたのか、友の肩にすがっている者もあり、いや両ひざを折ってはっているのだ。しかしその行進はあくまでも続きそうである。しかし皆の顔には苦痛の色がない。むしろ目が生々と、ある中天を見詰めているのだ。皆同じ視線である。

筆者はその大きなレリーフを見て以来胸にやきついて今でも忘れない。一九五〇年に作られた物だ。台座に文字が書か

れている。

「誰の力も借りない、我々の国は我々の力と努力で築きあげるのだ！」それが行先に、いかなる困難があろうとも未来に向って進もう。ドイツ国家の繁栄は我々の肩に期待されているのだ。ドイツ国家万才」。

この様な事が書かれていた。

一九五〇年といえは戦争に負けて五年目である。当所はまだ占領統治下にあった筈だが、すでにこの様な事でドイツ魂を育てて来たのだ。

又ある時ドイツの女性と話をする機会があった。その女性は私の目からみても流行遅れを感じさせる毛皮のコートを着ていた。よく戦前の映画でみる肩のイカツ丈丈の長いあれである。

つい私はなんとなく不思議そうに彼女のコートを見ていたら、気が付いたらしく、

「このコートは珍らしいでしょう。これは私の母がお嫁に来る時に祖母の愛用していたものを貰って来たそうで、品物がよくて、まだ着られるので私が貰って着

ているのです。当時は高かったそうですよ。今でも仲々手に入らないし、このコートには祖母や母の思い出がこめられているので、私はこのコートがとても好きです」

と彼女は屈託のない顔をして話してくれた。私は以前の日本にはよくあった様な話をドイツの女性から聞いて、当り前のよくある話なのにいたく感心した。

それは同じ年頃の女性から聞いたせいもあるかもしれない。何故ならば今の日本は消費経済大国とかで安いものを、色やスタイルにまかせてドン／＼買替えて、流行がすたると、簡単に処分してしまう様な、うすっぺらな品物が多くなつた今日を見、矢張り反省せざるを得ない思いがしたのだ。

こういう所にも古い日本の伝統文化を平気で破壊する基がある様な気もする。

愛国心とか国を護る、又は、国防という言葉を口に出すと、すぐ右翼とか、軍国主義者というレッテルを貼られてしまう今日此の頃の社会風潮は全くおかしい。我々お互に身の困りにある文化を保存し

ようと努力することも又、我々日々の生活を互に助け合い注意しあう事も愛国心の現われからでる共存精神なのだ。

もしそれを外から破壊、あるいは愚かと思う動き、又は行動があれば、当然国民が一つになって断固戦うのは当りまえである。それでこそはじめて共存共栄であり自由ある真の民族の道統が守れるのではないだろうか。

ある本に獅子文六氏がこんな事を書いていた。

『自分の力で自分の国を護るといふ、こんな当り前の理屈はないでしょう。ところがそれは好戦的だとか、軍国主義だと云う。こんな不思議な事はない。』

元来日本人は協調性のある民族のはずなのに、いつのまにか、あたかも流行がすたれる如く協調性がなくなり、最近に至っては核家族等と云う外来生活が流行し、家庭の中迄が細分化された。このま、ほおって置くと民族の道統や伝統は受けつがれなくなってしまう。いや大袈裟に云わなくても、例えば卑近な例を

上げるなら、母親の作る味噌汁の味はうまいものだ。それは、その味で育って来たからで何の不思議もない。しかしその味を永遠に味わいたいと思うなら、やはり母親に嫁を仕込んで貰わないと、その味はうけつぐことは出来ないし、そこに家庭の和が出来、そして社会の輪が出来て、国の和が生れるのだ。

日本人は元来魂のふれ合いに依って今日迄の歴史を築いて来たので決して皮膚のふれ合ではない筈である。

昔、菅原道真はいう。和魂漢才と。

そして明治の人西郷従道は云った。和魂洋才と。

その魂を見失い、あるいはすててしまつたら日本人が日本人でなくなつてしまふのである。

いやそれだけでなく日本の国が減びてしまふのである。見失つてはならぬその魂こそ我々日本人に最も大切な大和魂なのである。

先に書いた新しい道大講演会の時、『伊勢神宮』と云う映画をみて筆者は心あたたまるものを感じた。

それは御遷宮造営に使用される建築材、すなわち神木を木曾の山奥よりきり出して伊勢迄運ぶ時の事である。本来は木曾川の水面に流して運ぶそうであるが色々川の都合やダムがつくられたため、それ

もならず、トラックで運ぶのであるが、その道すがら各村々や町々によってお祭りをしながら通るのであるが、ある村の、田畑の中を通る道にさしか、ると、お百姓さんが鋤を持つ手を休め、かぶつた手ぬぐいやむぎわら帽子をとって深々と頭

を下げる姿を見て胸が詰まる思いがした。それは全く自然でなんのこだわりもなく、そうするのがあたりまえであり又、

ありがたいのだと云わんばかりに、その姿は本当に素朴であり、日本人に忘れかけたものを思い出させる様な気がした。

今日の日本は情報文化の発達の上で、都会の人間程色々な事を知っている。それがあまり必要でないものが多すぎ機械的になつているために、この田舎の素朴さが失われてしまったのだ。

然しその素朴な農民の祈りをみた時、日本はまだ少しの間は大丈夫だと感じて、

無性に胸に熱いものを感じざるを得なかつた。

然し現代の情報公害ほどの様な山奥であつても日本の隅々迄すでに侵食しはじめているのだから、一刻の猶予もならない。このまゝ、手をこまねいていたら国が亡びてしまう。日本人であるならば、それを知つた時起き上がりなければならぬはずである。そして何かをする努力をしなければならぬはずである。

然しその何かをどうするか、又、どうすべきかを問う前に、それを完全に遂行する事の出来る自分でなくてはならない。その思いがあつても、思いだけではしよせん絵にかいた餅みたいな物である。

実際に手にとり、形、色合い、味わいを知らねば人に知らせる事は出来ないのです。自分だけが助かる一人よがりでは駄目である。一人でも多くの人に知らせ助けねば国が亡びてしまうのである。国は一人の為にあるのではなく民族の為にあるのである。

すなわち国があつたればこそその日本人であり自分なのである。自分一人では国

が支えられないのである。その為にも一人一人の持ち味を生かして大勢の力を合わせて働かなければならないのである。

「新しい道」はその為にあり、又天人女史はそれを知らせる為に、お生まれになり、今日あるのです。人間には我を生かす息のこもつとがあるのです。

そして天人女史に依つて始めて魂の真の所在がわかるのです。

それを磨くことによって、各人の持ち味を発揮する事が出来るのです。

その魂を磨くことを教え込んで下さることの出来る人は天人女史をおいて他に絶対にないのです。

日本の国は単味ではありません。いろいろの味が集つてこそその日本の国なのです。それだけ多くの人を必要とします。

その為に苑主先生は八十才の老軀に鞭打つて皆様に呼びかけているのです。もし読者、あなたが大和魂を持った日本人、現在の日本を憂えている日本人であるならば、来たりて見よ天の場へ、そして、天人女史にお会い頂いたら、必ずや本當の事が解るでしょう。

新しい道は日本の国を建て替える真の道なのです。そしてその為に働く真の日本人の集りなのです。道友一人〳〵が伊勢路に向うかがり火を持つのです。その光こそは国を救うのです。

天照らす 神の御光 ありてこそ
我が日の本は くもらざりけれ

(明治天皇御製)
(昭和四十七年一月元旦記す)



文芸

冬の日の

空澄みわたり

新しい道

世にのし出づる

時に真向ふ

三重 浜地 文平

☆

千匹の蜂にさゝる、痛みありと

癌痛む和歌にしばし息のむ

拂えども入り来る思い打消しつ

群衆の中顔上げて行く

天恩の深遠なれば知らされし

身上的証抱きて、つがむ

道の子の祝ぎ歌に合わせ首ふらる

思は小さき園時代ならむ

(新館落成式の余興の時)

広島 松田 鈴香

あさぼらけ

いつどこで 何があろうとかまわない

己は己に己なきなり

何ごとも心心でものを計るなど

みたまが内におわしますぞよ

天の下 如何なることがあろうとも

己を忘れて国を忘るな

み国さえ忘れずことに励むなら

天が見ている人知らずとも

過去は過去 今をよろこぶ人となれ

みたまはそれをめでてやるぞよ

昭和四十六年十月十五日 朝

東海 末竹直一

“あさ”評論

高坂甚之助

竹の絵の下に、古歌がひとつ書かれてあつた。

たおされし 竹は おのずと 起きのびて

たおせし雪は あとかたもなし

あるところから「名言カレンター」というのが送られてきた。三十一枚にそれぞれ名画と名言が印刷されてあつた。

日本美術院の○○氏の絵の下に、古い古い、誰れが詠んだとも知れぬ歌が、今日も尚生き生きとして記されていたのである。

“自然は親なり”と私達新しい道のもは天人女史から教わっている。自然に親しむということの少くなつた現代人、いやあまつさえ自然を破壊している現代である。自然から人の生き方を悟るなどという事は遠い過去に置き忘れてしまつた今日である。

竹の雪を観て、かゝる歌をよむ心を我々はとりもどす必要があるのである。ななかりうか。

歌の意は、

竹に雪がかゝつて、竹は大きくしないである。雪によつてたおされている竹は、めぐりくる春には自然に起き、そして一段と伸びるが、のしか、つている雪はあとかたもなくなつて消え失せてしまふ。

ある知人はこの歌をみて、「負けるが勝ち」と受けとつた。

ある友人は、「苦を喜べ」と解した。

ある人は、「忍従」と読んだ。

いずれの受けとり方もおもしろいと思う。たしかに「伸びる前のひとかゞみ」と受けとれる。そしてそれでいいと思える。

だが、これらの受けとり方の支点はいずれも“たおされし竹”に「私」を置いての受けとりである。“竹”を中心にして、“雪”を従にしている。だから“苦”が連想されるのである。今日迄の宗教の修行がそうである。努力主義であり、悲愴感がたゞよう。

それでは

“たおせし雪”に支点を置いて受けとつてみたらどうだろう。

“たおせし雪”に自分を置いて考えてみると、「何々せし」という行為のすべてが、あとかたもなしと受けとれる。此

処に自己の行為のむなしさを観ることが出来る。善悪、長短、陰陽の相対を超えられるように思える。

しかしこの受け取り方には、虚無の隙風すきかぜが入り込む。下手をすると野狐弾に墮する。

たおされし竹にも、たおせし雪にも支点を置かず、又そのいづれにも支点を置くのである。

竹も、雪も、いづれもが同根である。だからこそ、竹はめぐる春の季節まで、自然のなすまゝに喜んで冬を生きたことが出来るのである。

俗に云う「背に腹は変えられん」と。もつともな事である。だが新しい道は、背に腹を変える道である。それがどうして出来るかといえは、たおれし事も、起きのびる事も、すべて自然まほとするからである。これを絶対といい、人より以上と云うのである。

竹の雪はあとかたもなく消え失せてしまう。それを人生の苦と受けとるが故に、人は苦楽の相対に迷うのである。

「苦」とは何か。古い草のことである。即ち「苦」とは「根」のことである。即ち「竹」も「雪」も同じ「根」から出ているのである。ことをよく知って次の天人女史のお言葉を読んでいただきたい。

人間に苦しみの度合を高めたら、きっと己が出すぎるとは、何と修養のないしるしです。

人間ほどつまらないものはない

人間ほど苦をにげるものはない

苦は自分でさがしてせよ

苦は人のものまでせよ

苦は考えずにせよ

苦はあたってやぶれ

苦は実行という

苦を知ったら、にがさん人間が大成する

苦 を

苦をしないとしるとで、人間のあまさがちがう。

人間があまいと苦をしない人という。人間が苦をよるこぶのはよほど通れる自信があるからである。

してみると自信はどこにある。己れにある。己れがあったらきつと己れに勝てる己れをつくる。

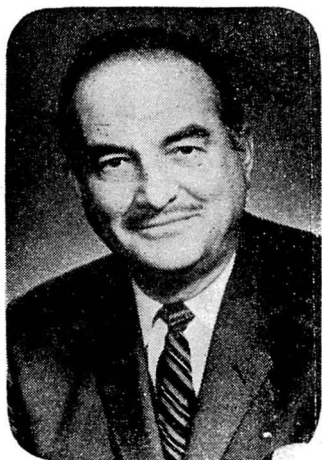
これが人生の「こく」である。

(「教の泉」昭和三十一年七月八日十四卷)

紹介

ドナルド・カーチス著

「黄金の橋」

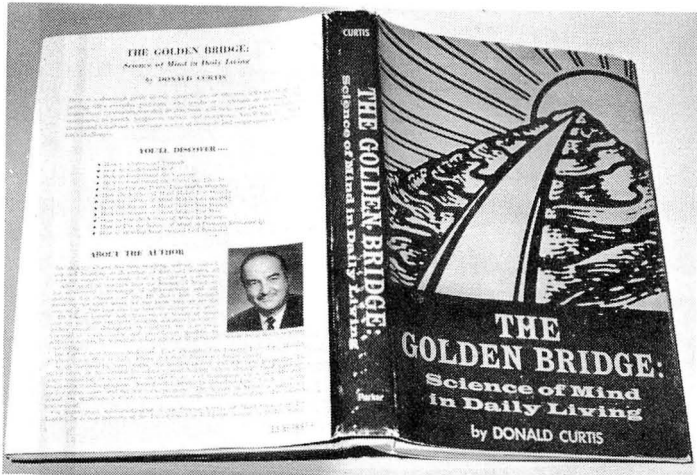


ドナルド・カーチス博士

一昨年（一九七〇年）の秋、太平洋を越えて来日し、忙しい講演旅行の日程を割いて、「新しい道センター」を訪ねて来られた米人哲学博士があつた。（「あさ」10号参照）

そのドナルド・カーチス博士の新刊の書物が、松木天村先生に贈られて来た。立派な装幀の本で、表紙カバーには、太陽に向つて荒波を越えて橋がか、つている図柄が、金色と黒で描かれている。表題は、The Golden Bridge. 「黄金の橋」サブ・タイトルには「日常生活における心の科学」とある。

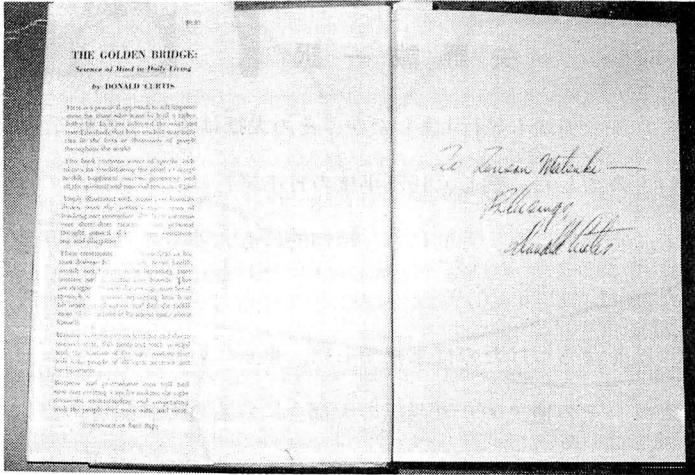
博士は学者であり思想家であるけれども、深遠な真理を説くのではなく、極く普通の日常生活の中で、如何に生きたらしあわせになれるかを説く。そのための「心」



の持ち方を具体的に或は科学的に指導するのである。その拠り所は聖者の言葉であり、味付けは博士の学識と豊かな人生経験である。この組み合わせが実にうまく行っているために、博士は自分で一つの教会を持つかたわら、テレビやラジオにも自分の番組を持ち、多くの著書も出して、この宗教的的人生相談ともいべき分野で成功しておられる。

本書の骨子は、おそらく、ロサンゼルス放送局から十年以上にもわたって放送された「みちたりのた生活への黄金の橋」という博士のラジオ番組に由来するのではないかと思われる。

序文に次のように書かれている。「この本の目的は単に読んでもらうことではなく、その内容をよく理解し吸収して、示されている通りに生活してもらうことである。この本の中にある理念を、あなたの潜在意識の中にまでよく滲透させなさい。書かれている方法と示唆に従いなさい。くり返し／＼それが自分のものとなるまで努力しなさい。新しい人生はあなたのもとなります。」更に第一章には「私達の研究の対象は、一番よく分っている筈の私達自身です。その研究のためには、ただ一つの場所ただ一つの時しかありません。それは今というこの時間。このこというこの場所です。私達の探し求めている答は、



のと同じ事柄である。「人、全世界を得るとも、己がた
ましいを失わば、何の益あらん。」と。

たしかに、この実業家は自分自身を見失っていた。成
功と物質的な豊かさを求めて、遮二無二自分を駆り立て
、来て、根本的な価値を見失ったのである。諷刺漫画の
モデルとなっていたといえる。

事業に成功した富裕なこの中年の実業家は、自分のこ
の悩み以外に関心がないかのように、うつろな目をして
坐っていた。

「主人を見てやって下さい！」

実業家夫人が叫んだ。「主人は長年仕事以外は何もしま
せんでした。彼はもがきた、かいながら、一人で自分の
道を進んでいったので、だれもそれを止めることは出来
ませんでした。主人は自分のやり方で成功をもぎとった
のですけれど、少しもそれを喜んでいないのです。」

この深刻な悩みに対する処方として、博士は人生の妙
薬としての「愛」を、あらゆる角度から説かれるのであ
るが長くなるので割愛する。

最後に筆者の願いとして、表紙に描かれた「黄金の橋」
が、世界救済のために日本から太平洋を越えて架けられ
る目に見えざる橋の象徴であってほしいと思うのである。

(以上)

ジナ・サーミナラ

「日本見たまゝ」

矢野 誠 一 訳



私はこれまで何度も旅行しましたが、その大抵は色々な意味で私には意義深いものでした。然し、1971年秋の日本旅行は、それまでのどの旅行よりも、審美的にも、智的にも、精神的にも、多くの点で実り多きものでした。

最初に腰を落ちつけたのは東京でした。東京にいるのは、ニューヨーク、シカゴ、その他アメリカ西部の大都会にいるのと、諸々の点に於ては、勿論何等の変りもありません。東京にも、地下鉄、高速道路、交通地獄と排気ガス、超高層ビル、絶え間ない道路工事、ひどい飲料水、スモッグ、耳を聳する騒音があります。然しいくら違ったところもあります。近代工芸技術のつくり出したものとそれによる不利益にも拘らず、東京には世界中どこにも見られないような日本の特性が残っています。間もなく、それは東京だけではなく、日本国中至る所でそうであることが分ったのですが。

それは先ず第一に、独得の風習というか、珍しい習慣というか、ほんの些細な事柄に見出されるのです。その中で特に印象づけられた二つの事柄は「おしぼり」の使用と、家に入る時に靴を脱ぐという風習でした。「おしぼり」というのは、熱い濡れタオルを巻いたもので、大きさはアメリカ人の使う洗面布よりは普通一寸大きなものです。それは食事やお茶の前、レストランでは顧客に、家庭では訪問客に出されます。列車や飛

JAPAN AS I SAW IT

I have made many journeys in my life, and most of them were meaningful to me in one way or another. However my trip to Japan in the fall of 1971 was in many ways more rewarding -- aesthetically, intellectually, and spiritually -- than any previous trip I had ever taken.

My first stop was in Tokyo. In some respects, of course, a stay in Tokyo is no different from a stay in New York, Chicago, or any other big western city. Tokyo has subways and freeways, traffic jams and exhaust fumes, skyscrapers and perpetual road construction, abominable drinking water, smog, and deafening noise. Yet somehow there is a difference. Despite all the devices and the disadvantages of modern technology, Tokyo -- and all Japan, as I soon found -- still retains a distinctive Japanese quality not to be found elsewhere on this planet.

It is to be found first of all in little things: in distinctive customs and unique observances. Two of these which impressed me in particular were the use of oshibori and the custom of taking off one's shoes when entering a house. The oshibori is a rolled up, hot, wet towel (a little larger, usually, than an American face cloth) -- which is served to patrons in restaurants or guests in a house before they start to eat or to drink tea, and on trains and planes shortly after the journey begins. Usually the oshibori

行機の場合には出発後間もなしにです。普通「おしぼり」はそれを載せるのにふさわしくデザインされた、技編み細工の、小さな容器に載せて出されます。

それは暑い日でも寒い日でも、サッパリとした気分にしてくれる、有難くて、楽しみなものです。私などは、よその国でも真似てほしいと思っています。家に入る前に靴を脱ぐということについて言うと、これは他に類のない、日本的な甚だ気の利いた風習です。坐りもし、食べもし、寝もする畳敷の床の上へ、街路の土や埃をくつつけたままの足を運んでよいでしょうか？これらの日本の風習の共通の基盤は、言うまでもなく、日本人の綺麗好きです。

滞在の初期に印象づけられたもう一つのことは、ほんの一寸した買物をしてでも包んでくれる紙の美しさでした。色彩豊かな、想像力に富んだデザインは凡ゆる店の包装紙を特徴あるものにしてあります。で、私はそれを捨てるに忍びず、又事実、捨ててしまえませんでした。帰途の私の旅行鞆は、買い物や、人からの沢山な贈り物のせいだけでなく、自分の包みと友人の包みから蒐集した包装紙のコレクションのために、前よりは可成り重くなっていました。

それから日本人の花好きがあります。ところが、日本の庭園は、普通イギリスやアメリカの庭園のように花が一杯植えられている訳ではなく、自然のままの豊富さで多種多様のものが植わっているのに気がきます。然し、殆どどのタクシーにもバスにも計器板の所に小さな花活けがあって、一輪か時には二輪の花が活けてあります。そして、殆どの家庭には床の

is served in a small wicker receptacle designed for the purpose. Both on hot days and cold, it is a welcome and refreshing comfort, which I for one would like to see other countries adopt. As for taking off one's shoes before entering a house, this is a uniquely Japanese and eminently sensible custom. Why should one track the dirt and grime of the street on to tatami-covered floors where one sits, eats, and sleeps? The common denominator of both these Japanese customs is, of course, the Japanese love of cleanliness.

Another thing that impressed me early in my stay was the beauty of the paper in which the simplest purchase is wrapped. Colorful, imaginative designs characterize the wrapping paper of all the shops; and I found it difficult, in fact, impossible, to discard them. My luggage on the trip home was considerably heavier than before, not only because of the purchases I had made and the generous gifts I had received, but because of the collection of wrapping papers I had accumulated both from my own packages and those of my friends.

Then there is the Japanese love of flowers. Japanese gardens, actually, are not usually as flower-filled as English or American gardens, where one often finds many varieties in wild profusion. But in almost every taxi and bus there is a small vase on the dashboard, containing one and sometimes two blossoms. And in

間があります。床の間というのは家の中でも格のある場所で、そこには簡素な芸術品や、日本古来の華道の原則に則って創作された美しい活け花が展示されます。

要するに、日本人は自然美というものに敏感で、幾世紀もの間に感ずき、学んだことを通して、その美を色々な方法で活かすことの出来る、芸術的な国民なのです。日本人の清潔さ、芸術性、自然尊重といったことのこれらの現われが、離れ離れの相互関聯のないものではないということ、また、日本人の歴史や気質の単なる偶発的なものではなくて、むしろ、日本人の、生命というものについての宗教観に深く根ざしているということに鋭敏に気付くようになったのは、この度の旅行に於てでした。

この宗教観は、4世紀に支那を経由して印度から輸入された仏教と、もっと古い生えぬきの信仰である神道とが入り混ったものです。この二つの何れが日本人の性格に、より大きな影響を与えたかを言うことは、丁度太陽と雨のどちらが桜桃の果樹園に、より一層効果があったかを言いきいといふのと同じで、おそらく非常にむづかしいことでしょう。然し、私は神道の方が、より一層深く、より一層凡てに浸透していると思います。

東洋の宗教は今日では、西欧人それも特に若い人に可成りよく知られるようになって来ました。然し、神道はとても仏教程に読まれてはいませんでした。そして、実を申しますと、私も極く最近まで、神道については殆ど全く知らなかったということを白状しなければなりません。

私はある時期暫く仏教の基本的な考えに親しんだことがありましたが、

almost every home there is a tokonoma -- a place of honor where a single art object is displayed, and a beautiful flower arrangement, made according to the principles of the ancient Japanese art of flower arranging.

The Japanese, in short, are an artistic people, sensitive to the beauty of nature and capable, through centuries of awareness and study, of rendering in many ways.

It was on this trip that I became acutely aware of the fact that these expressions of cleanliness, artistry, and nature appreciation were not isolated or unrelated phenomena, that they were not mere accidents of history or temperament, but rather deeply rooted in the Japanese religious outlook on life.

This outlook is a composite of Buddhism -- which was imported from India by way of China in the 4th century --and Shinto, which was the more ancient, native faith. It would probably be very difficult to say which of the two has had the greater effect on the Japanese character -- as difficult as to say whether the sun or the rain has had more effect on a cherry orchard. But I would suspect that Shinto has been deeper and more all pervasive.

Eastern religions are becoming fairly well known to westerners these days, particularly to the youth. Shinto, however, has not been nearly as much read about as Buddhism, and I must confess to an almost total ignorance of it until very recently.

その瞑想的な修行は有益なものだと思います。私の考えは、我欲を減ずるといふその中心の教えにある程度影響を受けました。ソクラテスはアテネの市場の中を通りながら「この世の中には何と欲しくもないものが多いことか」と言ったということです。ソクラテスは仏陀については恐らく何も聞いてはいなかったでしょうが、この表白には仏教的な香りがあります。私もデパート、特に東京は銀座の幻想的なデパートの中を歩きながら、しばしばその言葉を私自身に繰り返しました。

仏教は心理学的洞察に於ては深遠な、道徳観に於ては高尚な、偉大な宗教です。然し、少くとも普通英訳で紹介されている限りに於ては、それは聊か浮世離れがしているような気がするのです。「このうたかたの世は災難や苦惱に満ちている」と仏教徒はいいます。「それなるが故に、それを断ち切り、それから解脱して、二度と再びそれに逆戻りすることのないように我々の出来ることは何でも皆するがいい、

そういう観点には確かに永遠に妥当性を持つ何ものかがあります。でもそれは世の中についての今の私の考えとは何となくそりが合わないことに気付くのです。今日世界には、栄養失調や、病気や、住むに家がないために苦しんでいる人が無数にいます。また、研究のための実験室や屠殺場やその他で人間の側の野蛮な取扱いに苦しんでいる無数の動物がいます。苦しんでいるこれらの凡ての人に、この世は苦痛に満ちた幻影であって、この世の運命をどうにかして切り換えるためには凡ゆる欲望を断ち切らねばならぬという高尚な真理を知らせることが十分に責任ある態度であるとは私には思えません。そして、人は甚しく虐待されている

I had been familiar with the basic ideas of Buddhism for some time, and I had found its meditational disciplines useful. Its central teaching, the killing out of selfish desire, has also affected my thinking to some degree. Socrates reputedly remarked, while going through the market place in Athens: "How many things there are in the world that I do not want!" The statement is Buddhistic in flavor, though Socrates probably never heard of Buddha. I have repeated it to myself often, when walking through department stores -- especially the fantastic ones in the Ginza in Tokyo.

Buddhism is a great religion, profound in its psychological insights, noble in its ethical outlook. Yet there seems to me to be something other-worldly about it, at least as it is commonly presented in English translations. This transient world is filled with suffering and pain, say the Buddhists; let us therefore do everything we can to renounce it, to get out of it, and never return to it again.

There is doubtless something perennially valid in this point of view, and yet I find it somehow out of phase with my current thinking about the world. There are millions of human beings in the world today suffering from malnutrition, disease, homelessness. There are millions of animals suffering from barbaric treatment on the part of humans in research laboratories, slaughter houses, and elsewhere. To tell all these suffering human beings the Noble Truth that this world is an illusion filled with pain and that they

動物達にはこの高尚な真理を伝えることは出来ないのであるから、若し動物達の苦痛を軽減する術がないとするならば、人は皆動物虐待の共犯者となるのです。

残虐な社会悪は数世紀の間この地上に存在して来ました。そこで、世の中の諸事情を如何ように改善することも絶望的なまでに不可能だと思われた過去の時代に於ては、この世の不幸から自分自身を開放するという面から先ず第一に考えるということが適切でありました。然し、今日では知性や善意のある適任者が懸命にやろうとしさえすれば、この地球から貧困や戦争や無智を完全に除去する知識と技術的手段の双方を我々は持ち合せているのです。

アメリカに於けると同様日本に於ても存在する今日の生態学的危機は、その必然的結果として伴う諸々の論議を激化、増大させています。空気や水はアメリカ同様日本でも汚染されています。人は清浄な空気や水に対する欲望を、確かに断つことは出来ます。然し、もしそんなことをすれば、人は死ぬでしょう。諸共に、正に死ぬでしょう。今日ほど社会的な関心事が緊要なことは過去の歴史の如何なる時代にもありませんでした。それは-----かまたは-----かという事態ではありません。即ち、社会的関心事か又は個人の精神的修養かという事態ではないのです。それは社会的関心事と個人の精神的修養の両方の問題なのです。両者の組み合わせが必要なのです。

こうした考慮に照して見ると、神道の古い考えが俄然、輝かしい、優れた適切さの中に浮び上がって来ます。それは神道が社会的な行動につ

should kill out all desires for improving their earthly lot somehow does not seem to me to be fully responsible. And since one can not convey the Noble Truth to the much abused animals, one becomes an accomplice to their abuse if one does nothing to relieve their sufferings.

Atrocious social evils have existed for centuries on this planet, and to think primarily in terms of freeing oneself from the misery of earth living was appropriate in past ages when any improvement of earth conditions seemed hopelessly impossible. But now we have both the knowledge and the technical resources to rid this planet of poverty, war, and ignorance completely, if only enough people of intelligence and good will set their minds to doing it.

The current ecological crisis -- which exists in Japan as well as in the United States -- intensifies and heightens the issues involved. Air and water are poisoned in Japan as well as in America. One can kill out the desire for pure air and pure water, to be sure; but if one does, one will soon find oneself dead. Very dead. Along with everybody else. At no time in history was social concern as imperative as it is today. It is not an either-or situation: either social concern or spiritual discipline. It is a question of both social concern and spiritual discipline. The combination of the two is necessary.

いて多くのことを語っているためでもなければ、どんな道徳的な戒律を与えているためでもありません。神道はそういうことはしておりません。と言うよりも更に適切に言えば、神道には精神を大いに培う、単純で、根本的で、不思議な概念があります。誠、清浄、永続性のある勤勉と創造性、報恩感謝の気持、先祖やこれから生れてくる世代に対する義務などです。そして、凡ての概念の中でも、恐らく最も重要だと思われるものは 凡ての生命に対する畏敬 ということでしょう。それは凡ての生命は神性を備えているからです。生命を畏敬するという純正な態度を持するならば、包括的な、社会的な、そしてまた、全地球的な関心事が自然それにならうようになって来ます。

こういった概念が私を蘇る思いにさせたのは、東京から汽車ではぼ2時間位の距離にある伊勢という町の大きな神道の社を訪れた時のことでした。言い伝えによれば、その社は4世紀に創建されたということです。

それは古木の大きな森の中に建てられており、その神域は約 1.500(?) エーカーの敷地を含んでいます。私はアメリカの詩人、ウィリアム・グーレン・ブライアントの詩句—森は神の最初の神殿だった—を思い出さずにはいられませんでした。というのは、聳え立つ、巨大な木々の荘厳さの中にあって、私は無数の人達がきっと感じたように、浄らかな、威厳のある何かがあることを感じたからです。

美しい神域と神殿が象徴する最たるものは、再生と浄めの観念に関係があります。20年毎に本殿がすっかり取毀され、精密な細部に到るまで、寸分違わず模写されたものが隣接の二つの敷地の何れかに建てられます。

In the light of these considerations, the ancient ideas of Shinto suddenly leap into bright and shining relevance. Not because Shinto says very much about social action or gives any ethical commandments. It does not. It has rather certain simple, basic, talismanic concepts which are very fructifying to the spirit. Sincerity. Purity. Everlasting industriousness and creativeness. Gratitude. Duty to the ancestors and to the generations yet unborn. And, perhaps most important of all: reverence for all life, because all life contains the divine. If one has a genuine attitude of reverence for life, a comprehensive social and planetary concern naturally follows.

These concepts came to life for me when I visited the great Shinto shrine in the town of Ise, about two hours away by train from Tokyo. According to tradition, the Shrine was founded in the year 4 B.C. It is set in a huge grove of ancient trees, and the grounds include some 1500(?) acres of land. I could not help but remember the lines of the American poet, William Cullen Bryant: "The groves were God's first temples;" for here, in the majesty of the great, towering trees, I felt, as I am sure millions of others have felt, the presence of something pure and awesome.

Most of the symbolism of the shrine's beautiful grounds and buildings has to do with the ideas of renewal and purification. Every twenty years the entire main shrine is taken down and an

この再建は再生、新生を象徴しています。常緑木の榊の枝が10日毎に社の中で取り替えられます。これは再生の今一つの象徴です。榊の枝には、折り重ねた白紙の細長い切れ(訳者註—御幣)が下っています。これは清浄の象徴です。神域に入る前には、手を洗い、口を滌がねばなりません。そのため柄杓のついた大きな御手洗が備えつけてあります。祓い浄めのもつと念入りな儀式は、参拝者が内殿若しくは外殿に入る前に行われます。

然し、最も私が心を打たれたのは、神域の中を私を伴って案内してくれた若い神官がしてくれた説明でした。神社の再建には新しい木材が必要で、その木が切られる前には、神官によって儀式が行われるのだということをお話してくれました。神官の中の一人が、山の精と凡ての樹木の代表として選ばれた一本の木の精に対して祝詞をあげます。それは樹木の命を奪うことに対して容赦を乞う祈禱の言葉です。[※]私達はお前を切ろうとしている。お、木よ！許せ。お前の命を取らんがために取るのではない。お前の体は聖なる象徴、社に使われるであろう、10年前ならば、私はこれを馬鹿馬鹿しいとは言わないまでも、詩的な、然し一寸おかしなことだと思ったかも知れません。けれども、今は、植物が記憶や、感情や、知性や、超感覚的な知覚を持っていることを証明するクレーブ・バックスターの実験に照して見て、聊かも馬鹿馬鹿しいとは見做しません。寧ろ、知的で思いやりのある行事だと思うのです。私は、それが世界中の凡ての開発者や、道路建設者達のとるべき必須の手續きとなるのを見度い

※

1968年度の[※]The International Journal of Parapsychology、第4号参照。

exact replica is built, down to the minutest detail, on an alternate and adjoining site. This rebuilding symbolizes renewal, rebirth. Branches of the sakaki tree -- an evergreen -- are replaced every ten days in the shrines -- another symbol of regeneration. Long white strips of folded white paper hang from branches of the trees: a symbol of purity. Everyone must wash his hands and rinse his mouth before entering the grounds of the shrine: a large basin of water with wooden dippers is provided for the purpose. More elaborate ceremonies of purification are performed before the pilgrim may enter the Inner Court or the Outer Court of the Shrine.

But the thing which struck me most was the account given me by a young Shinto priest who accompanied me through the grounds. He told me that fresh lumber is needed for the rebuilding of the Shrine, and a ceremony is conducted by the Shinto priests before the lumber is cut. One of the priests says a prayer to the spirit of the mountain and to the spirit of one of the trees, taken as representative of all of them. It is a prayer of forgiveness for the taking of its life. "We are going to cut you down, O tree. Forgive us, please. We do not kill you just to kill you; your body will be used to house the sacred symbols."

Ten years ago I might have thought this poetic, but a bit odd, not to say absurd. Now -- in the light of the Cleve Backster experiments showing that plants have memory, feeling, intelligence, and ESP -- I find it not in the least absurd. I find it, rather, an

と思います。そして、その人達が樹木や、その他の命あるものを無茶苦茶につぶすことが法律で禁じられ、どうしてもつぶす必要がある、命あるものに対しては、それが何であれ、容赦を乞い、感謝を表わす言葉を述べるように、新しい宗教的な感覚によって、吹き込まれることを望むのです。

私は、アメリカインディアンが、自然に関しては、神道家と同じ態度を取っていたことを思い出している自分に気がしました。水牛やその他のどんな野生の獲物を狩る前にも、インディアンはその霊に祈りの言葉を申します。"水牛よ（或は、鹿よ、兎よ）、お前の命を取ることを許せ。私と家族の者がお前を食べんがためにのみそうするんだ。お前の体を私達に与えてくれることを感謝する。お前の霊が他界で安からんことを祈る、と。

私が神域を去る前に、記名簿に⁴現代の生態学的、道徳的危機に際しては、全世界は神道の精神と実践を緊急に必要とする、と記す気になったのは、こういった配慮からでありました。神道は古い信仰でありましょう。また、その幾つかの儀式や祭典は生えぬきの日本人にとってのみ意義深いものでありましょう。また、その幾つかの実践は、他の大抵の宗教に於てもそうですが、合理的というよりもそれを通り越して断言的でさえあるかも知れません。然し、その根本的な原理は、永遠に妥当するものであり、特に今日のような時代の絶望的な瀬戸際には適切なものであります。

人が自然に対する態度を改めなければ、また、自然に対して行って来た憎むべき行為を正さなければ、人はその行為の結果によって完全に滅ぼされるということは間違いないように思えます。これをなし遂げるに

intelligent, courteous, appropriate thing to do. I would like to see it become the required procedure of every land-developer and road-builder in the world, who would be prohibited by law from the wanton destruction of any tree or other living thing, and inspired by a new religious sense to utter a statement of forgiveness and gratitude for whatever living thing was of real necessity destroyed.

I found myself remembering that the American Indian had an attitude similar to the Shintoists regarding nature. Before hunting buffalo or any other wild game, the Indian would say a prayer to its spirit: "Forgive me, O buffalo (or deer, or rabbit) for taking your life. I do so only that I and my family may eat. Thank you for giving us your body, and may your spirit be happy in the other realm."

It was because of these considerations that I was moved to write as I did in the Guest Book, before I left the grounds: "In its current ecological and moral crisis, the whole world urgently needs the spirit and practice of Shinto." Shinto may be an ancient faith; some of its observances and festivals may be meaningful only to native born Japanese; and some of its practices may -- as in most other religions -- be more superstitious than rational. But its essential principle is perennially valid, and peculiarly appropriate to the desperate emergency of our time.

Unless man changes his attitude towards nature, unless he corrects

は、凡ゆる生命態に対して神道のような畏敬の態度、少くとも尊重の態度がなければなりません。これは土壤、水、空気も含めてのことです。また、すべての植物類及び動物類も含んでいます。それは能率を挙げ、利潤を獲得するために、鶏や、子牛や、豚をあまりにも小さいためにその中でも廻せないような所に一生閉じこめておくという農法で、動物達に対して行っている冷酷無情な残虐行為は禁止されることが望ましいということも意味しています。それはまた、人間が蒙るであろうと推定される利益のために、研究室で、自分ではどうすることも出来ない、無力な、罪のない動物の上に行われる非情な実験は卑しむべき行為であり、凡そ有情にして神性を備えた生命に対する冒瀆であると見做されることが望ましいということも意味しています。動物実験に対しては、もっと費用のかからない、もっと信頼出来る、もっと人情味のある、[※]他に選ぶべき多くの方法、例えば、人体組織培養、コンピューター、うにの卵を使う方法等々が役立つからには、今日至る所の研究室に普及している、残虐で、粗野な、中世式の古臭い実験方法を採用し続けるということは、何等の理由もないことなのです。

第二次大戦後、そして日本の二大都市に対する原爆投下後、日本には大いなる絶望と精神的な混乱がありました。天皇は最早現人神と見られ

※ これらの他の選ぶべき方法について更に知りたいと思われる方は次の機関に問い合わせられ度い。

Fund for the Replacement of Animals in Medical Experiments, 35 Wool Road, Wimbledon Common, London S.W 20 及び
United Action for Animals, 509 Fifth Avenue, New York, N. Y. 10017

the abominations he has committed against it, it seems certain that he will be completely destroyed by their consequences. To accomplish this there must be a Shinto-like attitude of reverence, or at the very least, respect towards all living forms. This includes the soil, the waters, and the air. It includes all plant forms and all animal life. It means that the unfeeling cruelties committed against animals in farming by keeping chickens, calves, pigs confined for life in spaces too small to turn around in for the sake of "efficiency" and profit -- would be prohibited. It means that the heartless experimentation on helpless and unoffending creatures in laboratories for presumed benefits for mankind would be seen as an ignoble act and a desecration of life which is all sentient and all divine. Now that many alternatives to animal experimentation are available (human tissue culture, computers, sea urchin eggs, etc. etc.) *-- alternatives which are cheaper, more reliable, and more humane -- there is no excuse for continuing to use the cruel, crude, medieval, and obsolete methods of experimentation prevalent in laboratories everywhere today.

After World War II and the atomic bombing of two great Japanese cities, there was much despair and spiritual confusion in Japan. The emperor's public pronouncement that he was not to be regarded any longer as a divine figure profoundly shook many people. It is understandable therefore that a great upsurge

るべきではないという天皇の人間宣言は多くの人達を深く動揺させました。

それ故に、実に数百の新興宗教が大きく湧き上るよう出現したことが理解出来るのです。その多くは寿命が短かったけれども、また多くのものが今日まで生き残っています。これらの宗教は甚だ多様です。その多くは、仏教的要素と神道的要素を含んでいます。その大抵は伝統的仏教に見られるよりも、もっとこの現世の生活を改良することに大きな重点を置いています。今この現世に於て幸福を実現するという事に関しては、それらの宗教には、非常な楽観主義があります。『生長の家』のように、そのあるものは、形而上学的な宗教です。つまり、それらは積極的な思考の力を強調しています。

日本にいる間に、これらの新しい宗教活動の一つである『新しい道』と、その創始者である松木天村氏及び天人女史という名を持つ同夫人と、個人的に接触を持ったのは私の好運でした。『新しい道』は宗教ではない、と松木氏夫妻は主張します。然し、これは恐らく、意味論乃至は定義の問題です。固定的、義務的な信条乃至は教義や、教会網や、有給の司祭乃至は聖職者達が揃っている何かを宗教と定義するならば、『新しい道』は確かに宗教ではありません。反面、それは宗教として述べられるにふさわしいと思われる多くの特徴も持っています。『みたま』の实在性が強調され—それは臍の奥にあるということですが—その死後の存続とこの世への輪廻が教えられます。道友達は、『みたまを磨き』その性(しょう)を完全ならしめるように教示されますが、心は『みたま』に対しては、第二次的なものに見做されるのです。また、彼等は、世の

of new religions appeared -- hundreds of them, in fact. Many of them were short-lived, but many have persisted until today.

These religions are extremely diverse. Many of them contain elements of Buddhism and Shinto. Most of them place a greater emphasis on perfecting life here on earth than is found in traditional Buddhism. There is a greater optimism in them regarding the possibility of happiness here and now. Some of them, like Seicho-no-ye, are "metaphysical" religions -- which is to say, they stress the power of positive thinking.

It was my good fortune, while in Japan, to come into personal contact with Atarashii-Michi, one of these new religious movements, and with its founders: Mr. Tenson Matsuki and his wife, who has taken the name of Mme. Tennin. Atarashii-Michi -- or New Path -- is not, they insist, a religion. But this is probably a question of semantics or definition. Certainly it is not a religion if we define religion as something that has a set of fixed, obligatory beliefs, or dogma; a network of churches; and a paid priesthood or clergy. On the other hand it has many characteristics that seem to be appropriately described as a religion. The reality of the soul is stressed (they say it resides under the navel); and its continued existence after death and repeated reincarnations on earth is taught. The followers are instructed to "polish their souls", or perfect their natures, the mind being regarded as

中における使命即ち、日本を現在の唯物主義的な、頹廢的な状態から救い出し、文明再建の手助けをすることを教えられます。

“新しい道”は色々の理由で、私には興味がありました。その第一は、その強い社会的意識です。松木氏は言う。“天国に入るために、この地上を天国とするのが我々の義務である”と。第二は、その断固とした、靈魂的な内容です。天人女史は、相当な靈的能力を持った人だと言われ、この活動に加わっている人達の個人指導は、その人達の問題と、その最上の解決を見透し的に認知するといった性質を持つものであると言われて

います。

日本に着いて二三日後に、私は大阪の郊外にある“新しい道”の本部、錬成センターへ案内されました。そこは大阪という工業都市の、熱っぽい行き来の中を通過して来たあとでは、落ち着いて静かなオアシスでした。私は松木氏に、それよりも前に、東京で会ったことがあります。松木氏は高い知性を持った大変親切な人で、その活気の溢れた、ダイナミックなスピーチは、これが80才の人かとその年齢を誤解させる程です。センターは外側に美しい庭があり、内部には広い食堂と、もっと広々とした、優雅な同じような様式の集会室が程よく備えられています。そこに有志者として仕事をしている人達は、よそにある他の宗教のセンターで見たのと同じ無私の献身を、その態度動作に示していました。

然し、私の“新しい道”訪問の本当の重要場面は天人女史との会合でした。私は彼女を小柄な女性とお見受けしました。もし、この団体で発行されている小冊子で読んでいなかったら、もう70才だとは見当がつけ

secondary to the soul. They are also taught that they have a mission in the world: to redeem Japan from its present materialistic, decadent state and to help rebuild civilization.

To me, Atarashii-Michi was of interest for several reasons: 1st) its strong social consciousness ("In order to get into heaven," Mr. Matsuki says, "it is our duty to make of this world a heaven.") and 2nd) its pronounced psychic component. Mme. Tennin is said to be a psychic of considerable capacity, and her personal guidance of individuals who join the movement is said to be in the nature of clairvoyant perception of their problems and their best solution.

A few days after I arrived in Japan I was taken to the Atarashii-Michi headquarters and training center in the suburbs of Osaka: an oasis of tranquillity after the hectic traffic of that industrial city. I had previously met Mr. Matsuki in Tokyo: a highly intelligent and very kindly man whose vigor and dynamic speech belie his 80 years. The center had lovely gardens outside, and was well-appointed within, with a spacious dining hall and an even more spacious and elegant meeting room. The people who worked there as volunteers showed in their demeanor the same kind of selfless dedication I had seen in other religious centers elsewhere.

But it was meeting Mme. Tennin that was a true highlight of

られなかったでしょう。彼女は繊細優美な、貴族的な顔の持主で、黒い着物に灰色の帯を締めた彼女は、慎み深い、上品な日本女性の真髓を体現していました。その目は多くの苦痛を味わった目でしたが、然し、それでもなお今にも笑いそうな目でもありました。

天人女史は52才の時に不思議な靈的体験をしたと言われています。それは内気な、氣どることのない、日本の家庭の主婦、幼稚園の保母から宗教活動の創始者に変る体験でした。彼女の声でない声彼女の体を通して話かけ、自己錬成のために免れることの出来ないいろいろなことからを行うことを彼女に命じました。その声は毎日彼女に語りかけ、数年の間彼女はその指図に素直に従いました。しまいにはとうとう他人に対して自己錬成を教えることとなりました。その発端に於て人間放れしている声のことを普通一般人に話すということは、洋の東西を問わず、懐疑的な輕蔑を覚悟の上でやらねばならないことなのです。心靈研究の歴史に精通している人達は、既に、こういった声の効果と確実性について遺憾なく実証された多くの事例のあることを知っています。ソクラテスとジャンヌダルクは、二つの初期の例です。当代においては、同じように傑出した二つの例があります。その一つは、ブラジルの並外れた心靈治療者、ジョーズ・アリゴで、今一つは、ゼロックスの発明者、チェスター・カールソンです。

1971年の初め自動車事故で死んだアリゴは、処方を与えて、色々の手術一時には眼の手術さえも一を電光石火の速さで行いました。彼は左の耳に聞える、死んだドイツ人の医師の声によって指導されているのだと

my visit there. I found her to be a tiny lady, whom I would not have guessed to be 70 years old if I had not read it in a small booklet published by the society. She had a delicate, aristocratic face and, in her black kimono and grey obi, personified the very essence of the modest, gentle Japanese lady. Her eyes were eyes that had known much pain, but which were capable none the less of laughter.

Mme. Tennin is said to have had a strange psychic experience when she was 52 years old: an experience that transformed a shy, unassuming Japanese housewife and kindergarten teacher into the founder of a religious movement. A voice, not her own, spoke through her and commanded her to do certain things by way of self-discipline. The voice spoke to her daily, and for years she obeyed its instruction. Finally she was led to the teaching of self-discipline to others.

To talk of voices, not human in origin, to the average citizen, either in the East or the West, is to risk skeptical disdain. Yet persons acquainted with the history of psychic research know that there have been a number of well-documented cases of the efficacy and authenticity of such voices. Socrates and Joan of Arc are two early examples. In contemporary times, there are two equally outstanding examples: Jose Arrigo, the extraordinary psychic healer of Brazil, and Chester Carlson, the inventor of the Xerox machine.

言いました。チェスター・カールソンは、その数百万ドルの発明が、ある晩おそく自宅の研究室ではっきり聞えた、しかも、超三次元の世界からの心霊と自認する声によって教えられたということ、その死の床で認めました。この発明を一般大衆に許可するに当り、カールソンは慎重にも、心霊研究に多額の金を寄附することによって、自分が心霊の世界に恩義として感じていたものを償おうとしました。

19年前、天人女史を通して語り始めたと言われるその声は、どんな時にも、今なお毎夜、`新しい道、センターの`紫の間、と呼ばれる部屋で催される錬成会の間中語り続けています。通常列席する 150人乃至 200人の中から10人程が、その声の指導を受けるために選ばれます。

私は錬成会が開かれている時に一度出席して薄明りの中で畳の上に坐っている約 200 人程の黒手の着物を着た男の人達の集団に話し、次いでその晩は、10人の選ばれた人達に語っている時のその声を聞きました。それは、不思議な、強い興味をそそる忘れ難い経験でした。私は日本語を知らないことを、その晩、愈々以て残念に思いました。私はその神託がどんなものであったか、また、それがどれほど正確に授けられた通信であったか知る由もありませんでした。それに続く何日かの中に、私はさまざまなメンバーからその過去の体験について多くの証言を聞きました。ある人達は、女史は正確に躰の状態を診断したと言い、また、他の人達は、女史は正確に事件を豫言し、或は心理学上の問題を正確に解きほぐして解決したと語りました。時間が不充分であったことと言語の障壁のため、私はこれらの事例を深く掘り下げて研究することが出来ませ

Arrigo, who was killed in an auto accident early in 1971, gave his prescriptions and performed his surgeries -- even eye surgery -- with lightning rapidity. He said that he was guided by the voice (heard in his left ear) of a deceased German physician. Chester Carlson admitted on his death bed that his multi-million dollar invention was given him late one night in his home laboratory by a Voice which he clearly heard and which identified itself as a spirit from another dimension. Cautious about admitting this to the general public, Carlson tried to pay what he felt was his debt to the spirit world by giving great sums of money towards psychic research.

In any case, the Voice which, they say, began to speak through Mme. Tennin 19 years ago, still continues to do so nightly, in the training sessions held in the Violet Room of the Atarashii-Michi Center. Ten persons are chosen, out of the 150 or 200 who usually attend, to receive the guidance of the Voice.

I attended one of these sessions and heard the Voice as it addressed the assembled company of about 200 black-robed men, sitting on the tatami mats in the dim light, and then spoke to the ten chosen persons for the evening. It was a strange, compelling, and unforgettable experience. I regretted more than ever that evening my ignorance of the Japanese language. I had no way of knowing what the spirit messages were or how accurately they might be giving information. In the following days I heard many testimonies from various members as to experience they had

んでした。

新しい道、のメンバーは、大抵が可成り教養のある社会的レベルから集って来ているように私には思えます。私は幾人かの医師や、教授や、仕事に非常に活動的なその他の職業人に会いました。彼女の心霊的能力に対するその人達の評価が全く素朴だからだとのみは言えないと推測するのは尤もなことだと思えるのです。で、私は彼女が大した、本ものの心霊的な天賦の才能を持っているに違いないと推量し度いのです。確かに彼女は精神力の人です。そして、この道の活動が、これまでに随順者が増えながら—現在は約16,000人のメンバーを擁している—殆ど20年に近い間存続して来たという事実は、ある種の確実な精神的衝撃のあることを示していると思えましょう。

私は3週間日本にいましたが、いっそ3ヶ月いた方がよかったと思っています。3年いたとしても日本の芸術的及び宗教的な資源を研究しつくすには充分でなかったでしょう。日本列島はカリフォルニア州よりもまだ小さな面積です。そこで、クリストファ・マーロウの⁴ 小さな部屋の中の無限の富、という名文句が心の中に浮んで来ます。日本の美は魔術的です。その文化的富は莫大です。そして、大多数の日本人の、まぎれもない唯物主義と無目的性—それは至る所の、今日20世紀の人々を象徴するものですが—の背後には、新旧両様の日本の精神的源泉が、力強くもあり、活気に溢れてもいます。神道はインスピレーションの、永遠の古い源泉の一つであり、⁵ 新しい道、は、優れた新しい源泉の一つです。そこで、スモッグや、河川の汚濁や、交通地獄や、愚かなパチン

had in past years; some told me that Mme. Tennin had correctly diagnosed a physical condition; others that she had correctly predicted an event, or accurately untangled a psychological problem. Lack of time and the language barrier made it impossible for me to study these cases in depth.

The members of Atarashii-Michi seem to come for the most part from the well educated level of society; I met a number of doctors, professors, and other professional people who were very active in its work. It seems reasonable to infer that their judgment of her psychic capacities was not completely naive, and so I would assume that she must have some genuine psychic gifts. Certainly she is a woman of spiritual power, and the fact that the movement has persisted for almost 20 years, with an ever-growing following (it now has about 16,000 members) would seem to indicate some kind of authentic spiritual impulse.

I would like to have spent three months in Japan rather than the three weeks that I did. Three years would not have been enough to exhaust its artistic and religious resources.

The Japanese islands are in area less than the area of the state of California, and the phrase of Christopher Marlowe's "infinite riches in a little room" comes to mind. Japan's natural beauty is magical. Its cultural riches are enormous; and --behind the unmistakable materialism and aimlessness of many of its people, typical of many 20th century people everywhere-- its spiri-

コ熱や、その他私が日本で見たり感じたりした諸々の消極的な事柄が存するにも拘らず、私はどちらかと言うと、悲観よりは楽観の感じを抱いて日本を去ったのです。私は、日本が未来の精神文明に重要な貢献をなすことを切に待望して止みません。

ジナ・サーミナラ

1971年10月

カリフォルニア州、ロス、アルトス

1971年10月29日

松木天村様

貴方は私に日本と伊勢神宮と新しい道の運動についての印象を10頁か12頁位のものに書いてほしいというように御要望だったと私は了承していました。

書き上げたものを御送りいたします。これが貴意に召して貴方と貴方の素晴らしい運動にいくらかでもお役に立てば幸甚です。

貴方がこれを日本語もしくは英語で出版される計画がおりかどうかを存知いたし度いと思います。

御令嬢と天人女史に何卒よろしく御鳳声下さい。

御多幸をお祈り申し上げます。

敬具

ジナ・サーミナラ

追伸——「日本見たまま」というのは最適の題名ではないかも知れません。寧ろ「日本の精神的富」とした方が或はより一層いいかと思ひます。

(註) 誤り訳すところがありましたらその責は私にあります。御教示願えれば幸です。(矢野生)

tual wellsprings, both old and new, are strong and vital.
Shinto is one of the enduring old wellsprings of inspiration;
Atarashii-Michi is one of the distinguished new ones.

And so --despite the smog, the river pollution, the monstrous traffic, the mindless fever of Pachinko playing, and other negative things I saw or sensed in Japan -- I came away with a feeling of optimism rather than pessimism. I look to Japan, in fact, for an important contribution to the spiritual civilization of the future.

Gina Cerminara

Los Altos, California

October, 1971

Dear Mr. Matsuki:

It was my understanding that you wished me to write about 10 or 12 pages regarding my impressions of Japan, of the Ise Shrine, and of the Atarashii-Michi movement.

I am sending you what I have written. I hope that you will like it, and that it may do you and your fine movement some good.

I would be interested in knowing whether you plan to publish it in Japanese or in English.

Please give my greetings to your daughter and to Mme. Tennin!

My very best wishes to you.

sincerely yours,

Gina Cerminara

P. S. "Japan As I Saw It" may not be the best title. Perhaps "Spiritual Riches of Japan" might be better.

臥薪嘗胆

八木隆明

は じ め に

最近、私は二人の明治の人の生涯を知って感銘を受けた。その一人を書物の中で知り、もう一人には「新しい道」の「場」でお会いした。

しかし、そのいきさつを述べる前に、題として掲げた「臥薪嘗胆」という言葉について触れたい。支那の春秋時代の故事に由来する言葉であることはよく知られている。呉王夫差は、父のかたきの越王勾践に對する報復の志を忘れまいとして、常にたきぎの上に寝て身を苦しめ、そして夫差に敗れた勾践が、今度は胆を室内にかけ、これを嘗めて報復の志の鈍るのを戒めたという。そこから転じて、目的を果すために苦勞し努力する意味合いにもなっている。(「新潮国語辞典」による)しかし、そういう故事来歴よりも、この難しい言葉が全国民の合言葉となつて日本人全体

がおのれ自身を引き締めたという時代が日本にあつたということが、そうして、再びそのような厳しい時代が目睫の間に迫っているということが、重要なことなのである。

そういう時代があつたというのは、いうまでもなく日清戦争の明治二十七、八年頃のことである。この戦争は日本にとつては筋の通つたものであつた。のちに日露戦争では非戦論を唱えた基督者内村鑑三も、この日清戦争では外国人の無理解を憤り、「日清戦争の義」と題する一文を発表し、これが正義の戦いであることを主張した。結果は極東の小さな島国の日本が、歴史を誇る清国をももの見事に敗つてしまつたのである。明治二十八年四月、下関において日清講和条約が調印せられた。しかるに、露・独・仏の三国政府から物言いがついて、日本は国民の血を流して獲得した遼東半島を手離す羽目となつた。いわゆる「三国干渉」である。世論は沸騰した。だれもが腸の煮え返る思いであつた。その時この「臥薪嘗胆」という言葉が思い出された。

国民は怒りを押え貧しい生活の中で、気をはりつめて耐え忍び時機の到来をまつた。「これ以後の十年間は、日本人が有史以来、いちばん緊張したときだったかも知れない。この隠忍自重は、日露戦争のときに見事に結実した。日本は、三国干渉の音頭とりだったロシアをうちまかし、世界史の上に象徴的な一ページを書くことができたからである。」

(江藤淳氏)

明治の御治世には、このように日本国民全体が「臥薪嘗胆」の生活を送った一時代があったが、明治の人々の個々の人生も、多くはそれ／＼の「臥薪嘗胆」のひと節ひとふしを持っていることが、一つの特色のように思われる。それが明治人の気骨といわれるものを形成したのではなからうか。

八十翁道友の手紙

さて、私の手許に数通の手紙がある。いづれも、今年八十三歳になられた道友武藤秀吉氏からのものである。同氏と私との交友は、昨年しんねんの九月の中旬にひよっこりと写真機を肩に「場」(新しい道センター)を尋ねてこられた時にはじまる。武藤氏からいただいた最初の手紙には、次のように認められている。

「謹啓 去る九月十三日、突然センターに御訪問申し上げ、長時間お話を承り、その上帰りには駅までお送り下され厚く御礼を申し上げます。その時の写真不出来ですがお送り申し上げます。」

また、昨日の九月二十六日は、九段、武道館に於きまして、伊勢遷宮奉讃の「新しい道」提唱講演会に出席させていただきまして厚く御礼申し上げます。ただ老生八十二歳であり、少し難聴で十分には聞きとれませんでした。松木先生のお話は、先生の二、三の著書によりその大要を承っていますので、直接先生のお声でこの耳にお聞きして良く判りました。

(中略)

昨年(昭和四十五年)の八月十五日、同じ武道館で、天皇皇后両陛下の御臨席のもとに挙行されました全国戦没者追悼式に参列致しました。その帰路、靖国神社に参拝した際、拝殿に

身はいかになるともいくさどめけり

ただたふれゆく民をおもひて

の御製を拝して参りました。

まさに、迫水久常先生のお話の如く、自らみづか十字架に赴かれた陛下であったでしょう。そして、マッカーサー元帥す

ら、天皇の御神徳に感激して、戦勝国側の主張する天皇を裁判にかける事に絶対反対したのでしよう。しかるに、本日の陛下の欧州への御旅行に際し、わが国内において学生労働者の数団が大きなプラカードを立て、戦犯天皇の欧州旅行反対の横幕を持って、デモを行なっているのを見て、現世の様相に何ともいえぬ驚きを感じました。

しかし、本日、陛下の御出発に際しては、台風二十九号も遠くの海上に去り、昨夜の大降雨も嘘のごとくに晴れ渡り、陛下の御出発の前途を祝福するごとく、天帝も快晴一点の雲なき朝としてお見送りしている様に感じました。

私の事を申して甚だ失礼ですが、私が現役軍人を退きましたのは、父の死に会して父の仕事を継ぐためでしたが、その私の最後の御奉公申し上げたのが、昭和六年熊本地方における陸軍特別大演習で、陛下の御身辺の警護でありました。昭和五年には浜口首相が駅頭で暴漢に狙撃される事件があり、昭和六年は満州事変勃発の年で風雲ただならぬ時であり、心配したのでありましたが、辛い事故なく終りました。私は御立所で陛下の側近に奉仕していました。その時の御宴の席で、陛下はお煙草も全く召し上らないし、お飲物も三ツ矢サイダーであるので、お聞きしましたとこ

ろ『私は酒も煙草も必要ではありません。』との事で、乾杯もサイダーを持ってしておられました。（後略）」

武藤氏は元軍人である。砲兵隊勤務であった。いつも大砲のそばで号令をかけていたので耳を悪くされた。そして、この昭和六年の大演習で、陛下のお側近くに警護の任を務められたのち、一旦、軍を依願退官された。その後、政治家として活躍されていたが、昭和十四年、五十歳にて満州国官吏となられた。しかし、戦況の拡大とともにすべては軍の統轄するところとなり、再び軍籍に入れられ、終戦前年には満州国軍参謀長になられたが、これは氏のためには不運であった。おそらく、この職責のためであろうソ連に抑留され、ソ連刑法にて十年の判決を受けて服役、刑期満了して昭和三十年四月に日本へ帰ってこられた。この十年間の御苦労は並大抵のことではなかった筈である。何をめどう（目標）に耐えてこられたのか私には思いもつかぬが、武藤氏はこの間の苦労については黙しておられる。だが、それはまさに「臥薪嘗胆」の日々であったに違いない。だから、武藤氏は、松木天村先生について、次のように記されているのに特に強い共感を覚えられたようである。

「やがて祖国日本の敗戦と運命を同じくして、（天村）先生は精神的にも物質的にも、その一切を失しなわれて空

洞廢墟と化し、苦悶の果てに『五十年顧みて愚か寒苦鳥』の一句を遺し、自決の場を求めて武蔵野の櫟林を彷徨さまよわれたのであります。と。(「矛盾を越えて」参照)

帰国後の武藤氏は、働ける間は働こうと懸命に働いてこられたが、現今の世相を見るにつけ、勤労精神の欠如、道義の頹廢、倫理の破滅を感じざるを得ず、人造り国造りに心魂を注ぎたく、それにはまず日本の眞の建国、わが皇祖の發祥の歴史を明らかにする必要を感じられて、ある靈能者の「神道原典」に基いて歴史研究に没頭してこられた。そして、研究調査のため写真機を肩に各地を飛び廻つておられる道すがら、「新しい道」の道友と知り合い、この道について聞く機会を得られた。その結果、東京都下に住んでおられる同氏が、大阪南郊羽曳野市にある「新しい道センター」を、ひとりで尋ねてこられたわけである。

はじめは歴史探究の一過程のつもりで来られたようであるが、すぐにこの「新しい道」こそ、眞の人造り国造りの「行ぎやう」をすることで感得されて、再び来阪されて、天人女史の御明断を受けられたが、その際、非常な感動を覚えられたのである。次のようにその感想を書き送つてこられた。

「ただこんな事を申して、おやかたさま(天人女史)の

お叱りを受けるかもわかりませんが、丁度、私の母の姿に接している気がしますので、そういう意味でも毎月出席をさせていたいただきたいと存じています。

私の生い立ちについて一言申し述べることをお許し下さい。

私の母の里は会津若松でした。母が生後三ヶ月の時、母の両親は明治元年の会津城落城の悲劇に際会し、その乳児を武藤家に托し、祖父二十七歳、祖母二十四歳で自害致しました。その祖母はおそらく私の生母に生き写しであつたらうと存じます。その私の生母が、おやかたさまのお姿に顔かたちが似ていたのです。

おやかたさまの申される様にヘソは先祖につながり、私の身については若くして自刃した祖父母が、常々私の身の上を置いてくださっていると存じています。目下八十二歳の老体ですが、すこぶる健康に毎日活動しています。おやかたさまのお話が充分には聞きとれなくとも、お顔おかたちから心に聞かしていただけると存じ、出来るだけ羽曳野に参らしていただきます。」

ある明治人の遺書

不思議なことに、私は、この何通目かの武藤氏よりの便りを受けとる少し前に、「ある明治人の記録」副題に「会津人柴五郎の遺書」とある一冊の本を手に入れていた。

「いくたびか筆とれども、胸塞がり涙さきだちて綴るにたえず、むなく年を過して齡よわいすでに八十路やそじを越えたり」という言葉で書きおこされているこの遺書は、会津藩士の子として生れ、鶴ヶ城落城の際、祖母、母、姉を失い、自身は母のはからいで辛うじて死におくれ、その後流浪に近い惨苦の生活のうちに、帝国陸軍軍人となり、北清事変では北京駐在武官として沈着な行動により世界各国の賞讃を浴び、陸軍大将、軍事参議官として栄達を極め、第二次大戦については「中国人は信用と面子メンツを貴びます。それなのに、日本は彼等の信用をいくたびも裏切つたし面子も汚しました。こんなことで、大東亜共栄圏の建設など口で唱えても、彼等についてはこないでしょう」と緒戦からすでに日本の敗戦を予見され、その通りに日本が敗れた年の暮に八十七歳の生涯を閉じられた柴五郎氏が、会津戦争の犠牲となつた肉親の菩提を弔うために、その死の数年前に筆をとりられたものであつた。

白虎隊の悲劇はあまりにも有名であるが、鶴ヶ城落城により、会津の旧藩士達が、その後幾十年にも亘り、いか

に苛酷な運命を耐え忍ばねばならなかつたかについては知られるところが少い。

幕末、幕府は、京都の治安を守るために苦慮して、親藩中から京都守護職を選んでこれにあたらせようとし、会津二十万石藩主松平容保かたもりが、この要職に選ばれた。家老達は幕府の形勢が非であると述べて、藩主にこれを辞退せしめようとしたが、「そもそも我家には、宗家（徳川將軍家）と盛衰存亡をともにすべしという藩祖公の遺訓がある。そのうえ、数代隆恩に浴していることを、余不肖といえども一日も報恩を忘れたことはない」という容保公の言葉に、このうえは義の重きにつくばかりと、君臣もろともに京都の地を死場所にしようと議は決したという。（東洋文庫「京都守護職始末」による）

京都に着任した容保公は、騒然たる都を鎮定するために精魂を傾けたが、その仁義礼節を重んずる人柄により孝明天皇の寵愛厚く、公武合体政策遂行上の京都での責任者となつてしまった。この頃、「たやすからざる世に武士ぶしの忠誠の心を喜びてよめる」とて御製まで賜っている容保公が、数年ののちには、朝敵となつて官軍の前に降伏するの悲運に会わねばならなかつたとは、何たる歴史の皮肉であろうか。

柴五郎氏らに会津旧藩士の人々の「臥薪嘗胆」の日々もまた、この会津落城の日からはじまったのである。柴氏の遺書には次のように読める。

「過ぎてはや久しきことなるかな、七十有余年の昔なり。

郷土会津にありて余が十歳のおり、幕府すでに大政奉還を上し、藩公また守護職を辞して、会津城下に謹慎せらるる。

新しき時代の静かに開かるるよと教えられしに、いかなることのありしか、子供心にわからぬまま、朝敵よ賊軍よと汚名を着せられ、会津藩民言語に絶する狼藉を被りたること、脳裡に刻まれて消えず。」

「余幼くして煩瑣なる政情を知らず、太平三百年の夢破れて初めて世事の難きを知る。男子にとりて回天の世に生まれること甲斐あることなれど、ああ自刃して果てたる祖母、母、姉妹の犠牲、何をもってか償わん。また城下にありし百姓、町人、何の科とがなきにかかわらず家を焼かれ、財を奪われ、強殺強姦の憂目のみたること、痛恨の極みなり。」

「落城後、俘虜となり、下北半島の火山灰地に移封されてのちは、着のみ着のまま、日々の糧かてにも窮し、伏するに憚とがなく、耕すに鋏なく、まこと乞食にも劣る有様にて、草の根を噛み、氷点下二十度の寒風に簾むしろを張りて生きながらえし辛酸の年月、いつしか歴史の流れに消えうせて、いま

は知る人もまれとなれり。

悲運なりし地下の祖母、父母、姉妹の靈前に伏して思慕の情やるかたなく、この一文を献ずるは血を吐く思いなり。」

母 性 と 婦 徳

柴氏が母の慈愛を懐しんでの追憶は、同時にまた当時の家庭教育の美風をよく伝えているので、更に引用したい。

「いつのことか忘れたれど、ある朝のことなり。つねのごとく姉が余の髪を結びおりしとき、余がわがまを言いて争いたるを母が聞きとがめ、いたく姉を叱責し、すでに褒賞として与えたる新調の晴着を返却せよと命ぜらる。姉が母の前に晴着を置きて謝罪せる姿、いまもなお余の眼底にありて消えず、後悔の念湧くをおほゆ。そのおり、余が悪しきにかかわらず、知らぬ顔して謝罪せざりしこと、幼きころとはいえはずかしきことなり。」

母はかくもきびしき気性の人にて、賢夫人として尊敬され、余の躰はほとんど母に負うところなれど、一面慈愛にあふるる母性として余を愛いし、余を膝に抱きて桃太郎などの童話、百人一首、落花の雪の長歌などくりかえし語り

聞かせ、自らも楽しみおりに思われる。楠公父子、二十四孝などの話もみな母より数えられ、いまなお一部を暗記しおいて、それを口にすれば、なつかしきかな、母の温か味を感じて思慕の情やるかたなし。

他藩もお、むね同様なりしと思わるるも、徳川三百年の封建の体制は、公私を問わず、その組織と生活をすみずみまでも厳格に律したるも、余等幼き者にとりてさえ、さして窮屈の感なし。その体制に添うがごとくに幼時より訓育されたるためと思わる。」

柴氏にしても武藤氏にしても、老境に入られて、なおひたすら亡き母を偲び慕われる純な気持は美しい。

天人女史の「教の泉」の中に

「女には婦徳という徳を天からうけている」

とされるしているが、臥薪嘗胆に耐え、世の汚濁に染まらず、おのが信念を貫いて真直ぐに人生を歩まれた二人の明治の人の背後には、その母の婦徳が隠されているように思われる。

新 し い 道

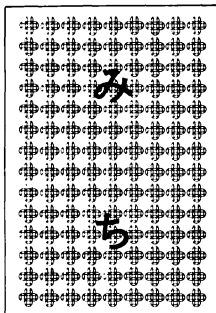
「臥薪嘗胆」ということの本質は耐え忍ぶということにある。明治の人の生き方の見事さは逆境にあってこれを耐え忍ぶ

ことの見事さにあるように思う。今上陛下もまた、自分の身はいかになろうとも、倒れゆく国民をあわれと思召して、率先「忍びがたきを忍んで」終戦の御聖断を下されたことにより、現在の日本の繁栄があるのである。天皇が自ら十字架にか、り国民を贖われたのである。

「新しい道」が今日あるのもまた、しかりである。しあわせであるべき筈であった松木家が、一家をあげて、いわれなき困苦屈辱に長い年月耐えてこられることがなければ、種から根となり、「新しい道」へと発展することはなかったのである。一粒の種が地に落ちて死んだ（自分を無にした）ればこそ、多くの実を結ぶに至ったのである。

天人女史が、ある人にいわれた言葉の中に「男らしさの方向をやり変えなさい。」というお諭しがある。

功績は何んでも自分の手柄にし、責任は他に転嫁するのが今の世の習いであって、自己主張することが「男らしさ」と勘違いされているが、「新しい道」の行き方は全くこれとは裏腹である。人を立て自らは下座をして、耐え忍ぶことを学ぶ道である。こういう道に喜んで馳せ参じてこそ、男の中の男として、将来の国の要人たるべき修業も可能となるのではあるまいか。日本という国にとってそういう人材が今ほど求められている時はないのである。（終）



親愛なる サーミナラ女史

松木（天村）先生の御依頼により、「新しい道」主催の東京大講演会場での写真をお届けします。私はあなたにお目にかかれて、新しい道の「場」や奈良や大阪などで三日間を一緒に過ごせた事を喜んでおります。

奈良では石燈籠で有名な春日大社に参りました。あちらこちらによく馴れた鹿がたむろしており、あなたは鹿せんべいをおやりになつて嬉しそうでした。また法隆寺へも行きました。その金堂、五重塔及び中門は現存している世界で最も古い木造建築物です。

石に刻まれていた俳句は次のようなものでした。
柿食えば 鐘がなるなり
法隆寺

だんだん涼しくなり、紅葉の色も深くなってきました。あなたのお国も秋は美しいと思います。伊勢神宮へも参拝なさいました。伊勢神宮と「新しい道」との関係についてまだいくらか疑問をお持ちなのではないかと心配しております。実際問題として伊勢神宮と新しい道センターとは何の関係もありません。しかし、神道それ自体と、日本人の魂を修煉してまず日本の国を良くしようという

「新しい道」との関係については少し説明を要すると思います。日本民族にはアメリカとは異なる伝統的な持味があります。このような伝統の中で生きる日本人は昔から自然のままに自然とともに生きる生活を人間の「道」として尊んできました。これを「神ながら

の道」といいます。「神ながら」とは日常の生活が神と偕にあるということですが、これが神道の本質です。しかし、現在の神道はその本質を失っていると思います。大抵の神社は単なる儀式を行うだけの存在です。伊勢神宮は違います。伊勢神宮には日本の伝統が生きています。これが今回の遷宮に際して私達が伊勢神宮に奉讃した理由です。

今や「神ながらの道」は「新しい道」として松木天人女史により現在の日本に甦らされつつあります。この問題についてなおお知りになりたい点があればお知らせ下さい。私に出来る限りはお答えしたいと思います。

一九七〇年一〇月二十五日
八木 隆明 敬具

October 25, 1971

Dear Dr. Germaine

At Dr. Futaki's request I will send you some pictures taken at the shrine of Atarashi Fichi (New-Ishu).

I was so delighted to meet you and to spend three days with you in the "field" (Atarashi Fichi Center) and in Nara and in Osaka City. In Nara we went to the Forum Shrine which is famous for its stone lantern. Here and there we found a lot of tame deer; you were delighted to give them crackers. We went to the Horyuji temple too. In Golden Hall, Five storied Pagoda and Middle Gate are the oldest wooden structures now existing in the world. "Mikoto" (Japanese short poem) served as an inscription on a stone as follows:-----

"Fukiyueh-
Fukueh naru naru
Horyuji =
(The temple-bell tolls
then it is the deer's sermon-----
Ancient Horyuji here)

It is getting cooler and leaves are turning yellow or red dry by day. I think that autumn in your country is wonderful too.

You visited the Shrine with our members. I'm concerned about that you may be having still some questions about the relationship between the shrine and Atarashi Fichi. Practically there is no relationship between the Shrine and our center, but it will be necessary to send a few words on the relationship between Shinto itself and our Faith which surmises is to improve the country of Japan, first of all nations, by training the souls of the Japanese people. The Japanese race has its own tradition different from those of America. The Japanese living in such a tradition has from ancient times set a high value on the life living with Future regarding it the right "way" for men to follow. This way has been termed "Mikoto-no-Fichi". "Mikoto-no-Fichi" means that we live with God in our daily life. This is the true characteristic of Shintoinism. But Shinto of today seems to have lost nature. Part of the Shinto tradition have merely some superficial. The Shrine is "revel". We believe that in the Shrine the Japanese tradition is still alive. This is why we contribute the Shrine for the occasion of the celebrating.

P.S. "Mikoto-no-Fichi" has been revised in Atarashi Fichi by the Tenjin Festival in the present day of Japan. If there is anything you want to know about this problem, please let me know and I'll answer you as well as I can.

Sincerely yours
TAKASHI YAM

松木天村先生

御寒く成りました。御変わりありませんか。

お伺い申し上げます。私は只今パリに居ります。十月八日の祭日後、十日に来て一度帰り、又本日十四日に来て、パリヒロタ店舗工場建設の為、長男喜八郎、在住社員藤巻真一を連れて来て努力中であります。

幸い私の造りました洋菓子が大好評で、十月開店の店が五百人の招待客の御茶菓子に使用して戴き大好評であり、クリスマス用に沢山注文戴きました。

右の様な次第で、新しい道の場に戻れぬ事が残念であります。何卒御許しの程願います。

去る九月二十八日、おやかたさまの御誕生日反省させられました。おやかたさまの御霊力の厳しさをおやがたさまの御霊力に厳しさを身をもって体験致しました。

御伊勢さんに

何人がおわしますか

知らねども

たゞありがたく涙こぼれるの歌があります。私は左の様に感じました。

新しい道は、おやかたさまが、おわしますからありますが、皆嬉んで戻りくるなり。

おやかたさまの昭和四十六年十月十七日、教に従ふものは嬉ぶ、逆う者は苦しむと云う事を深く感じました。

日本に帰つたら、早速場に戻ります。

パリにて 広田 定一

松木天村先生



近畿迫水会

十二月廿七日 島本 敬一

拝啓、向寒の砌、益々御壮栄の段大賀に存じます。

物質文明の発展に逆比例して、精神文化の頹廢を嘆いて居ります

中に、心を豊かにする運動と人助けをされて居られます御寄篤に對し、謹んで敬服申し上げます。

扱、去る十二月二日近畿迫水会総会の節、出席会員の奥村貴雄氏へ大阪市立平野小学校教諭が、御頒布いたゞいた、「あさ」を奉読され、左記の通り御芳名による讃歌を謹詠され、小生迄送って来られましたのでお伝え申し上げます。

松木天村様

松の木の繁る村里都市巡り

新しき道

天の理を説く

◎懸命論民章

瑞松繁茂羽曳丘
草木緑濃風景勝
謝二天佑一布二教新道
町村民衆慕一德望

松木草垣様
玉垣は清く下草延び繁り
松の大木葉も深緑

賀陽邦寿様
福寿草匂い年賀の友は
笑み陽光燦と
邦も清新

佐藤三蔵様
輔佐行届司大二会
藤橘源平捧信二頼
三省連日診疾二病
秘蔵医書察紙二背

以上は奥村氏独特の漢文であり
ますと付記されて居ります。

御判読の程お願い申し上げます。
先は右お伝え申し上げます。
本年もいよ／＼余日なく、寒さも加わります折柄、御自愛遊ばれ御壮栄にて良きお歳をお迎えな

れます様、祈念申し上げます。

頓首

☆

天村先生様

私は七月につながらせていたゞきまして、日も浅いのでありますが、おやかたさまが、「思うたことはどん／＼発表しなさい」とおっしゃっておいでゞございましたので、私も書かしていたゞいた次第です。天村先生が調和の哲学の八頁に、生物の究極は、今の科学では説明されていない、とお書きになっておられますが、仮りに説明されるときがあります、其のときもまた説明できないものが残るのでありますまいか。

そして、それを繰り返してゆくうちに、科学は遂に行き結ぶのはありますまいか。

なぜに科学は行き結まらなければならぬのでしょうか、私にも其の先が神の世界のように思えてなりません。見えざる神の手を感じずるとも言うのでございませうか。私は過去に、夢と翌日の事実とが一致して不思議に思ったことがあります。それが此の度、急に思い出されてきたのであります。夢は五臓六腑の疲れと申しますが、疲れにより明日起る事が判らう筈がないと思ひます。脳細胞がかすかに動いていたとしまして、体の組織の一部の物的のものに予知するという能力は無いと思ひます。コンピューターなどあります、それは詳細なデータから弾き出される予報でありまして、「予報」と「知る」とでは似ていて天地の違いがあると思ひます。予報は飽くまでも予報であり、「知る」ということは現実其のものであるからであります。見る目の無から現実が発するということは、それは既に物的の次元ではなく、

神祕の領域と思われれます。従つて、求めるものは神祕のものより他にないと思ひます。

無から有が生ずる筈もなければ、奇蹟又は偶然の一致と言ひましても、それは何の根拠もない便宜上の言葉でしかないと思ひます。

私も、そこにみたまがお在すからではなからうかと思わしていたゞきまして、大切に大切に心がけていた次第であります。

私は町を歩いてみますと、誰かれということなしに、どなたにも妙に親しい気持が湧いてきます。これは皆さんが、私と同じようなへそとみたまが有つて、そしてそれがつながっているということなのだらうか、と思つたりするからであります。それにしても美事なまでに似ても似つかぬ兄弟達だと、ふとほ、笑んでくることもあります。

旅先でバスに乗つたことがあります。席が無くて一番後部の吊皮にすがつていましたが、後ろから

一人の青年が長髪をなびかせて單車でしつ／＼してきていました。私は其の青年に、気を付けなさいよ怪我でもしたら大変ですよ、と心のなかで呼びかけている自分に気がきました。こんなことは今までの自分には、かつて一度もなかつたことあります。今までの私なら、男とも女ともつかぬ頭をしてと吐き捨てるようにしていたと思ひます。

私は良い人間とは、自分以外のものに迷惑を掛けないことではなからうかと思ひます。更に良い人間とは、人々を指導し得る人と言うのではなからうかとも思わしていたゞいております。

倅が、近頃のお父さんは元気が無くなつたと言ひます。家内は家内、やはり一日中どなつていて、もらわれないといつものお父さんのような気がしないと言つています。私はたとえ少しづつ、でも、自分の變つてゆく姿がほんとうに嬉しく、しばし、ほんやりと遠く窓

外の雲を眺めることがあります。そして誠に有り難いことだと心から御礼を申し上げています。

私をご紹介して下さいました呉のFさん、私が場に戻る毎に、何かと御親切にして下さる大阪のNさんにも有難く思っております。

おやかたさまの己が身は一番下に置けとの言葉を、私はいましみ／＼と噛みしめています。そして、若し私共が其のような心境に成れるとしましたならば、誰にも、どなたにも、有り難うと言えらと思ひます。野の一木一草、小さい虫にも有り難うと言ひ得るならばとも思ひしております。

天村先生の調和の哲学の二十三頁を読みまして痛いように感じますことは、この植物や動物や自然のお陰で、私共の日々の生活が有るといふこと、植物や動物や自然は、私共人間社会をいさ、かも必要とはしていないといふことであります。それなのに私共は緑の

山肌を削り取ったり、森や林を枯らしたり、動物達の住家を絶やしたり、湖を埋めたりしています。

自然は疲れて日に／＼其のたくましさや失い、人間社会もまた満ちたりていて、これもまた日に／＼荒廃の車を廻していると思ひます。これは私共人間社会が、神の教えを知ろうとしないからだと思います。

然し、神の教えと申ししても、其の神の教えが私にはまだ良くは判りませぬ。神は有りとは確信していても、其の神は私にはまだ良くは判りませぬ。然し私共には、天の御子のおやかたさまがございます。其のみ教えがあります。其のみ声があります。

私は一日も早く場に帰らなければと、ひし／＼と身を感じます。今朝も家内が、あなたは行きたいのでしよう。早く着物を送りなさいと催促してくれています。家内の催足はこれで三度目であります。詫びて済むものではありません。私は近く場に帰らしていた、さま

す。おやかたさまのお叱りは倍にも受けます。

おやかたさまおからだを、お大切になさってください。みちの子

新潟県燕市仲太町

中川 皓策



拝啓、その後益々御清昌の御事とお喜び申し上げます。

過日は、温情あふる、御仕込を戴き、私の人生生活に大いなる希望と勇気が湧き出る思いがいたしまして、感謝に堪えません。私はまことに罪業の深いもので、その

業果を甘受しながら今日に至りましたが、これもおやかた様の御慈悲によって、解脱させて戴き、清水で身滌ぎした心境で日に日に新なる精進をいたしている次第であります。

このたび道友相はかり、天村先生を御迎えする事にして準備を進

めています。これを契期として火の国熊本に、新しい道の運動の突破口をつくりたい所存であります。

御指摘の様に、婦人の覚醒こそ重大時局下の喫緊の要事となり、会場も県婦人会館を選び、中堅婦人の参加を要請している次第であります。先般の御明断に御示し通り、私の天命は一に皇道の宜布であると痛感し、これがためには

皇統を闡明し、万世のために太平を開かんと全世界に宣言されました陛下の御悲願を、次代を担当する若人達に植え付けたいし、一切を捧げている次第であります。何卒一層の御鞭撻を賜る様、懇願いたします。

先は御礼をかね近況御報告申し上げます。人類の一大危局に当り、唯々御自愛を賜る様、合掌を捧げます。

敬白
昭和四十六年六月七日
児玉亀太郎
松木そうえん先生 御座右

編集後記

◇昭和四十八年十一月二十六日(金)の新聞西新聞に、地元羽曳野市の紹介が掲載された。そこに「新し



い道」も紹介されていました。

(写真参照)

◇「あさ」も第十五号を数えることが出来ました。創刊以来五年目を迎えました。

この機会に姿勢を少し変えることに致しました。表に向って歩き出すべく決意いたしました。

◇大変暖かい冬であります。大寒だというのにオーバーも着けずに外出出来ることはまことに結構ではありますが、寒くあるべき時に寒くないのは、何か不安であります。

◇昨年この場を訪問されたトナルド・カーチス博士から近著が贈られて参りました。大阪の道友、医師の八木隆明氏にお願いして書の内容を簡単に紹介していただきました。(七六頁参照)

◇松木天村先生の講演は一時間半に亘る大講演でありました。その一部を抜萃して掲載いたしました。(三四頁)

又今回は京洛の地にふさわしく、和服で演題に立たれました。(三二頁写真参照)

◇花は人に
実は大地に
あたらしい年のこれからの生き方を二行にしてみました。
(高坂記)

あ さ

第 5 卷 第 15 号

昭和47年 2月1日印刷 頒 価 250円

昭和47年 2月10日発行 送 料 45円

発 行 人 矢 野 誠 一
編 集 小 野 佳 二
発 行 所 宗教法人 神光苑出版部 新しい道センター

大阪府羽曳野市はびきの3丁目3番18号

☎ 0729 (56) 7971 (代)

印 刷 所 東 洋 プ リ ン ト 株 式 会 社

堺市海山町4丁目166

☎ 0722 (33) 5785 (代)

新しい道推進の歌

作詩 松木天村

作曲 塚谷晃弘

A. ♩ = 96

B

なんめいのそら きらめきて しーんたなびく はにやがおか
てんおんしょうらい きたれさけ てんちをむすぶ みちのぼぞ

あ あ たれぞしる てん の ば を
ほう ていばんり は せ さん す

C

まつせをてらす せいじゃあり
われらみちのこ いざとにも

「新しい道」推進歌詩

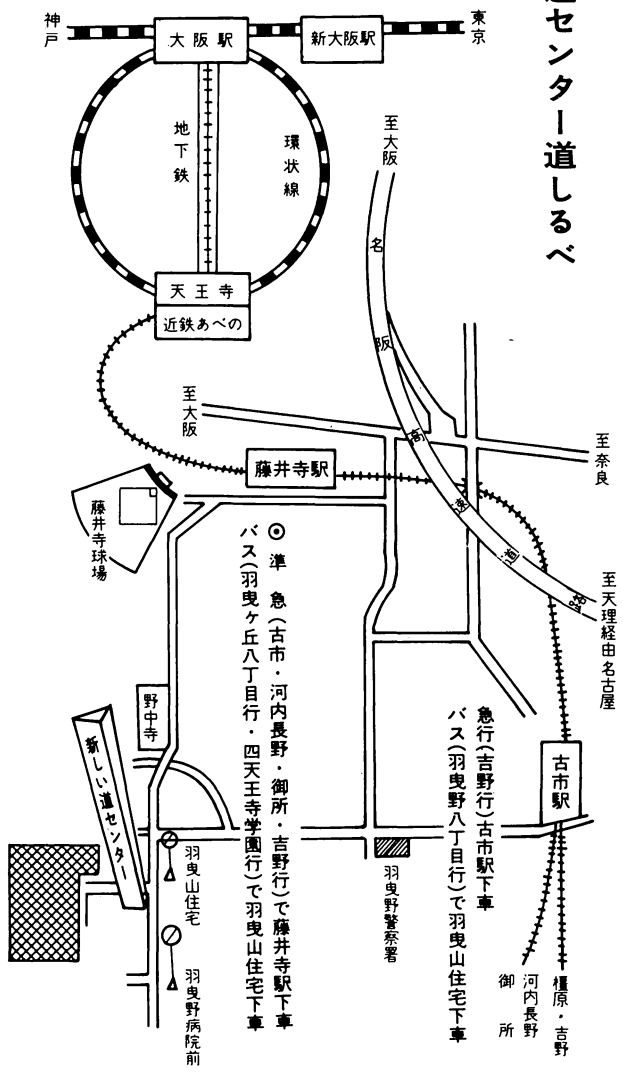
一、南溟の空 きらめきて
鳴呼誰れぞ知る 紫雲たなびく 天地生崗
末世を照す 聖者あり

二、天音松籟 来れ聴け
騁程 万里 馳せ参んず 道の場ぞ
吾ら道の子 いざとにも

三、朝の神光は さんさんと
眞理に徹す 肅氣満つる 神の苑
新たなるもの 道の生れたり

四、おう今にして 起すんば
いざ起ん哉 世直りの秋 近づけり
天の扉は 道の子よ 開けたり

新しい道センター道しるべ



新しい道センター

大阪府羽曳野市はびきの三丁目三番十八号
 TEL 大阪阪南(〇七)一九 7971

ご家庭と企業をつなぐパイプ

山一証券

こんな商品を

- 株 式
- 割 引 債
- 公 社 債
- 国 債
- ユニット投資信託
- オープン投資信託
- 公 社 債投資信託

こんなサービスを

- 保 護 預 り
- 名 義 書 換 え
- 各 種 出 版
- 通 信 取 引
- 各 種 催 物

本社 東京都中央区日本橋兜町1の3 TEL03(668)1101代

山一証券